奈良教育大学

平成27年度 陸前高田市文化遺産調査報告書

平成28年3月

平成27年度　奈良教育大学
ＥＳＤを核とした教員養成の高度化プロジェクト
―教員養成・研修におけるＥＳＤモデルプログラムの開発と普及―

はじめに

「学ぶ喜び」プロジェクトは、平成 24 年度に、教員養成機能の充実・高度化の推進を目的に、文部科学省の「平成 24 年度 概算要求特別経費（プロジェクト分）」の本学の事業としてスタートしました。フルネームは「地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト」といいますが、大変長いので、「学ぶ喜びプロジェクト」と短くして呼んでいます。平成 24 年度に入ってから、「学ぶ喜び」「学び続ける」という語が教育のキーワードなって登場してきましたが、企画段階を含めますと、本事業にはまさに先見の明があったと思われてなりません。

「学び続ける」ためには「学ぶ喜び」が必須であるという考え方は、強いられる学びは続かないという素朴な大原則の理にかなうものであります。では、「学ぶ喜び」はどのような学びから生まれるのでしょうか。それは教育の永遠の課題でもありますが、私たちは、＜自尊心＞ということと＜本物・現地＞ということをまず視野に入れました。その学びが自らの成長に役立ち、さらに社会の役に立つことにつながっているということ、そして教科書（文章・写真）をふまえた後には、実際に現地に行って、自らの目で本物を観る・自らの耳で現地の方のお話を伺うということを大切にした学びを目指しました。また、教育の現場で活用していただける教材や指導案につながる学びを目指しました。

奈良と陸前高田はおよそ 1000 キロの距離があります。現地に向かうのは、どうしても人員や回数が限られてしまいます。しかし、ここまで３年間続けくることができました。それは、陸前高田での学びが、現地に立った学生のみならず、奈良で応援した学生や成果発表等を受けとった学生らの貴重で有益な学びを提供したからに他なりません。

また、文化財と防災の 2 つのテーマが、震災ということを通じて、つながっているということも重要な点であります。さらに、本学の研究の特色を活かすことができたこと、ユネスコスクールである本学の特色、ＥＳＤの推進などが有機的に機能しました。

しかし、これらのことに加え、陸前高田市教育委員会、及川征喜様、松坂泰盛様をはじめとする現地のみなさまのご支援があってはじめて成立した学びであることは、忘れてはなりません。震災後３年がたちましたが、仮設住宅に暮らしておられる方が、全体では未だ８万人おられます。そのことをひとつとっても、私たちは、この学びを続けて行く必要があります。

最後に、あらためて、陸前高田市、陸前高田市教育委員会、本調査をお支えくださった陸前高田市のみなさまに、お礼申しあげます。

プロジェクト　座長

加藤　久雄（国際交流・地域連携担当　副学長）

目　次

はじめに ･･･ 1

2012 年度　陸前高田市文化遺産調査報告概要 ･････････････････････ 3

ＥＳＤ文化遺産教育・防災教育指導案防災教育･････････････････････ 4

ＥＳＤ子ども用教材 ･･･ 20

調査参加者レポート ･･･ 22

2013 年度　陸前高田市文化遺産調査報告概要 ･････････････････････ 41

調査参加者レポート ･･･ 44

ＥＳＤ子ども用教材 ･･･ 56

2014 年度　陸前高田市文化遺産調査報告概要 ･････････････････････ 58

調査参加者レポート ･･･ 62

ＥＳＤ子ども用教材 ･･･ 70

陸前高田市文化遺産調査におけるＥＳＤ教材開発（１）････････････ 72

陸前高田市文化遺産調査におけるＥＳＤ教材開発（２）････････････ 78

陸前高田市文化遺産調査におけるＥＳＤ教材開発（３）････････････ 84

陸前高田市文化遺産調査におけるＥＳＤ教材開発（４）････････････ 89

岩手県陸前高田市黒崎神社・東岸寺仏像調査報告書･･････････････ 104

岩手県気仙郡住田町向堂観音堂仏像調査報告書･･････････････････ 116

岩手県陸前高田市常膳寺仏像調査報告書･･････････････････････ 150

平成２４年度 陸前高田市文化遺産調査団　報告概要

１．目的

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災及び大津波により、陸前高田市は大きな被害を受けた。市民の約 1 割にあたる人命が失われたほか、市庁舎を始め、博物館や図書館、文化ホール等の市の重要施設が被災した。多くのものを失ってしまった。しかし、幸いにも高台にあった寺の仏像は被災をまぬがれた。この仏像等の文化遺産を調査し、その価値を明確にすることが、陸前高田市の市民を元気づけることになる。また、その文化遺産を通したＥＳＤ教材を作成し、現地の小中学校で活用していただくことで、陸前高田市の子どもたちを勇気づけるものとなると考える。

２．開催月日

事前調査　　平成 24 年 6 月 22 日（金）～25 日（月）　3 泊 4 日
本調査　　平成 24 年 9 月 6 日（木）～　9 日（日）　3 泊 4 日

３．派遣先　　陸前高田市　常膳寺　小友小中学校、高田松原　他

４．活動内容

（１）常膳寺での文化遺産調査
（２）文化遺産を通したＥＳＤ教材の作成
（３）防災教育

５．参加者

事前調査：加藤久雄、山岸公基、中澤静男　　3 名
本調査　：教員　　山岸公基、中澤静男、
　　大学院生　　宮武杏名、小松原　絵里
　　教職大学院生　　新宮済、中澤哲也
　　学部生　　古川真里奈、幸田早苗　　計　8 名

６．成果物

（１）3 月 10 日の報告会において、概要報告・座談会および模擬授業を実施。
（２）各学生レポート・防災教育についてのレポート
（３）指導案「海をわたった中吉丸」「高田松原にこめた願い」いずれも　小学校 ESD・総合的な学習の時間
（４）指導案「高田松原と人の関わり　－陸前高田市の未来を考えようー」小学校 ESD・防災教育
（５）子ども配布資料
（６）仏像調査報告書（山岸）

小学校総合的な学習の時間学習指導案

奈良教育大学教職大学院　中澤哲也

１．単元名　高田松原にこめた願い

２．単元目標

・　「高田松原」に関わった人々の生き方に関心を持ち、意欲的に調べる。　（関心・意欲・態度）

・　「高田松原」を受け継いだ人々の想いを調べ、これからの自分にできることを考える。（思考・判断・表現）

・　インタビューなどを通して、先人から受け継がれてきた想いを聞き取り、まとめる。　（技能）

・　高田松原と地域の人々との関わり、地域の人々の願い、努力を理解する。　（知識・理解）

３．単元について

（１）教材観

岩手県陸前高田市の名勝、「高田松原」は市民からも大変愛される陸前高田市のシンボルであった。約７万本もの松が海沿いに２キロメートルにわたって続いており、高田市民はもちろん、観光客にも海水浴や、憩いの場として親しまれていた。「高田松原」は１６６６年（寛文６年）、仙台藩主の綱宗公（伊達家１９代藩主）が高田村の、豪商菅野杢之助に立神浜（当時の高田松原）の田畑に被害を及ぼす塩害や、強風を防ぐため、気仙郡高田村（陸前高田市高田町）に松の植栽を命じた（当時、仙台藩では、財力のあるものにその土地の公共事業を行なわせる手段をとっていた）のが始まりである。その約５０年後には玉山金山を治める松坂新右衛門が同じく気仙川流域の新田を塩害、風害、洪水から防ぐために今泉村（陸前高田市気仙町）に松を植え、その２つが１つになり高田松原になった。塩分を含んだ砂地での植林作業は当時の技術では難しかった。植林後、明治２０年と、昭和８年の三陸大津波、昭和５５年のチリ地震津波では大きな被害がでたが、そのつど補植され、大切に育てられてきた。現在も高田市には「高田松原を守る会」が中心になって松原の補植活動がされてきた。

しかし、２０１１年３月１１日の東日本大震災津波によって「高田松原」は１本を残して崩壊した。残された松は「希望の松」としてたくさんのメディアに取り上げられたが、やがて枯死してしまった。現在高田市ではその「希望の松」を地域の活性化のシンボルに、また、津波の恐ろしさを伝えるモニュメントにするという計画がある。

今回「高田松原」を教材化した理由は３つある。１つ目は菅野杢之助や松坂新右衛門が新田開発のために松を植えたことを伝えることである。松を植えたことで、人々がどれだけ助かったのかを当時の時代背景と合わせて考えることで、植林することの効果やすばらしさを学べるのではないかと考える。２つ目は江戸時代に植林された松を地域の人々がしっかりと現在まで受け継いできたことを知ることで、人々の努力や陸前高田市を愛する気持ちに気付くことができる。特に「高田松原を守る会」の方々にもインタビューすることで、より具体的な話を伺うことができ、児童の心にひびくと考える。３つ目に「高田松原」が津波によって流されてしまった今、先人から受け継がれてきた願いを次の世代に伝えるにはどうすればいいのかを考え、「高田松原」の代わりに、陸前高田市の子どもたちが次の世代に何を残していくのかを考え、行動するきっかけになると考える。

（２）指導観

総合的な学習の時間では互いに教え合い学び合う活動や、地域の人との意見交換や交流活動などといった体験活動、言語によってものごとを整理したり、分析したりして考えを深める言語活動を共に充実させることを重視する。高田松原を指導する際、押さえておきたいことが３つある。１つ目は高田松原についての教育、２つ目は高田松原のための教育、高田松原を通しての教育である。

１つ目の高田松原についての教育についてである。高田松原の背景には多くの歴史がある。菅野杢之助や松坂新右衛門が新田開発のために松を植えたことや、三度の津波によって塩害にあったときも地域の人々が協力して

高田松原を守ったことを知ることで、学習者と保全にかかわった人々をつなぎ、大切なものを守る活動の価値や意義を理解することができる。

２つ目の高田松原のための教育についてである。陸前高田市には高田松原を守る会がある。現在、陸前高田市は津波によって高田松原を流されただけでなく、塩害によって、海岸沿いには松が育つことができない状況になってしまった。しかし、高田松原を守る会の方々は今も高田松原を復興しようと苗木を植えたりしながら頑張っておられる。こういった高田松原のための取り組みをされている方々から、実際にインタビューをすることで、より身近なものとして考えることができ、学習者の行動の「変化」のきっかけになる。

３つ目に高田松原を通しての教育についてである。高田松原が今まで存在していたのは、単なる偶然ではなく、江戸時代から長い年月の中で大切にされてきたからである。高田松原を通して、保全活動をされてきた人々に出会い、その生き方にふれることで学習者の視点が広がり、次は自分達の番であるという活動への意欲の向上が期待できる。また、「〇〇を守る会」などを自分たちでたちあげることで、陸前高田市を守る一員として町づくりに参加し、まちのよさを自分たちで伝えていく切り口を見つけるきっかけにもなると考える。

３．評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	観察・資料活用の 技能	社会的事象についての知識・理解
①　高田松原を植林・保全し続けてきた人々に関心を持ち、意欲を持ってしらべようとする。 ②　高田松原に込められた願いを次の世代に伝えるために意欲的に参加している。	①　植林・保全活動によって受け継がれた人々の願いや、思いを考える。 ②　高田松原が津波によって流されてしまった今、自分たちで先人の想いを伝えていくにはどうすればいいか判断し適切に表現する。	①　高田松原について調べたり、高田松原を守る会の方にインタビューしたりして、高田松原がどのようにして受け継がれてきたかを読み取りまとめることができる。	①　菅野杢之助や松坂新右衛門や、保全活動を行ってきた地域の方々の努力と、高田松原に込められた願いを理解する。

５．単元計画（全 10 時間）

主な学習活動	学習への支援	評価規準				備考
		関	思	技	知	
１．高田松原を知ろう！						
〇なぜ海岸沿いに高田松原があったのかを考える。	●震災前の高田松原の写真・映像を見せる。					高田松原の写真・映像
〇古地図をもとに高田松原が植えられたのか理由を話し合う。	●高田松原は植林によってできたものということに気づかせる。	①				高田松原の古地図

２．陸前高田にいたすごい人 ○高田松原の歴史年表を作成する。	●「被災地からのレポート」より、菅野杢之助や、松阪新右衛門の資料を提示する。			①		「被災地からのレポート」
３．高田松原を救え！ ○これまで明治 20 年、昭和 8 年の三陸大津波、昭和 55 年のチリ地震による大津波が陸前高田を襲ったことを知る。 ○三度の大津波で塩害を受けた松が、育ち続けていたところに注目し、地域の人々が守り続けていたことを知る。 ○次時の高田松原の保全活動について知りたいことを調べる。	●「被災地からのレポート」より、陸前高田市がこれまでに受けた津波の被害を提示する。 ●高田松原を通して、受け継がれてきた先人の思いを考えさせる。		①	①		「被災地からのレポート」
４．どうして高田松原を救ったのだろう ○「高田松原を守る会」にインタビューをし、なぜ松が今まで守られていたのかを調べる。	●高田松原を守る会の方にきていただき、お話を聞く。			①		
５．私たちの高田松原を思い出そう ○高田松原は自分たちにとってどんな存在であったか考える。 ○インタビュー内容と、それに対する思い、また松原に対する自分たちの思いをグループでレポートにまとめる。 ○レポートの発表を通して、高田松原にこめられた願いを理解する。	●高田松原での家族の写真などを持ち寄る。 ●これまでの学習を整理させる。				①	

６．先人の思いをつなげよう ○自分たちが先人の思いを次の世代につなげるにはどうすればいいか考える。	●子どもたちにできる形で、伝えていけるようなものであることにする。		②			
７．宝もの探しに出発！ ○資料集めを兼ねて、フィールドワークを行なう。	●昔からあるもの、現代のものなど、視点を与えるようにする。	②				
８．どうやって伝えよう？ ○地域で見つけた、大切に伝えられてきたことを自分たちが次の世代に伝えるためにどうすればいいか考える。	●高田松原だけでなく、様々な地域の紹介をする。		②			
９.私たちの陸前高田市を伝えたい！ ○考えた計画をもとに実現できるか調査する。必要であれば、市に問い合わせる。 ○計画を実行する。 ○「○○を守る会」を結成し活動する。	●学校側の質問や提案はある程度まとめさせてから、市に協力してもらうようにする。	②				

６．本時案

ねらい　高田松原を守る会の方のインタビューを通して、町の宝物を守ることの大切さを知る。

	主な学習活動	学習への支援	備考
	１．高田松原は様々な人によって支えられてきたことを知る。	○　映像を利用して高田松原が津波に流されるまでの概要をおさえる。 ・　江戸時代に管野杢之助や松坂新右衛門によって植えられたこと。 ・　これまでに３度の大津波を乗り越えてきたこと。 ・　「高田松原を守る会」をはじめ、多くの市民によって守られてきたこと。など...	ムービーメーカー
	なぜ、高田松原は今まで守られてきたのだろう。		
	２．「高田松原を守る会」に人のお話を聞き、守るためにどういった活動をしてきたのか、なぜ守ろうとしたのか、今後どのような活動をしていくのかを知る。	○　「高田松原を守る会」の方のお話を黒板にまとめていく。	「高田松原を守る会」の方へのインタビュー
	３．インタビューを通して、感じたことを発表する。	○　発表者の意見を黒板にまとめていく。	
	４．昔からある地域の宝物を探しに行く計画を立てる。	○　高田松原のように地域にもこれまで守られてきたものへ視点を与える。	

【ご指導欄】

小学校総合的な学習の時間学習指導案

奈良教育大学教職大学院　新宮　済

1　単元名　　「海をわたった中吉丸」

2　単元の目標

- 常膳寺の胎内墨書がある薬師如来立像の見学から、地域の歴史に関心を持つとともに、地域を大切にしようとする心を育てる。
- 小笠原村と陸前高田市の時間を越えたつながりから、持続可能な発展に関する価値観の一つである人と人とのつながりの大切なことを考える。
- 中吉丸関係者等へのインタビューや、インターネットや図書資料からわかったことを年表や図にまとめる。
- 陸前高田市と小笠原村双方の関係者の中吉丸漂流への思いを共感的にとらえ、人と人のつながりの大切さを理解する。

3　教材観

陸前高田市小友町の常膳寺（じょうぜんじ）の薬師如来像の胎内には墨書がある。そこには「小友村　大願主　及川庄兵衛」と書いてある。調査により及川庄兵衛はこの地に生きた先人であり、幕末に遭難した中吉丸の船主であることが明らかになった。ここで中吉丸の歴史について説明する。 1839年中吉丸に乗り込んだ六名は、奥州気仙郡小友浦（小友町三日市）から荷物を積み、常州（茨城県ひたちなか市）に向けて出帆した。しかし、出帆から１０日程たったころ、嵐に吹き流されて漂流した。漂流すること３５日、中吉丸は小笠原島に漂着し島人に助けられた。小笠原島の島人は言葉、服装、顔立ち、食事すべてが異なっていた。しかしながら、お互いが身振り手振りを使い、意志を通じあわせ、船員は二か月間小笠原島で、彼らと生活した。日本に帰船した後、異国で生活していたことが幕府に知れ、江戸で取り調べを受けることとなった。９カ月間のおよぶ取り調べを受けたが、無実が証明され小友浦出帆から１年１カ月後に小友町へ帰った。当時江戸幕府は鎖国令を布いており、海外に日本人が行くことを禁止していたことが原因となったという事件が中吉丸漂流記に書かれている。当時小笠原島は外国人が住んでいて、捕鯨船の補給拠点としての役割を担っていた。当時、開国派として有名な渡辺崋山も、西洋の生活が垣間見ることができる一番近い異国として憧れていた。その島へ陸前高田市の先人達が偶然に足を踏み入れ、外国人と交流したのだ。彼らは、命を助けてくれた島の人からいただいた品物を、幕府から隠し小友町へ持ち帰り大切に守ってきた。

常膳寺の薬師如来像はこのような歴史を背景につくられた。東日本大震災によって 170 年前からの陸前高田市と小笠原島のつながりの証であった文化財(小笠原島からのお土産)は流されてしまった。しかしながら、このつながりは、途切れることはなかった。小笠原村の人々は陸前高田市へ復興支援を積極的に行ってくれたのである。

常膳寺の薬師如来像から中吉丸を学ぶことを通して、地域を誇りとし、また人と人とのつながりを大

切に思う心を育てたい。

４　指導観

子どもたちの学習意欲を高めるために、中吉丸の船員になるという疑似体験をする導入を行う。嵐によって漂着した島に住む人の、容姿、言葉、食べ物を提示して、漂着した島がどこの国であったか考えさせる。その島が小笠原島であり、かつて小笠原島は日本の国土ではなく、外国人が住んでいたということに驚くだろう。

ここで「小笠原村と陸前高田市はつながっている、それを示すものが薬師如来像である」という声掛けをし、子どもたちの概念を崩していく。子どもたちの「なぜ？」と思う気持ちを大切にして、学習課題を設定していきたい。それぞれが立てた仮説のもとに主体的に調べ学習を行わせたい。課題解決のためには、現地に足を運んだりインタビュー調査したりすることが大切である。このような五感をつかった学習を行うことで児童の理解が深まる。またインタビューを通して、陸前高田市の人々がこの仏像を大切に思う気持ち、小笠原島の人たちへの感謝の気持ち、祖先を誇りに思う気持ちなどにふれさせたい。また多様な考え方にふれさせるために、様々な規模での話し合い活動を取り入れる。話し合いへの参加は児童の主体的な学習につながると考える。

最後に学習のまとめとして「この絆を後世へとつなげていくには」というテーマの話し合いを行うことで、陸前高田市と小笠原島をつないだ中吉丸のように、人と人のつながりを大切にしようとする役割を担う態度を育てたい。

５　評価の規準

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
①　中吉丸に関心を持ち、意欲的に調べる。 ②　進んで交流する。	①　中吉丸に関わる人々の思いを考える。 ②　人と人がつながる上で大切な利他的行動を考える。	①　インタビューやインターネット、図書資料からわかったことを、年表や図にまとめる。	①　陸前高田市と小笠原村双方の関係者の中吉丸事件への思いを共感的にとらえる。

6　単元計画（全 15 時間）

主な学習活動	学習への支援	評価について
1　陸前高田の先人が漂着した島とはどこだろう？(1) ・　中吉丸漂流のロールプレイ	・　イラストを提示し、意欲を高める。 ・　写真資料や地図を用意し、漂流の大変さを感じさせる。	関心・意欲・態度① どうして陸前高田市と小笠原村がつながっているのか？
2　常膳寺に行こう（4） ・　常膳寺の仏像を見学し、和尚さんから、お寺についての話を聞く。 ・　薬師如来像の胎内にある墨書の中で読める文字を探していく。	・　地域遺産が守り、伝えられてきたものであることを押さえる。 ・　墨書の貴重さや身近に見学できる貴重さを伝え、意欲を高める。 ・　及川庄兵衛という名前に注目させる。	観察・資料活用の技能①
3　中吉丸について調べる（4） ・　図書館やインターネットを利用し、中吉丸の漂流事件を調べる。 ・　中吉丸の乗組員の子孫にインタビューし、漂流事件に関する感想を聞き取る。 ・　中吉丸事件の意味を話し合う。	・　グループで目的を決めて調べる。 ・　事前に主な質問事項をまとめて相手に伝え、インタビューの仕方を指導する。 ・　中吉丸事件の貴重さを考えさせる。	関心・意欲・態度① 観察・資料活用の技能① 思考・判断・表現①
4　小笠原村との交流について（4） ・　最近始まった交流に参加された方から、話を聞く。 ・　東日本大震災津波の被災への小笠原村からの支援について調べる。 ・　人と人のつながりについて話し合う。	・　現在も交流している意味を考えることから、人と人のつながりについて考え、一人一人が現代の中吉丸として、様々な人とつながっていこうという意欲を高める。	思考・判断・表現② 知識・理解①
5　まなびの交流（2） ・　小笠原村立小笠原小学校に、現在の気持ちを伝える。	・　自分たちから働きかけることの大切さを指導したい。	関心・意欲・態度②

７　本時の目標

中吉丸がつなぐ陸前高田市と小笠原村について気がつくことができる

主な学習活動	予想される児童の反応	指導の留意点	評価
１　中吉丸の船員になって漂着した島がどこか考える。	アメリカ、沖縄 ハワイなど外国を想像する。	デジタル機器を使い児童の学習意欲をあげる工夫をする。	
２　ゲストティーチャーの及川さんにインタビューしながら、陸前高田市と小笠原村のつながりに貢献した中吉丸について知る。	「及川さんは、どうして小笠原村にいったのだろう。」	インタビュー内容をキーワードを板書していく。	
３　及川さんにインタビューをして自分が考えたことを発表し合いながら、人と人とのつながりについて考える。	「中吉丸は陸前高田市と小笠原村のつながりをつくった、僕らの地域の宝物だね。」	中吉丸が果たした役割を整理し、陸前高田市と小笠原村の交流への当事者意識を養う。	関心・意欲・態度②

総合的な学習の時間学習活動案

奈良教育大学数学教育専修１回生　幸田　早苗

平成年月日 小学校年組

授業者　　印

１．単元名　　高田松原と人の関わり　－陸前高田市の未来を考えよう－

２．単元の目標

- 高田松原とそれに関わった人々に関心を持ち、意欲的に調べる。（関心・意欲・態度）
- 地域の人々の生活や願いと高田松原の保全や再生に関わる人々の努力や苦心を関連付けて考える。（思考・判断・表現）
- 現地見学したり、地域の人々に聞き取り調査したりして、必要な情報を集め、活用する。（技能）
- 高田松原と地域の人々との関わり、地域の人々の願い、努力を理解する。（知識・理解）

３．評価基準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
高田松原とそれに関わる人々に関心を持ち、意欲的に調べている。	地域の人々の生活や願いと、高田松原に関わった人々の努力や苦心を関連付けて考える。	現地見学したり、地域の人々に聞き取り調査をしたりして、必要な情報を集め、適切にまとめる。	高田松原と地域の人々の関わりと地域の人々の願い、努力を理解する。

４．指導について

（１）教材観

岩手県陸前高田市にある名勝「高田松原」は約７万本もの松林が、海岸沿いに約２キロメートルに渡って続いていた。多くの人々に愛され、観光地として有名であり、地元の人々にも陸前高田市のシンボルとして親しまれてきた。「高田松原」の由来は、江戸時代の二人の先人によるものである。まず、一人目は富農であった菅野杢之助（かんのもくのすけ）である。高田松原の砂浜は荒涼とした不毛の地であった。そのため、潮風が絶えず砂塵が吹き上げては、近くの田畑を埋め尽くしたりして、作物は収穫がないこともしばしばあった。村では防風・防波・防砂の策を何度も講じたが効果は得られなかった。そこで、杢之助は1666年に仙台藩の命を受け、1667年に植林を行なった。このとき植林された松原が高田松原と呼ばれている。二人目は仙台藩の玉山金山の金山奉行を仕切った松坂新右衛門である。1637 年ごろ、今の高田松原の西側後背地は新田開発が行われていたが、洪水や潮害、風害で苦慮していた。そこで、新右衛門が杢之助の例を励みに私財を投じて植林を行った。このとき植林された松原は今泉松原と呼ばれている。この二つの松原を総称して高田松原と呼ばれるようになった。どちらも海水が染み込んだ砂地、夏の高温、冬の凍結などの悪条件の中、松が根づくまで大変な苦労と努力のすえ、成し遂げられたのだ。

しかし、2011年３月11日の東日本大震災津波によって、約７万本もあった松がたった一本を残して破壊されてしまった。現在は途中でちぎられたような松の木が海岸沿いに続いており、津波の破壊力を象徴している。「高田松原」があった海岸の砂浜も地盤沈下してしまった。しかし、その崩壊してしまった「高田松原」を再生しようという活動が、「高田松原を守る会」を中心として行

なわれている。また、奇跡的に残った一本松も「希望の松」として全国に知られ、現在モニュメント化されている。

今回、私が「高田松原」を教材にした理由は三つある。一つ目は陸前高田市の子ども達が地元の歴史を知る契機として、二つ目は「高田松原」を中心とした人のつながりが見えること、三つ目は「高田松原」を通して防災についても学ぶことができるからである。

一つ目の陸前高田市の子ども達が地元の歴史を学ぶ契機についてである。「高田松原」は陸前高田市竹駒町にある玉山金山と深く関係している。玉山金山では江戸時代まで多く金が取れ、人々の生活を支えていた。しかし、やがて金が取れなくなり、多くの人々が生活に困窮するようになった。そこで、新田開発が行なったのが菅野杢之助と松坂新右衛門である。こういった地元の歴史を知ることで社会の授業で習った歴史と自分の住んでいる地域の歴史が関連付けられ、理解が深まり、自分の住んでいる地域のことを誇りに思うことができるのではないかと考える。

二つ目の「高田松原」を中心とした人のつながりが見えるというのは、「高田松原」の景観は前に述べた二人の先人以外にも多くの人々が協力して保全されてきたからである。「高田松原」は東日本大震災津波以前にも 1896 年の三陸大津波、1933 年の三陸大津波、1960 年のチリ地震津波などで海水を被り、大きな被害が出た。しかし、その都度地元の人々が捕植し、高田松原は守られてきたのである。つまり、「高田松原」は当たり前に存在してきたのではなく、時代を超え地元の人々の支えによって存在してきたのである。これは「高田松原」だけでなく、地域の文化財や伝統行事、自分達にも置き換えて考えることができる。自分の身の回りのことに置き換えて考えることで地域の人々への感謝の思いや地域を愛する心を育てることができると考える。

三つ目の防災についても学ぶことができるというのは、他の地域の文化財や伝統行事にはない「高田松原」の持つ特徴である。二人の先人が植林したことと、現在「高田松原」を再生しようとしていることは、行動の内容としては同じである。先人達は新田開発をするにあたって塩害を防ぐために植林した。現在は地元のシンボルを復活させるため、そして津波の恐怖を忘れないため再生活動が行われている。行動に込められた思いや目的は異なるが、どちらも地元の人々のためという点では共通している。その「高田松原」に込められたメッセージの時代による移り変わりを理解する上で、今の子ども達が大切にしなければならないメッセージは、津波の恐怖を忘れないという願いである。津波を知らない未来の子ども達に本当の津波の恐怖を伝えられるのは、実際に津波の被害に遭った子ども達である。「高田松原」は東日本大震災・津波を風化させないために重要な役目を果たし、海と共に生き続けることを考えた町づくりを目指すことは、持続可能な地域社会づくりと重なると考える。

（2）児童観　省略

（3）指導観

この単元を指導するにあたって、配慮したい点は三つある。

一つ目は児童の地域への関心を高めることである。そのために、「高田松原」を導入教材として活用し、児童の調査活動などに対する意欲を高めることで、主体的に学ばせたいと考える。

二つ目に現地での五感を使った学びをさせることである。いつも何気なく接している地域の身近なものでも学習をした上で接すると、いつもは気づかないことに気づくことができたり、実際に関係者と話を聞くことで、資料などを読んだだけでは伝わらないことが伝わってきたりする。

現地で五感を使って学ぶことで、児童に地元を見直させたいと考える。

三つ目は児童に学んだことを自分の生活に応用させることである。「高田松原」から学んだことを授業で終わらせてしまっては、もったいない。学んだことをどのように自分の生活に生かせることを考えさせたいと考える。

5．単元展開の概要（全 14 時間）

	主な学習活動	○学習への支援　　◆評価	備考
第1次（2時間）	1．高田松原の歴史 ・　2 枚の絵図と現在の地図を比べる。 ・　高田松原の歴史年表を読み取る。	○寺や神社、地形に注意して、絵図を読み取らせる。 ○双方の松原に注目させる。 ○2 人の先人に注目させる。 ◆高田松原と地域の人々の関わりと地域の人々の願い、努力を理解する。	文政 5 年の今泉村絵図と高田村絵図 高田松原年表
第2次（4時間）	2．高田松原の現地見学 ・　破壊された松原の現状を五感を通して理解する。 ・　気仙沼市唐桑半島の津波体験館の見学	○陸前海岸の人々が昔から津波被害を防ぐために、努力していたことに気付かせる。 ○津波被害のメカニズムを理解させる。 ◆現地見学したり、地域の人々に聞き取り調査をしたりして、必要な情報を集め、適切にまとめる。	気仙沼市唐桑半島津波体験館
第3次（2時間）	3．高田松原の未来を考える ・　津波の体験を共有する。 ・　松原の今後について考える。 ・　グループで「高田松原を守る会」や「高田松原」を保全しようとしている人の存在や活動について新聞記事や市政だよりなどを用いて情報を収集する。 ・　インタビューの内容を考える。	○無理に言わせないよう配慮する。 ○高田松原を守る会について、最後に伝える。 ○「高田松原を守る会」の人にゲストティーチャーとして来ていただくことを伝え、質問内容を考えさせる。 ○質問は、事前に伝え、学習の意図を説明する。	新聞 市政だより

第4次（1時間）	4．　インタビューしよう。 ・　「高田松原を守る会」の方にインタビューをする。	○メモを取りながら聞くよう、指示する。 ◆高田松原とそれに関わる人々に関心を持ち、意欲的に調べている。	ゲストティーチャー
第5次（1時間）	5．深めよう。 ・　調査やインタビューの結果をグループごとに話し合ったあと、学級全体で未来に伝えていきたい陸前高田市について話し合う。	○松原再生への取組の背景にある「心」を考えさせる。 ○津波に負けずに、海と生きる町づくりの主役は自分たちだという当事者意識をもたせる。 ◆地域の人々の生活や願いと、高田松原に関わった人々の努力や苦心を関連付けて考える。	
第6次（4時間）	6．伝えよう ・　高田松原の歴史や東日本大震災・津波を超えて伝えていきたい陸前高田市を絵本にする。	○伝えたいことの中心をはっきりさせ、場面構成を考えさせる。	
第7次（課外）	7．読み聞かせをしよう ・　作成した絵本で、他学年の児童や地域の方に読み聞かせを聞いてもらう。	○感謝の心で絵本を聞いてもらおう。	

指導案作成：奈良教育大学数学教育専修１回生　幸田　早苗

防災教育について

社会科教育専修　4回生　古川　真里奈

東日本大震災・津波が起きて、はや1年半が過ぎた。私たちは、この災害を過去のものとするのではなく、未来にも同様のことが起こりうるかもしれないと想定し、生かしていく必要がある。今回、私は9月に訪問した岩手県陸前高田市の経験をもとに、防災教育について述べていく。陸前高田市での経験は、私に防災教育の重要性や、危機感を与えてくれた。それを3･11以前の防災教育の在り方と3･11以後の防災教育の在り方（改善点）の2つの点から述べる。

（1）3･11以前の防災教育について

3･11以前の防災教育について、ある一つの出来事が契機になっている。それは、1995年1月17日におきた阪神・淡路大震災である。この震災は、ここ数十年における防災への見直しになったのではないかと考える。また、「ボランティア元年」というように、誰かのために活動をするという助け合う心が人の行動へとあらわれた年になったのではいかと考える。この災害から、社会だけでなく、教育や学校現場も変わっていった。文部科学省においては、学校教育を対象として「生きる力をはぐくむ防災教育の展開」（平成10年3月31日）や「生きる力をはぐくむ学校での安全教育」（平成13年11月30日）をとりまとめ、防災教育の意義とねらい、機会と指導内容、進め方、展開例、防災管理の進め方等を示している。また、様々な防災教育教材を配付するとともに、独立行政法人教員研修センター等において、教職員を対象とする研修が行われている。学校現場においては、避難訓練や冊子・イベント等による啓発活動、被災者や語り部からの聞き取りなど、さまざまな活動をおこなっている。特に総務省消防庁制作の「学校の取り組む防災教育100選」には、先進的に取り組んでいる学校の防災教育の取り組みの事例が掲載されている。

一方で、自分の小中学校時代を振り返ってみると、防災教育といえば避難訓練しか記憶に残っていない。周りの大学生にも聞いてみると、おもに避難訓練だけという意見が多かった。2007年に和歌山県が行った「学校防災に関する実態調査」の結果の一部を表したのが下のグラフである。

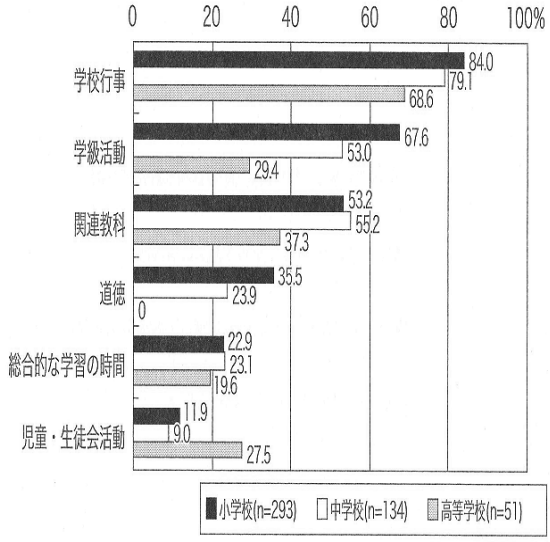


図10.3　防災教育の実施状況（「行っている」の回答率）

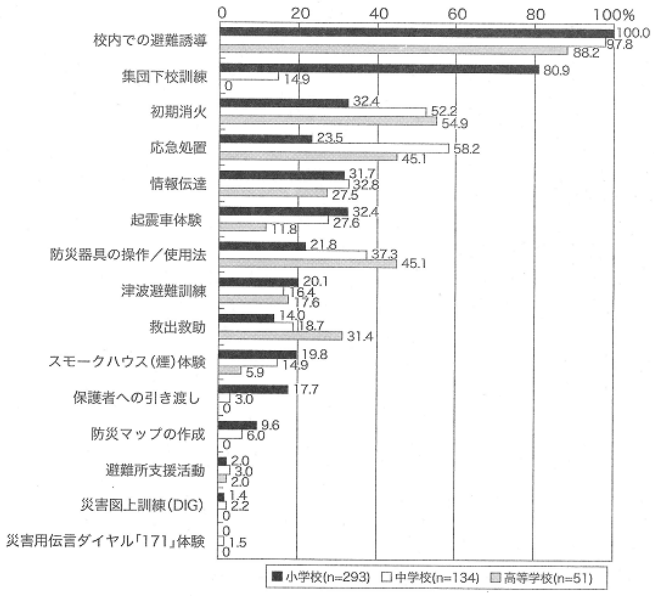


図10.7　防災訓練／指導の内容（「行っている」の回答率）

左のグラフからは、防災教育は、「学校行事」として行われることが最も多く（81%）、「学級活動」（59%）、「関連教材」（52%）という内容になっていることがわかる。右のグラフは、防災訓練の内容についてであるが、ほとんどの学校で実施されているのが、「校内での避難誘導」（98%）である。次の「集団下校」（88%）は、小学校で約 81%実施されているが、中学校では 15%、高校では実施されていない。また大多数の学校が学校管理において、マニュアルを作成している。また、学校は避難所に指定されていることが多い一方で、その避難所としての運営計画を作成しているのが約半数に留まっていることも調査から明らかになっている。

このことから、地域差はあるだろうが、学校現場においては、防災教育は行ってはいるものの、最低限度の対策しかおこなっていないように思える。次に 3.11 以降の防災教育の在り方について考えたい。

（２）3･11 後の防災教育における改善点について

3･11 東日本大震災・津波では、たくさんの命が失われた。今でも、その被害は進行しており、まだまだ、復興できていないのが現実である。東北においては、防災教育ではなく、復興教育として取り組んでいる。一方、東北地域以外の学校における防災教育において、大きく変わったことがあげられる。それは、現実感のある防災教育を行う学校が増えてきたことである。その一つに、避難訓練があげられる。今までの避難訓練では、上記のグラフにもあるように、「校内での避難誘導」が主であった。しかし、今回の大震災が放課後に発生したことから、いつでもどこでも対応できるように、今では、授業内だけでなく、休み時間や放課後など様々な時間帯において避難訓練が実施されるようになったという。このように、実際を想定した訓練へと変わってきている。しかし、まだまだ、課題が残っていると思える。そう思えるようになったのは、実際に被災地にいって体感したからである。

今回、私が訪れた陸前高田市では、まだがれきの山がたくさん残っていた。市役所も、プレハブのままであり、中学校も被害にあったまま残されており、今は小学校の校舎を借りて合同で教育をおこなっているところもあった。今回、その小学校の校長先生に、震災の話を伺うことができた。お話してくださったことは、どれも体験を通した話で驚かされるものばかりであった。その中で最も心に響いたことは、マニュアルではなく、個々の子どもに生き延びる力をつけることが大切だということだ。マニュアルというのは、ある想定のもとで作られる。しかし、今回の東日本大震災の津波は、想定外の規模であった。マニュアル通りに行動する力ではなく、そのときの状況において自ら判断し、最善のことを尽くして行動する力が必要なのである。今日、「生きる力」の育成がいわれている。そんな中で、東北の子どもたちは、自らのからだでそれを実感したのではないか。そして、われわれも東北の人々の姿から、本当の意味で実感したのである。これは、生きた教訓として、未来につなげていかなければならない。「自然災害大国」日本に住んでいる私たちは、自然とうまく付き合って生きてかなければならない。今回のことで、自然のおそろしさを実感した。しかし、自然は安らぎもあたえてくれる。自然の二面性を実感した今こそ、自然との共生が今後の課題である。

わたしは、東北での学びと、実際の学校現場での様子に、ギャップを感じている。東北大震災での経験が、本当に今、生かされているのだろうか、疑問である。人間は「自分は大丈夫」という「正常化への偏見」がはたらく。自分には起こらないだろうと無意識のうちに思ってしまうのである。東日本大震災が起こる前から、防災教育は常におこなわれてきた。防災教育について、１．ハードとソフトが融合した防災教育、２．地域をつなぐ防災教育、３．世代をつなぐ防災教育、４．「助かること」だけでなく「助けること」を重視した防災教育、５．成果物を生み出しながら学ぶ防災教育、６．生活に根ざし

た防災教育、７.「正解を学ぶ」だけでなく「みんなで考えること」を目指した防災教育という７つの視点がある。これは、阪神・淡路大震災後、注目されていたのである。これは、防災教育の根底にあるものだと考える。起こったから考えるのではなく、起こる前に考えて対応策をとっておくことは持続可能な社会を考えていくことと通底する。これが防災教育であると考える。

参考文献

・東日本大震災と学校教育－震災は学校をどのように変えるか－
著者：佐々木幸寿・多田孝志・和井田清司　出版年：2012 年 2 月 20 日

・教師のための防災教育ハンドブック
編者：山田兼尚　2007 年 3 月 31 日　学文社

・国際防災・人道支援フォーラム 2007 報告書―防災教育の取り組み―
平成 19 年 2 月 28 日発行　発行/国際防災・人道支援フォーラム実行委員会

常膳寺

からだの中の墨の文字

仏像のからだの中には墨で書かれた文字が見つかることがあるよ。仏像がつくられた理由や、完成日、仏像をつくった人、つくってもらった人の名前などが書かれているよ。

常膳寺の薬師如来立像にも墨で書かれた文字が見つかったよ。及川庄兵衛さんが天保十三年に邑上牛彦さんにつくってもらったことや、おだやかに国が栄えることを願って作られた、ということが書かれていたんだ。薬師如来は病気を治したり、国の安泰を願う仏さまだからこのお願い事はぴったりだね。同じ時代に漂流した「中吉丸」との関係も調べてみよう！

チューブの先にカメラがついているよ。

仏像の中を見るために「ファイバースコープ」という細い管の形をしたカメラを使うよ。お医者さんが私たちのからだの中を調べるのに使う胃カメラに似ているね。ファイバースコープが入りそうな穴や隙間から仏像のからだの中を調べるよ。

常膳寺の阿弥陀如来坐像の中もファイバースコープで探したら、頭の部分に文字が見つかったよ。「伊達」っていう文字がわかるかな？

どうやって文字をさがすの？

思ったことを書こう。

ほかにはどんな仏像があるかな？
しらべてみてね！

おりこみブックのつくりかた

- やまおり・たにおりに合わせて紙をおる。
- たて半分におり、＊と＊をくっつけて本の形におる。

常膳寺 仏像

ジュニアハンドブック

なん　くみ　ばん　なまえ

常膳寺って？

岩手県陸前高田市小友町の箱根山の中にある真言宗のお寺だよ。江戸時代の寛文十一年（1671）に祐円法印というお坊さんが開いたと伝えられているよ。以前は、ここで縁日もあったんだって。

観音堂、阿弥陀堂、薬殿の３つのお堂があり、その中にいろいろな仏像がまつられているよ。1000年前からたっていると伝わる姥杉もあるんだ。県の天然記念物に指定されて今も大事にされているよ。

境内のようす

せんじゅかんのんぼさつりゅうぞう

千手観音菩薩立像

千手観音菩薩は千の手と千の目を持つ仏さまだよ。手のひらにある千の目でみんなの願い事をみて、千の手でその願い事を叶えてくれるんだよ。

常膳寺の千手観音菩薩立像を見てみよう。たくさん手があるね。えっ、千本もないじゃないって？ そうなんだ、実は千本の手を実際に持っている千手観音菩薩像は少ないんだ。1本の手に25本分の力を込めているんだって。この像には実際は何本の手がついているのかな？

目はそれぞれの手に願いをかなえる道具を持っていたんだ。

じゅういちめんかんのんぼさつりゅうぞう

十一面観音菩薩立像

文字通り、11個の顔を持つ仏さまだよ。色々な方向を11個の顔で見渡して、全ての人を救おうとしているんだ。常膳寺の十一面観音菩薩立像を見てみよう。

えっ、顔1つしか見えない？ 顔の上をよく見てみて。11個の顔が少し小さくついているはずだよ。それぞれどんな気持ちでみんなを見ているんだろう。表情をよく観察してみよう。

陸前高田市を訪れて

数学教育専修　1回生　幸田　早苗

2011年3月11日の東日本大震災及び大津波により、陸前高田市は大きな被害を受けた。しかし、そんな中、高台にあった常膳寺というお寺の仏像は被災しなかった。この仏像などの文化遺産を調査し、その価値を明確にすることが、陸前高田市の市民を元気づけ、また、そういった文化遺産を通したＥＳＤ教材を作成し、地元の小中学校で活用していただくことで、陸前高田市の子ども達を勇気づけることを目的で、今回の陸前高田市文化遺産調査団が派遣された。活動は文化財調査を中心とするＡ班と防災教育を中心とするＢ班に分かれて行なった。私はＢ班として主に被災地を訪れたり、地元の方々の話を聞いたりした。

私が陸前高田市を訪れて学んだことは四つある。一つ目はリアルな防災教育、二つ目は地元の人々にとっての高田松原、三つ目は地域教材としての中吉丸、四つ目は実際に五感を通して学ぶことの大切さである。

一つ目のリアルな防災教育というのはマニュアルでない、いつどこにいても災害が起こったときに命を守るための教育だ。例えば、大震災前まで被災地でも行われ、今も日本の多くの学校で行なわれている避難訓練は、学校に生徒がいるときに限られている。これでは、いつどこで起こるかわからない災害に対応できない。だから、様々な場面を想定した避難訓練が行なわれようとしている。また、昔からの言い伝えで「津波てんでんこ」という言葉がある。これは災害が起こったときには家族それぞれが自己責任で避難しろという意味である。1人でも多くの命を守るための重要な言葉である。これらは被災した小友小学校の校長先生が話してくださった内容である。実際に尊い子どもたちの命を失ったからこその言葉の重みと、もう二度と同じようなことは繰り返さないという使命感が強く感じられた。気仙小学校は三階建ての三階まで津波が押し寄せたが、生徒全員が助かった。気仙小学校のグラウンドが避難場所になっていたが、お年寄りの高台へ逃げろという言葉で無事に避難できたという。現代は科学が進み、警報などを信じきってしまうが、「津波てんでんこ」や、お年寄りの「高台へ逃げろ」という言葉など、地域に伝わる言い伝えなども防災において重要だということだ。そういった点で地域とのつながりはＥＳＤや防災教育にとっても、重要である。また、次の災害に備えて、より正確な科学的な情報を個人が知っておくことも防災につながってくる。ほかにも、実際に被災したからこその本当の防災教育について学んだ。これらは全国どこでも通用することなので、しっかりと伝えていかなくてはならないと思った。

二つ目は地域の人々にとっての高田松原である。日本百景の一つとしても有名な高田松原には約7万本の松が生えていたが、震災による大津波で一本を残し壊滅した。その一本が希望の松として全国に伝えられたものである。被災地の松原については地域の人々が補植などをして大切に守ってこられたことなどを私は事前学習をしていた。学習していた中に松坂家四代新右衛門が植林を行なったとあった。そのご子息の方が現地を案内してくださった方々の中におられて、詳しく話を聞かせていただいた。高田松原が海岸に生えていたから海が見えなくて津波が来ているか知ることができず、逃げ遅れたのではないかという意見もあるが、やはり、高田松原は地域のシンボルとして守られてきたものだから、これから松原を再生するつもりであるという。できれば元の場所に再生したいと言っておられた。実際にすで

に高田松原の松ぼっくりからとれた種で千本近くの松が育てられている。こういった活動は地域を元気づけ、つながりを深めるのにとてもいいことであると感じた。また、一本松についてはもう海の塩分で枯れており、これから1億5千万円かけてモニュメント化することが決まっているそうだ。この計画は市が市民に黙って決めてしまったことらしく、そんなに多大な予算をかけてモニュメント化する必要があるのかという地元の人々の声もあった。そういったことも含め、高田松原はこれから陸前高田市を復興する為の大きな課題であると学んだ。

津波で被災した高田松原

三つ目は地域教材としての中吉丸である。中吉丸とは江戸時代に江戸に海産物を届けるために小友浦から出航した船である。中吉丸は途中で嵐に遭って遭難し、外国人が住むある島に漂着して助けてもらい、江戸で事情聴取を終えた後、無事に乗組員全員が帰還した。この漂着した島が現在の小笠原諸島である。この事件にちなんで造られた仏像が文化財調査をした常膳寺に収められており、広田半島の琴平神社には記念して建てられた石碑もある。2 年ほど前はから小笠原諸島の人々と交流もされている。この話を深く掘り下げていくと、当時ではどれほどすごいことか、日本の歴史の背景も見えてきて、とてもおもしろいと感じた。しかし、意外と地域の人たちには知られておらず、石碑などはあっても、学ぶ機会がないので、あるのが当たり前になり、興味をもつこともないそうだ。地元の人々の方が地域の魅力に気づきにくいものであるが、この中吉丸の話は地域を誇るものであると思うので、これから語り継ぐべきものであるので、教材化し、多くの子どもたちに知ってもらいたいと思う。

四つ目は実際に五感を通して学ぶことの大切さである。今回、私がこの調査に参加しようと思った一番の理由は、実際に被災地をこの目で見ておきたいと思ったからである。現代を生きる私たちがしなくてはいけないことは、東日本大震災の被害や津波の恐怖を、震災津波を知らない後世にしっかりと伝えていくことである。本当の被害や恐怖を伝えるには実際に現地に行くことが必要だと思った。被災地は私が思っていたよりも復興が進んでいなかった。津波にあった市役所や市民体育館、ぐちゃぐちゃになった車など、そのまま残されており、言葉では表しきれないほどの悲痛さ、残酷さを感じた。被災した建物に足を踏み入れると、匂いも外とは違っていると感じた。また、地元の人々の被災した話、当時を思い出し涙ぐむ姿は心に響いた。今までテレビや新聞などの多くのメディアで、たくさんの写真や映像を見て、たくさんの被災者の話も読んだりしてきた。被害の大きさや、被災者の方の心の傷などわかったつもりでも、どこか人事のように感じてしまっていた。しかし、実際に被害状況を見て、被害の規模を感じて、被災者の方の話を聞いて、初めて被災者の方の気持ちに近づけたと思う。それと同時に私たちが後世にこの体験を伝えていくことの重要さと使命感を改めて深く心に感じた。実際に五感を通して学ぶことの大切さは震災だけでなく、どんなことでも共通することだと思う。

以上の学んだことから、私がすべきこと、課題がはっきりとした。それは二つある。一つ目は震災で失われた多くの命を無駄にしないために震災・津波の恐怖や被害、そこから学んだことをしっかり伝えていくことである。二つ目は防災にも重要な役割を果たす地域のつながりを深めることである。この二つの課題を果たすためには教育が欠かせないと思う。教育とは勉学を教えるためだけでなく、命を守るためにも重要であることが身をもってわかった。これから教員を目指す立場として、生徒の命を守らなくてはならないという責任感を持ち続けたい。

岩手県陸前高田市の経験を経て

社会科教育専修　４回生　古川　真里奈

今回、この「学ぶ喜び」プロジェクトの岩手研修旅行では、大きく分けて３つの活動を行った。１つ目に常膳寺における文化財調査、２つ目に東日本大震災津波の経験をふまえた防災教育の調査、３つ目に、中吉丸についての調査である。私は防災教育について主に調べるグループに入り、事前に３回にわたる勉強会をおこなった。三陸海岸は昔から津波が多い地域であったこと、地域の歴史などを事前に学んだ。また、高田松原に関しては、奇跡的に残った松の木１本を今後どうしていくのか、疑問が生まれ、学習意欲を高める学習となった。

私が今回この活動に参加した理由は、学校における防災教育の在り方について学びたかったからである。教育実習に行った時、不審者の侵入を想定した訓練があった。その際に、担当の先生がおっしゃった「先生がみんなの盾になり、みんなを全力で守るから。」という言葉が今でも心に残っており、その言葉に考えされられた。私は早ければ来年、教員として子どもたちの前に立つ。その時に、自信をもって子どもたちを守れるような教員になりたいと思い参加した。実際に、防災教育のグループに入り、たくさんのことを学んだ。そして、防災教育だけではなく、滅多に経験することのない文化財調査や現地調査をすることで、たくさんのものを得た。それを以下の３つの活動から述べる。

１つ目の常膳寺における活動では、十一面観音立像、千手観音立像、薬師如来立像、阿弥陀如来座像の４体の仏像について、ファイバースコープを使って仏像内の銘文を調査した。実際に、脚立を使って、約３メートルもある十一面観音像の頭部を間近で見たときは、とても感動した。一方で、なかなかファイバースコープを入れる隙間が見つけることができず、調査の困難さも実感した。実際に調査で成果を得られるのは約１割と伺った時、研究者の功績の裏にはたくさんの努力が隠れていることを肌で実感した。私は今回この調査に参加させていただいて、実際に見て触って聴くことで得る学びの大きさを知った。また、わからないことや疑問に思ったことは調べる、という原点に立つことができたのではないかと思った。さらに、行動力が足りないことに気がついた。知らないことをわかっていたのに、事前学習が充分でなかったことを今反省している。調査の際に、先生や現地の方々にお話しを伺う機会があったのに、知識が足りず知る機会を自ら減らしてしまった。これからは、その場の状況を考えて行動することはもちろんのこと、意欲的に知ろう、積極的に調べようという姿勢を大切に、その力を養っていきたい。

２つ目の防災教育では、陸前高田市立小友小学校を訪れ、校長先生のお話を伺った。そこでは、学校における防災教育の在り方について、防災マニュアルではなく、自分たちで判断する力、行動力が必要であることを学んだ。また、及川さんや佐藤先生などの陸前高田市の方々に被災地を案内していただき、津波が来た時の様子や、その際の対応方法など、たくさんのことを話していただいた。実際に大津波による被災地を訪れたり、過去にあった津波災害で建立された石碑を見てまわったり、その土地の方々の生の声を聴きながら、防災教育の在り方について考えていった。昔からこの地域では、「津波てんでんこ」という言葉を合言葉にしていたという。「津波てんでんこ」とは、津波の時には家族のきずなを断ちきって、自己責任で逃げる、ばらばらでも必ず逃げているだろうと信じて逃げることを意味している。今回、この言葉や津波がきたら高台に逃げるといった昔からの言い伝えによって助かった人が多くいるという。ここでのお話を聞いて私は「絶対」がないことを学んだ。３メートルの防波堤も一瞬で津波に飲み込まれてしまった。防災マニュアルで動いていたら多くの犠牲者が出たであろうという気仙中学校

の事実。町の避難場所に逃げて多くの方が亡くなってしまったという事実。「絶対」ここなら大丈夫、という場所はないこと、自ら判断して動く力が必要なこと、生きるための力を養うことが必要だと感じた。命の危険がせまったとき、なによりも大事なのは生き延びるための判断力、行動力である。そして、過去の経験を現在に、未来に生かしていく、持続していくことが大切なのではないかと考えた。そのためにこれからは積極的に行動する、さらに考えて行動する力を養っていく決意である。

高台にある神社へ続く階段

中吉丸関係者にお話を伺っている様子

３つ目の中吉丸の調査では、中吉丸関係者の子孫の方々からお話を伺った。先祖から受け継いできた貴重なお話をしていただき、江戸時代末期に小友浦から海産物を積んで出航した中吉丸が途中で漂流したこと、漂着したところが現在の父島で、当時そこに住んでいた異国の方々と交流していたことなど、詳しい話を聞いた。今では、その交流した方々同士の交流があり、一昨年に実際に小笠原諸島で対面し、中吉丸について展示会を開いたそうだ。私はこの話を聞いて、地域教材のすばらしさに気づかされた。その地域だけにしかないその地域オリジナルのもの、それは地域の誇りにもなるだろう。現在、国際化が浸透している中で、早くからこの地域は国際交流をしていたのである。そしてそれが時代を越えても、こうやってまたつながっている素晴らしさを、将来、地域の社会の担い手となる子どもたちに伝え、地域や社会を愛する子どもを育てていきたいと思う。

一方、私自身を振り返ってみると、自分の地域について学んだという記憶がない。どれだけ子どもの生活と近づけて、子どもたちに興味をもってもらうようにするかが今後の課題となると思う。

高田松原も、地域に密着した教材になりうると思う。１本だけ残った奇跡の松も 2012 年 9 月 12 日に伐採されてしまった。今後、シンボルやモニュメントにして残していくそうだ。津波で高田松原は失われてしまったが、高田松原を守る会では、同じＤＮＡをもつ松を種子から育てていた。ここでは、１本の松の木の存続に対して、様々な意見があったことを知った。何がその地域にとっていいのか、人それぞれが違う。同じものについても違った考えがあり、それぞれに込められた人の思いを受け止めることの大切さをこの松の木は教えてくれた。私はこのような活動や歴史を通して、今はなき高田松原を誇りに思い、地域を愛せるようなそんな教材を作っていきたいと考える。

このように、今回の活動において大きく３つのことを学んだ。１つ目に判断力、２つ目に行動力、３つ目に五感を使った体験の必要性である。特に３つ目の五感を使った体験により、判断力、行動力が養われると考える。行く前には、上記に述べたことを意識していなかったのだが、実際に現地に立つことで意識を変革するができた。このような意識をみんなにも共有してほしい。そのためには、「伝えること」が重要である。学校教育や生涯教育など様々な場面で取り組むことで、伝えることができる。また伝えることで地域を愛する心も育っていく。私は、その土地の歴史はもちろんのこと、多方面からアプローチした教材を作っていきたい。そのために、今は、積極的にいろんなことに取り組み、陸前高田の方々に感謝しながら、その教訓を、行動力、判断力をもって伝えていく所存である。

本物だから伝わること

奈良教育大学教職大学院１回生　中澤哲也

はじめに

9 月 6 日から 10 日の 4 日間、陸前高田に訪れた。主な目的は文化財調査、防災教育、ESD 学習の教材化であった。なぜ私がこのプロジェクトに手を挙げたかというと、理由は 2 つある。1 つ目は 2011 年 3 月 11 日に東日本大震災・津波が起こって 1 年と半年が経つのだが、まだ被災地を訪れていないということに危機感を感じていたからである。これから私が教師になり、子どもたちに日本の将来のことを考えてもらうために、自分自身が歴史に残るであろう被災地の現場を訪れておかなければならないと考えていた。2 つ目に今回の ESD 学習の教材化という取り組みが、陸前高田の子どもたちの学ぶ意欲につながることが大変すばらしいことだと感じたからである。

【被災地に勇気をあたえる向日葵】

また、4 日間の学びをより良くするため、学部生、修士の大学院生と、陸前高田の津波の歴史や、千本松原のことなどをまとめ、共有するといった事前学習をした。この事前学習によって、私自身の今回のプロジェクトに参加する意欲がさらに高まったと思える。

今回のプロジェクトに参加させてもらい、4 日間の中で活動を通して特に感じたこと、学んだことを 3 つあげて述べたい。1 つ目は初めて被災地に訪れたことについて、2 つ目は研究のスペシャリストについて、3 つ目は陸前高田で出会った人たちについてである。

これが被災地

まず 1 つ目の被災地に訪れたことについてである。現地に訪れるまで、被災地の状況はテレビや新聞といったメディアを通して、ある程度の現状を把握し想像していたつもりであった。しかし、実際に津波の被害にあった市役所や博物館、小学校へ案内してもらったときに、それが現実のものであると受け入れるのにかなりの時間がかかった。信じられない光景が次々に目に入った。そこにはメディアを通してでは決して伝わらなかった何かがあった。特に心に残った場所が市民体育館であった。床や壁だけでなく、アリーナ席や天井までが完全に崩壊されていた。「地震後に体育館の中に大勢の人が非難したが、そこにも津波は容赦なく襲いかかり、体育館内が洗濯機状態になった。そして人々の命を奪っていったんだ。」と、現地を案内してくださった及川さんが教えてくださった。そこで命を落としたと思われる人たちの靴や鞄、写真やおもちゃなどがそのままの状態で残されており、どうしようもない気持ちになった。

この体験を通して、私はこの津波被害の現実を伝えなければならないことを心に強く抱いた。また、及川さんがつぶやいていた「人災だな」という言葉も決して忘れてはならないと感じた。自然と共存していくには自分たちはどのように生きていくことが持続する社会を築き上げられるのかという視点をつねに持ち、それを未来の子どもたちに伝えていきたい。

熱意

2 つ目に研究のスペシャリストについてである。2 日目に、何十年も文化財調査をされている山岸先生と、先生のゼミ生である修士課程の大学院生と一緒に、常善寺の仏像調査のお手伝いをさせてもらっ

た。実際にファイバースコープという小型カメラを仏像の中にいれたり、千手観音像を持ち上げたりと、本当に貴重な経験ばかりであった。いつもは拝んでいるだけの仏像を調査するとなると、かなりの緊張感があった。また、この調査によって、新たな歴史が発見されるかもしれないというワクワクした気持ちにもなった。しかし、一番この調査で私の関心を引いたことは、山岸先生や、文化財を専門としている修士課程の大学院生たちの調査に対する姿勢であった。専門としているだけあって、調査に取りかかると、仏像に対するまなざしが一変し、プロフェッショナルの顔つきになった。後で聞いた話では、文化財調査をするにあたって、何かを発見できる確立は 1 割以下だという。つまり、10 件文化財調査を回っても、何かが発見できるのはわずか 1 件。それでもその 1 件の発見することを求めて、調査・研究を続けているのである。これは文化財に対してとてつもない熱意と愛情が必要なことであると考える。また同時に、それは教師という仕事も同じであると感じた。教材研究や学級経営にどれだけ力を入れても、子どもが目を輝かせてくれることはほんの一瞬である。しかし、その一瞬のために教師は長い時間をかけて自分を磨いていくすばらしい仕事であると考える。今回の調査で先生や院生たちと同行させてもらい、大切なことに気づくことができた。

人から人へ

3 つ目に陸前高田で出会った人たちについてである。今回の陸前高田調査では実際の津波の風景を高台から見ていた現地の方々にインタビューすることができた。現地の方々は私たちを快く受け入れてくださり、いろんな被災場所に案内してくださった。そして実際にそこで何があったのか、見たまま、感じたままのリアルなお話を聞かせていただいた。一瞬で人や街が消えたこと、先人の知恵がいかに優れていたかということ、残された『希望の松』の保存についての思いなど、現地でしか聞く事ができない貴重なお話ばかりであった。また、難破した中吉丸のインタビューの時も、自分たちのご先祖様に対する思いをたくさん聞かせていただき、大変有意義な時間を過ごせた。

【東北弁で一生懸命伝えてくれた】

この 4 日間でたくさんの人に出会い、たくさんのことを聞いた。しかもそれは一人一人の思いがしっかりとこもっており、すべてが大切なことに思えた。まだ学生である私たちのために、こんなに親切に一生懸命語ってくださった方々へは本当に感謝にている。出会った方々にお返しができるとしたら、自分たちが陸前高田で聞いたこと、見たことを多くの人に伝えることであると思う。西日本では東日本大震災・津波に関する関心が薄れてきており、すでに復興されているといった誤報さえも流れている。そのようなことを防ぐために、まずは自分の周りから発信していきたい。

最後に

以上の 3 点が陸前高田での 4 日間を通して、自分が感じたこと、学んだことである。本当に今回は現地に立たなければわからないことだらけであった。本物に出会い、ふれる大切さを身にしみて感じた 4 日間であった。この体験を忘れず、まずは現地に立つといったスタンスを持ち続け、自己成長につなげていきたい。

「学ぶ喜び」プロジェクト―地域の人々と残された文化財

奈良教育大学大学院美術教育専修　2回生　小松原　絵里

1.　はじめに

「学ぶ喜び」プロジェクトの2012年9月6日から9日までの活動は、昨年の東日本大地震の被災地である岩手県陸前高田市の視察およびインタビューと常膳寺における仏像調査を行い、その後の活動で防災教育やESD教育などに活用することを主な目的とする。また昨年に世界遺産登録された岩手県西磐井郡の平泉を訪れ、中尊寺や毛越寺など遺跡や文化財等を実見した。調査中は仏像調査に重点を置くA班と防災教育・ESD教育に重点を置くB班とに分かれ、私はA班に属す。

事前の活動として3度に及ぶ勉強会が行われ、私自身はその3回目の勉強会に参加し、他の参加者の発表から陸前高田市のことや資料に書かれた被災時の状況などを学んだ。また仏像調査のため、調査に用いられるファイバースコープ等の機器のデモンストレーション、前回の調査時の内容学習などを行った。さらに最終日に訪れる平泉の毛越寺には、私の修士論文のテーマに関わる作例である「訶梨帝母像」があり、今回の拝観をより意味のあるものにするため、その像に関わる簡単なレポートを作成・配布した。

2.　考察

○活動１　陸前高田市の視察及びインタビュー

陸前高田市の「今」を目の当たりにし、私たちの想像以上に復興が進んでいないことを実感した。処理の出来てない土砂とがれきの山とそれを手作業で分ける人々、プレハブで営業する銀行やコンビニや店、市役所も簡易施設のままであった。雑草が生い茂るその中にかつて家が建っていたであろう形跡をみることができ、建物として確認できるものは市役所や博物館、体育館などいくつかのみで、それらも津波の脅威を示しており、聴けば博物館の資料も殆どが流されてしまったということであった。また幾つかのお話のなかで印象的であったのは津波の脅威だけではなく規定の避難場所の人々が被災してしまい昔の教え通りに山の方へ避難した人々が助かったこと、山の方へと避難したくても土砂崩れを防ぐコンクリートの壁があったこと、海岸に近い地域の人々の方が、少し海岸から離れた地域の人々よりも津波を意識して比較的避難ができたこと等である。入り江の形や地形の関係で被災時の様子もやや異なり、従来の単一的なマニュアルでは対応できないことを知った。科学的な調査に基づいたマニュアルに加え、各々が逃げていると信じ互いが生き延びるということ、何処でどのような形で被災するかわからないので自分で考え行動する力をつける防災教育が必要であることを学んだ。

○活動２　常膳寺での仏像調査

前回の調査では口径6㎜ファイバースコープでは像内の銘文を確認することができなかった十一面観音立像と千手観音立像の調査から始めた。この度用いられたファイバースコープは口径2.4㎜であったが、十一面観音立像の像内の銘文を確認することは叶わず、千手観音立像に関してもファイバースコープが入る余地がなかった。あとは両像共に後の解体修理時に期待するのみと思われる。次に前回の調査で銘文が確認された阿弥陀如来坐像の再調査を行い、明瞭ではなかった部分の一部を判読することが可能となった。また地域の人々と共に薬師如来立像像内の銘文を確認する他、不動明王立像を含めた調書作成などを行った。ファイバースコープを用いる調査への同行は始めてで

図 1　十一面観音立像の調査の様子

あった為、機器の扱いや調査時の留意点など実践的内容を学ぶことができ、調査の様子を見に来られた地域の人々の様子やお話からこの度の調査への期待と被災後に残った文化財への強い想いを知ることができた。

〇活動３　平泉 毛越寺における「訶梨帝母像 」

平泉には世界遺産に指定された仏国土(浄土)を表す建築や庭園・考古学的遺跡群があり、それを初めて目の当たりにすることができたことも貴重な経験であったが、平安時代まで遡る国内の作例が少ない 訶梨帝母像 の一つである作例を実際この目で見ることができたことは、私にとってそれと同じかそれ以上に大きな意味をもつ経験となった。それまでに見ることのできた資料で想像されたよりも上半身の保存状態が良く、大らかで美しい曲線の像であった。資料では判別し難かった右手の様子や左手に抱えられた子の表情やその身体、また膝下の補修部分までも確認することができた。他の作例と比べても東北地方だからこそ見られた表現を持つ作例であったのではないかと思う。この経験を必ず修士論文に活かしたい。

3.　まとめ

被災者の方々の話を聞く中で、私が感じたことの内の一つに郷土の文化財への強い想いがある。地元の歴史や文化を示していた文化財や資料が多く流されてしまった後に僅かに残ったそれらは、単に文化財として貴重なものとしてだけでない役割を果たしているように感じられた。今後の活動では現地で私が学び、聴き、視て、感じたことを活かし、後世まで文化財を残したいという地域の人々のために、その未来を担う子どもたちが文化財を通して地域について知り、学びやすいような教材を開発したい。実見することの大切さはこの度の活動でも改めて感じられたことであるので、できれば文化財と実際に観ながら学びが深められるような地域学習としての教材を考えている。子どもだけでなく大人が見ても遜色のない内容と、実際に使って貰えるような教材というものを突き詰め作成することが今後の課題である。

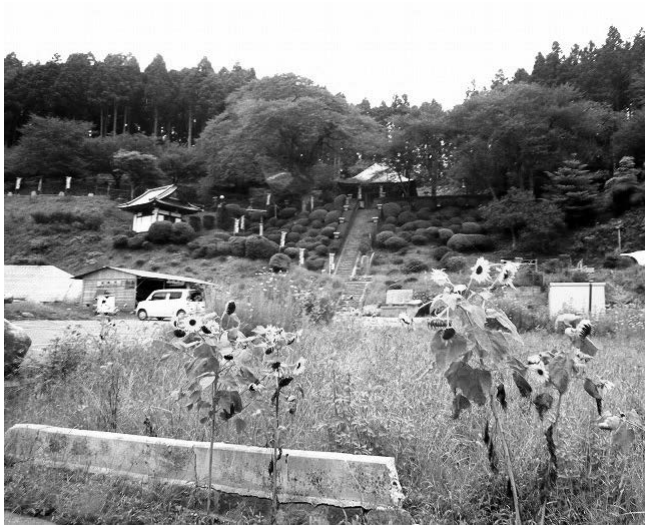


図 2　金剛寺跡と復興のシンボルのひまわり

陸前高田を訪ねて

奈良教育大学教職大学院　１回生　新宮　済

９月６日から９日までの４日間、学ぶ喜び・ＥＳＤプロジェクトの一環で、岩手県陸前高田市への文化遺産調査団を組織し、調査に出向いた。調査の目的は①文化財調査、②防災教育、③文化遺産を通したＥＳＤの教材化である。今回の文化遺産調査団はＴ型モデルがはじめて導入された。Ｔ型モデルとは教育大の学部生、大学院生、教職大学院生が大学チームを組んで参加することで、教授に三者がついて動くことで学びをさらに深めていくモデルである。調査団は教員２名、教職大学院生２名、文化財造形専修大学院生２名、学部生２名、計８名で構成された。

私はこのプロジェクトに深い思い入れがあった。昨年の東日本大震災から１カ月たった４月２６日、私は関西からありったけの水と非常食を背負って石巻市に住む友人のもとを訪れた。街に立つと恐怖で足がすくんだ。私の記憶にある友人の住む街はすべて波に奪われてしまっていたのだ。「全部もってかれた。」とつぶやく友人に、何の言葉も返してあげられなかった。今回の教材化は、津波で失われなかった文化財調査から、『街には、こんな素晴らしいものが残っているんだよ。』と学校現場で発信することで街に希望をつくることができる。その一役を東北出身の自分が担いたいと考えた。

震災から１年半経った被災地は、いたるところに津波の傷跡を残していた。現場で高田市民と一緒に４日間活動できたからこそ感じたこと、学んだことについて防災教育、文化遺産を通したＥＳＤの教材化の順に報告する。

津波で流された千本松原

防災教育

研修では被災地や学校を巡り、及川さんや佐藤先生など陸前高田の方々の声を聞いたり、校長先生にインタビューしたりできた。私達は出発前の事前学習で写真集や YouTube で見た被災地に立った。住宅街は跡かたもなく流され、地面には覆い隠すように草が生えていた。及川さんは被災地を一緒に歩きながら様々な思いを語ってくださった。実際にご覧になった津波の光景、自然に対するやるせない思い、失った友人の記憶、その１つ１つが魂の叫びとなって心に響いた。広田半島の海岸沿いを車で走ると震災記念碑を見つけた。震災記念碑とは１９３３年の三陸津波の後に朝日新聞社が「津波が起きたら高台に避難するよう」教訓として刻んだ記念碑である。「記念碑は地域の人にとって、津波はここまであがってくるよというライン。今回もここより下が波にのまれたんだよ。俺らみたいな年寄りと漁師は小さい時から教えられてきたから教えを守ったけど、若い人は知らねがったんだべなー。」と及川氏は悔しそうに話した。三陸津波で助かった先人が残してくれた貴重なメッセージが伝わっていれば、助かった命があったかもしれない。私はこの記念碑を見ながら「生きるための情報」を後世へ伝えていくことの大切さを感じた。

大地震の後は津浪が来るよ
地震があったら、高所に集まれ
津浪と聞いたら、欲捨て逃げよ
低いところに住家を建てるな

石碑に書かれた言葉

小友小学校での校長先生へのインタビューでは、これまでの防災教育に対する考え方が大きく変わることとなった。校長先生の「教員は、子どもたちが生きるために動くこと、生きるための決断をすることが大切だ。」という言葉が心に残った。リーダーの判断ミスにより悲しい死を迎えてしまったたくさ

小友小学校長先生に話を聞く

んの人がいる。これからの教師に求められていることは、子どもたちが生きるための決断できる力ではないか。マニュアルに従うだけでなく、教員が自分で判断することの大切がわかった。

「これまで子どもたちにとって、海はめぐみであった、津波があって海の怖さが染みついた。だからといいって怖いからこの地を離れることは現実的に不可能なのです。はやく復興したい。」

そう強く言い残し校庭で野球する子どもたちを見つめる姿を見て、まだまだ復興は終わっていないことが伝わった。

文化遺産を通したＥＳＤの教材化

陸前高田市で指定されていた文化遺産はほとんどが流失したそうだ。なぜなら陸前高田市の博物館は海岸部に所在していたため、今回の大津波によって、被災したからである。博物館跡にはがれきが散らばっていた。二階は収蔵庫であったと思われるが、収納ケースが壊れ、そこにあったであろう文化財は跡形もなかった。今回調査を行った常膳寺の算額や、中吉丸の生存者が持ち帰った伝道書や貝なども、博物館で大津波に飲み込まれてしまったと聞いた。

中吉丸の文字と初対面した子孫の方々

市のシンボルである高田松原も最後の松が枯れてしまった。石巻で聞いたように、及川さんも「文化財も全部もってかれた。」と悔しそうに話していた。

常膳寺での仏像調査では、仏像の胎内にかかれた墨書を解読していくなかで、江戸時代末に漂流し、奇跡的に生還した中吉丸事件との関連が発見できた。先人が残した小友町と小笠原の海を越えた交流が時を経てふたたび動き出したのだ。中吉丸事件は、陸前高田市史にも記載されている事件だが、地元でもあまり伝えられていないようだった。今回の調査結果をもとに、中吉丸と薬師如来像の教材化を行い、地元の子どもたちが地域のよさを見つけ、地域を大切も思う心を育てるお手伝いができればと思う。

高田を訪ねたことで、高田市民の魅力もたくさん見つけた。「津波で流されてしまったけれども、必ず復興しますから、遊びに来てください。」と話してくれた気仙大工伝承館職員の笑顔が忘れられない。高田に生きる市民のあたたかい心を是非伝えたいと感じた。

現場に立って知ったことは、まだまだ復興が終わっていないことだ。それでも市民の方々は様々の形で復興しようと頑張っていた。松原保存会の生き残った松の栽培、明りの少ない街を照らすラーメン屋、震災後も育てつづけているブドウ畑。中吉丸の歴史を調べ発信する人々、町に残る良いところを自慢してくれた市民の表情は明るかった。新たな町の良さ見つけ出し知ってもらい、市民の明るい顔を増やしたい。「文化遺産を通したＥＳＤの教材化」することで復興の手助けになれるのではないかと考えた。

「岩手研修旅行」を経験して

奈良教育大学大学院美術教育専攻　２回生　宮武　杏名

（1）はじめに

今回、２０１２年９月６日から９日まで、主に陸前高田にて活動を行った。６日に陸前高田の被災地を現地の方々に案内していただき、市立小友中学校を訪問した。７・８日には常膳寺での山岸先生の仏像調査に同行し、９日に、世界遺産・平泉を見学した。私は主に仏像調査を中心に行うＡ班に属し、被災地の見学や被災者の方のお話から防災に関して考えることと、常膳寺の仏像調査から被災地の方を元気づけるきっかけを見つけることの２つを目指し参加した。結果として防災に関しては自分で考えて動くことが大切になる、ということを学んだ。仏像調査では、私自身が調査の経験を積むことが出来た。また今回調査した仏像が多くの文化財を失った陸前高田に残った数少ない貴重な文化財であることを学んだ。

（2）考察

まず防災についてである。初日に陸前高田の町を見学した際、案内して下さった方からは「人災の側面もあった」とお聞きした。自治体が指定した避難場所であった気仙小学校や、市立体育館は津波に飲み込まれてしまっていた。小友中学校の校長先生は「避難したら点呼を取る、でもそれより前に逃げないといけない」とおっしゃった。今後必要なこととして、学校管理外で被災した時の対策や自由度の高い訓練の必要性を挙げていらした。

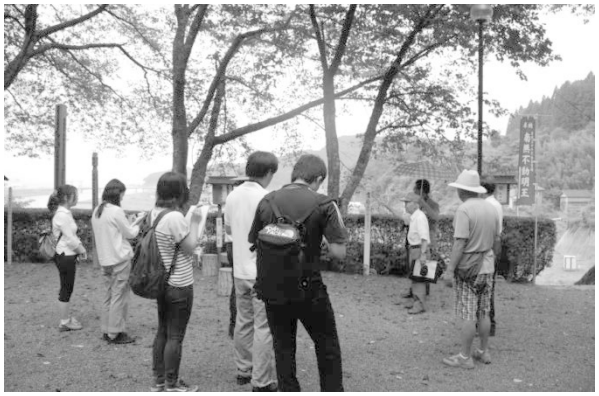


図 １避難所となった寺で当時の話を聞く

このように被災した方々からの話をうかがっていると、マニュアルに頼るだけでは、今回のような予想を大きく上回る自然災害の時、生き残ることの難しさを感じた。指定された避難場所は必ずしも安全ではなく、少しでも高いところへ逃げることが自らの命を守ることにつながった。目や耳にする情報、昔からある情報を統合して安全なところへ逃げる、素早い判断力とそれに足る知識を持っておくことが、今後の防災には必要となってくるのだろう。その際に、小友中学校で行われている「我が家の防災カード」といった、子どもが学校で学んできたことから、大人も一緒になって防災を考えるような取り組みが有効であろう。

次に仏像調査に関して述べる。今回調査を行ったのは常膳寺観音堂の十一面観音立像・千手観音立像・薬師如来立像、阿弥陀堂の阿弥陀如来坐像、客殿の不動明王立像である。不動明王立像以外は今年６月にあらかじめ山岸先生がファイバースコープによる調査を行っており、その際に薬師如来立像、阿弥陀如来坐像からは像内銘文がみつかっている。今回は前回ファイバースコープが入らなかった十一面観音立像・千手観音立像・不動明王立像の内部をより小口径のファイバースコープで調査し、調書を作成した。十一面観音立像・千手観音立像ともにファイバースコープは入ったものの銘文は見つからなかった。不動明王立像は残念ながらファイバースコープが挿入できなかった。さらに阿弥陀如来坐像は前回未解読だった文字を一字解読した。十一面観音立像については背景を白にした写真の撮影も行った。

図 2 脚立に上りファイバースコープが入れられるところを探す

今回の調査は私には初めてづくしであり、私自身の仏像調査の経験値を大きく上げてくれる調査だった。初めて３ｍを越える大きさの仏像を経験し、大きいとファイバースコープを差し込むスペースを見つけるのにも脚立が必要で、思いのほか大変であると学んだ。阿弥陀堂では蜂が巣をつくっているため屋外で調査を行った。その場にあるものを有効に使い、与えられた場所で最大限の調査を行う姿勢を山岸先生から学んだ。

また、調査中についていて下さった方に、２つの陸前高田の文化財について伺うことが出来た。その話から学ぶことが大きかったように思う。ひとつは常膳寺に奉納されていた江戸時代の算額についてであった。ずっと客殿にあったが、日焼けによる劣化を防ぐため市立博物館に寄託したのだという。もうひとつは小笠原へと漂流した中吉丸に関連する資料である。これも博物館に入れてあった。しかし博物館の立地により、これらの資料は津波で流されてしまったそうだ。文化財の収集・保管を行うべき博物館は津波を前にその役割を果たせなかった。今回の調査にご協力頂いた方々のお話を聞くに、やはり地域住民の喪失感は大きいようだった。安全だと考えて寄託したが、失われてしまったのだ。

博物館が被災し、多くの文化財が失われたことによる人々の喪失感はあるけれども、一方で今回調査を行った仏像が、どうにか残ったこの地域の貴重な文化財として、人々の前向きな期待につながるものになりうると感じた。失われた文化財は元に戻ることは決してない。しかしそこから学ぶことはできる。残ったものを大事に守っていくこともできる。それが人々の喪失感を埋めていくきっかけにも、復興の足掛かりにもなるのではないか。ちなみに 2012 年 10 月 4・5 日の 2 日間、常膳寺では他のお寺と合同で復興祈願の合同特別開扉を行うのだという。前向きな一歩はもう踏み出されていた。

図 3 普段は幕で隠される十一面観音立像

（3）まとめ

今回、「学ぶ喜び」プロジェクトでの研修旅行で私が主に携わったのは、常膳寺の仏像調査であった。しかし、この４日間で私は仏像調査の経験を積む以上に多くのことを学んだ。それは実際に見たり聞いたり、経験することに勝るものはないということである。テレビでみる被災地と目の当たりにする被災地はどこか違って見えた。調査に協力して下さった方々の中には、涙を流しながら案内して下さる方がいた。資料を用意して、時間を作って説明して下さる方がいた。なぜ見せようとしてくれるのか、なぜ語ろうとしてくれるのか。失ったものから学びを見出し、それを語りついでいく。失ったものは決して戻ることはないけれどあったことを忘れないこと、学んだことを忘れないこと、そうすることで前へと進んでいくことが出来ると感じた。

陸前高田市からの報告

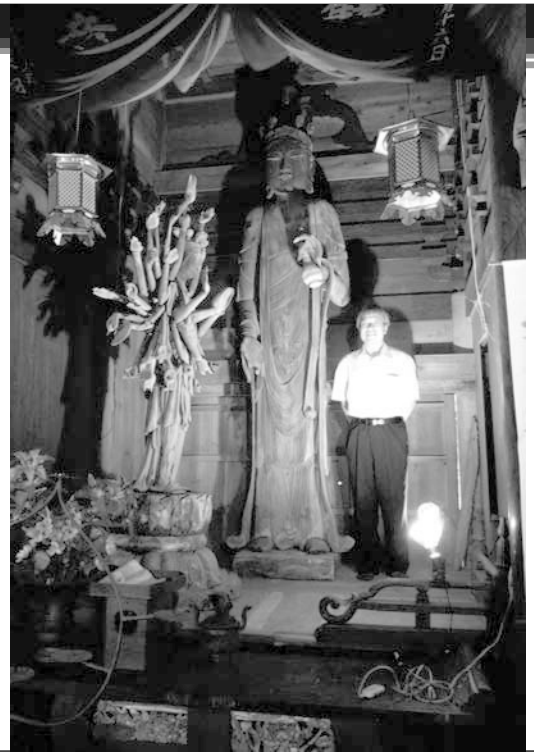
奈良教育大学　中澤静男

陸前高田市訪問

目的

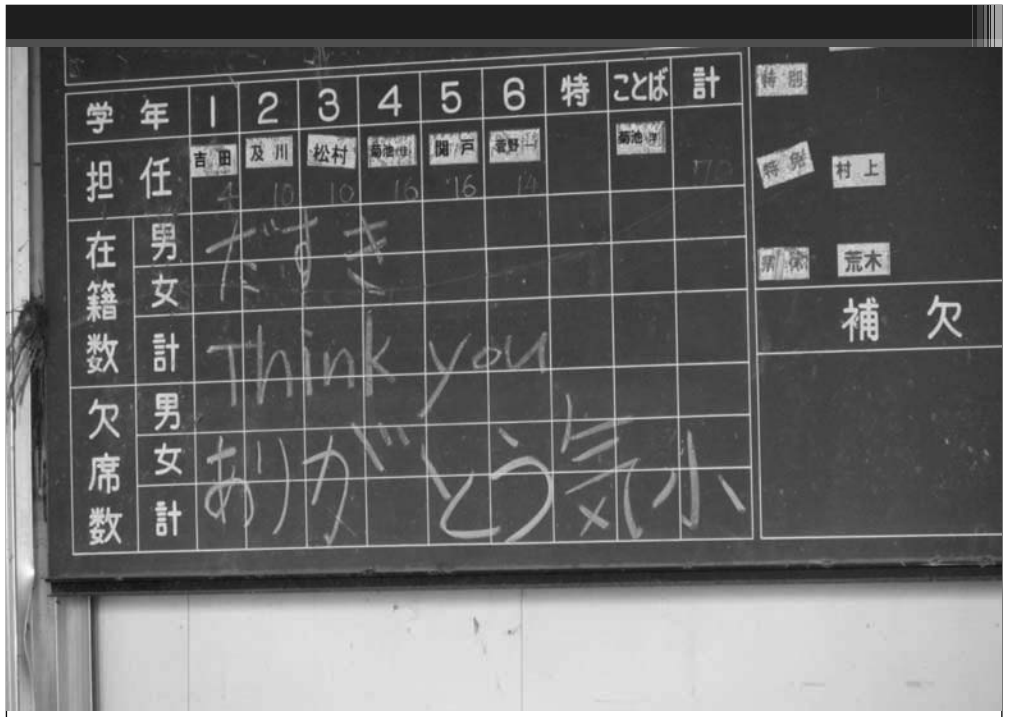
① 陸前高田市の常膳寺での文化財調査

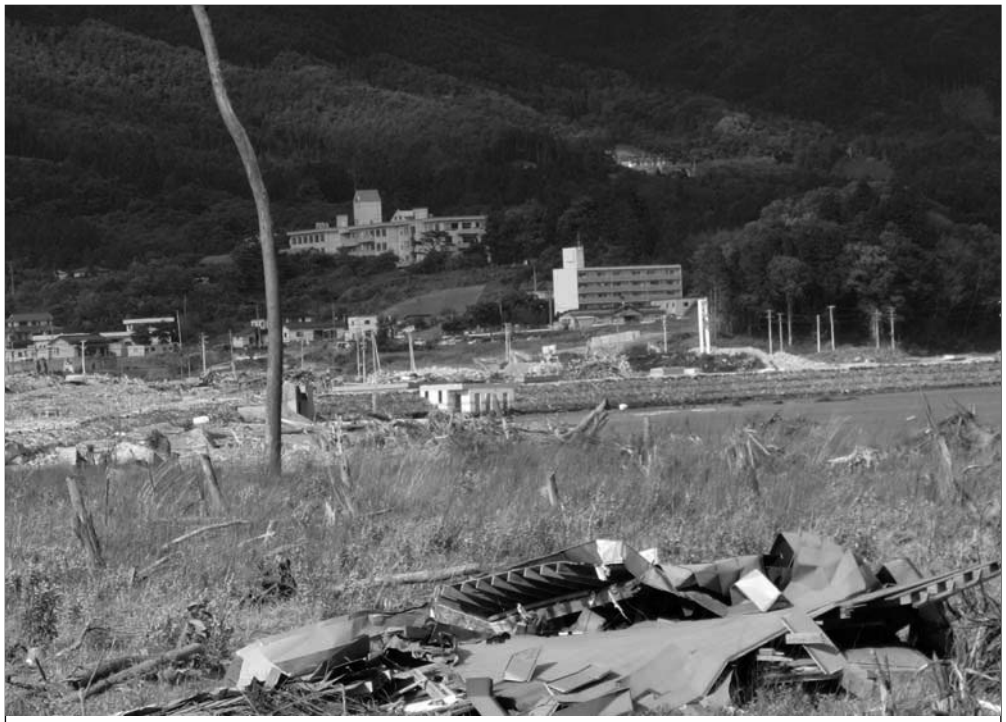
② 被災地の現状視察



もしも
ぼくに おねえちゃんが いたら
さく・え そう

庁舎案内板


学年
1
2
3
4
5
6
特
ことば
計
担任
吉田
及川
松村
関戸
在籍数
男
女
計
欠席数
男
女
計
特別
村上
荒木
補欠
だいすき
Think you
ありがとう気仙



平成２５年度　陸前高田市文化遺産調査　報告概要

１．目的

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災及び大津波により、陸前高田市は大きな被害を受けた。市民の約 1 割にあたる人命が失われたほか、市庁舎を始め、博物館や図書館、文化ホール等の市の重要施設が被災した。多くのものを失ってしまった。しかし、幸いにも高台にあった寺の仏像は被災をまぬがれた。この仏像等の文化遺産を調査し、その価値を明確にすることが、陸前高田市の市民を元気づけることになると考え、被災地支援の一環として本調査団を派遣する。また、併せて被災地の状況を視察し、被災された方から聞き取りを行い、現地での防災教育・ＥＳＤとして実施する。

２．実施月日

平成 25 年 8 月 26 日（月）～　29 日（木）　3 泊 4 日

３．派遣先　陸前高田市　常膳寺　小友小中学校、高田松原
住田町　浄福寺
石巻市持福院観音堂、慶長遣欧使節ミュージアム　　他

４．活動内容

（１）浄福寺での文化遺産調査
常膳寺十一面観音との関連、伊達氏の関わり

（２）常膳寺での講演会
昨年度の文化遺産調査の報告会

（３）文化遺産を通したＥＳＤ教材の作成
慶長遣欧使節（支倉常長関連）、遣欧 400 年記念事業

（４）防災教育
高田松原を守る会、被災地

５．参加者

教員　：山岸公基、中澤静男、
大学院生　：千々石喜一（Ｍ１・美術教育）、木谷智史（Ｍ１・美術教育）
教職大学院生：土海稚奈（Ｍ２）、英優美（Ｍ２）
学部生　：横井まどか（3 回生・文化財造形）、二階堂泰樹（3 回生・社会科教育）

６．日程

26 日（月）仙台空港からレンタカーで石巻市へ移動し、石巻市持福院観音堂、慶長遣欧使節ミュージアムを見学後、浜通りを北上しながら被災状況・復興状況を車内から視察する。

27 日（火）午前：陸前高田市教育委員会訪問、泉増寺拝観、市内を視察
午後：仮設住宅訪問と常膳寺拝観
夕方から常膳寺文化財についての講演会（山岸先生）
陸前高田市立小友小学校訪問

28 日（水）：午前：住田町浄福寺文化遺産調査、高田松原を守る会について聞き取り調査
午後：調査継続と陸前高田市視察、高田松原見学、
29 日（木）：午前：天平産金遺跡（大仏鍍金）見学

７．文化遺産調査

①　住田町、浄福寺向堂観音堂十一面観音菩薩坐像調査において、台座裏面から、「伊達綱村」の墨書を発見する。

②　陸前高田市泉増寺の仏像は、金庫に納められ、その鍵が津波で流されたため拝観できなかったが、伊達綱村の発願によるものと伝えられている。

③　昨年調査した常膳寺の阿弥陀如来坐像にも伊達綱村の墨書があった。

以上のことから、江戸時代の気仙郡と伊達綱村には何らかの関わりがあったと思われる。今回の生徒用教材は、これをテーマとしたものとなると思われる。

８．防災教育

①　仮設住宅訪問

② 高田松原に関する聞き取り調査

高田松原の歴史について

高田松原を守る会の活動について

③ 現地見学

「文化財」と「防災教育」

文化財造形専修　３回生　横井　まどか

向堂観音堂

平成 25 年 8 月 26 日から 29 日にかけて、昨年度調査された常膳寺の仏像に関係があると思われる仏像を調査するとともに、防災教育について学ぶ目的で、陸前高田市文化遺産調査団の一員として岩手県陸前高田市、住田町を訪問した。平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災・津波から約 2 年半が経ち、実際に復興がどこまで進んでいるのかを自分の目で確認しておきたかったことと、地域の文化財について知ってもらうことで少しでも被災地の方々の励みになればと思い、参加させていただいた。

今回の調査で私が学んだことが３つある。一つ目は文化財の調査について、二つ目は地域の防災について、三つ目は文化財と防災教育の関係性についてである。

一つ目の文化財の調査についてである。今回、私は初めて文化財調査に参加させていただいた。調査の主目的は、昨年度の調査対象であった常膳寺十一面観音立像及び千手観音立像と同時期に製作されたと思われる岩手県住田町の向堂観音堂の十一面観音菩薩坐像の調査である。写真でその仏像を見た時、私は像高 50 センチくらいの大きさかと考えていたが、実際の大きさは約 30 センチで、内刳りはなく持参したファイバースコープを挿入する箇所もなかった。そうそう思ったように調査は進まないのだと思い知らされた瞬間である。実際に調査する姿を見なければわからなかったこともあり、調査には臨機応変さが必要だということを先生や先輩方から学ぶことができ、参加してよかったと思った。

今回の文化財調査で驚いたことは、地域の方々の関心の高さであった。山岸先生の講演会も然ることながら、向堂観音堂の調査の際にも地域の方々が来て下さり、興味深げに先生の言葉に耳を傾けていた姿が印象的だった。それまで本当に地域の人たちにとって文化財を調査することは励みになるのだろうかとか、もっと効率の良い地域のためになるなにかがあるのではないかと、若干不安を感じていたのだが、杞憂だったようである。向観音堂の十一面観音菩薩坐像の台座裏から現れた伊達綱村の文字を見た時の地域の人たちの感嘆や、講演会のときの人の集まりを見て、被災地で一般にイメージされるボランティアや復興活動とは違う文化財調査という形でも、地域の方々に貢献することができるのだということを知ることができた。

二つ目の地域の防災についてである。それは今回陸前高田市を訪れた中で、私が最も衝撃を受けた光景だった。震災から二年以上が経ち、街全体が高台に移転する予定だと聞いた時、何故震災前には高台に住んでいなかったのだろうかと不思議に思っていた。海に近い方が便が良いからとか、漁業関係者が多かったからと、自分勝手に予想していた。しかし、実際に陸前高田市を訪れてみるとそうではないことがわかった。陸前高田市の地形は、市街地が海沿いに広がっており、その背後に勾配のきつい山が迫っていた。海沿いの市街地のほとんどが津波の被害を受け、今は夏草の茂る野原に変わってしまっている。ところどころに残る被災した建造物がないと、市街地だったとは想像するのも難しい。そして今、勾配のきつい山を切り崩し、移転先を造成している。山育ちの私は、あんなに木を切って土砂崩れの心

配はないのかとか不安になる。しかし一方で、それ以外に一体どこに街を移転させるのかという問題がある。津波で被害を受けた元の場所に街を立て直すわけにもいかず、そうなると移転先はもう山しかないという苦渋の決断であったと思う。他の被災地では、移転先がなく元の被災地に復興を始めた街もあるという新聞記事も目にした。被災した街をどう復興していくかということは、絶対的な正解が存在しない課題のように思える。山に近い地域で育った私には、土砂崩れや鉄砲水など山の災害をすぐに思いつくが、海がもたらす災害についてはぴんと来ない。津波が来た時どうしたらいいかについてもわからない。逆に、海に近い地域の人たちは、山特有の自然災害については、具体的なイメージを持っていないのではないかと思う。山に移転していく陸前高田市を見て、地域ごとの地形に即した防災に加えて、ある程度の、他の地形における防災についても学んでおく必要があるのではないかと感じた。

復興工事で切り崩される山々

三つ目の文化財と防災教育の関係性についてである。縁のないように見えるこの二つを、どうにかしてつなげることはできないだろうかと、今回の調査の最中私はずっと考えていた。私は大学に入学してから何度か ESD を勉強して来た。切り口は文化財、環境、防災など様々であるが、ずっと勉強していると、それぞれ独立しているように見えても実はどこかでそれぞれの分野が関わり合っていることに気づいた。今回の調査では文化財と防災教育がテーマであったが、この二つもどこかでつながっているように感じられ、地域というものに焦点を当てれば答えが見えてくるのではないかと考えた。この考えが間違っていないと確信できたのは、小友小学校を訪問し、聞き取り調査にご協力いただいた西條副校長先生の「防災教育は地域への安心感がなければ成り立たない。その地域への安心感を育てるのは地域の価値を知ることから始まっている」という言葉だった。その地域の価値を知る上で、地域の文化財が一定の役割を果たすことができる。地域というものを中心に位置づけることで文化財と防災教育はつながっている。こうして防災教育を実践されている現場の先生から文化財の役割を指摘していただいたことで、自分たちのしていることは無駄ではないということが実感できた。

今回の調査で私たちは文化財に関わる方、地域の方、教育現場の方など様々な人に出会った。それら全ての人々に共通していたのは、自分たちが住んでいる地域を大切にしているということだったと思う。今回の調査の目的は文化財と防災教育だったが、そこには必ず地域との関わりがあったように感じる。改めて、地域というものの大切さや人と人とのつながりの大切さを感じた。それと同時に、日常の尊さを思い出した気がする。行きの車内から一瞬見た、ごく普通の高校生たちがはしゃいでいた姿が忘れられない。当たり前の日々に感謝しよう、誰かに笑顔になってもらうために頑張ろうと、そんなことを思えた 4 日間だった。今回の調査に関わった全ての方々に感謝致します。ありがとうございました。

奈良教育大学陸前高田文化遺産調査団

東北地方の現状と仏像調査による姿勢の変化

美術教育専修大学院　１回生　木谷　智史

１．はじめに

2013 年 8 月 26 日から 29 日の期間、主に陸前高田市にて、防災教育・仏像調査の活動に参加した。本活動の目的は、東日本大地震の被災地である岩手県陸前高田市の現在の復興状況の視察と東北地方の文化遺産調査である。文化遺産調査には、サンファンバウティスタ号、東北歴史博物館などが含まれている。二日目以降、教員・大学院生・教職大学院生・学部生で構成された組織は、防災教育チームと仏像調査チームの二つに分かれ、それぞれ調査を進めることもあった。私は、仏像調査チームに属し、陸前高田市常膳寺・住田町向堂観音堂等の調査に参加した。また、仏像調査と並行しつつ防災教育も行った。

２．被災地の現在の状況

被災地には、東日本大震災後初めて訪れた。仙台空港に飛行機が着陸後、仙台空港にまで津波が押し寄せていたニュースの光景を思い出した。仙台空港と海は、直線距離にして 1.5 ㎞ほど離れている。津波の恐ろしさを感じた。

そして、車を走らせている間も被災地の状況が目に入ってくる。多くの被災した建物は、撤去されてしまったのか、思っていたほど目にすることはなかった。被災前、家が建てられていた場所は、現在、草が生い茂るままにされている。一見しただけでは、被災地であったかどうかよくわからない。本来から草地なのか、それとも被災後の状況なのか。たまに骨組み部分だけの建物などが見え、そこが被災地であることがわかる。

この状況は、被災した建物や流されてきたがれきなどを撤去した結果によるものだ。海岸沿いに高く積まれたままになっているがれきの山を目にしたときに、その労力の大変さが感じられた。今は、がれき撤去にとどまり、この後の土地利用については検討中のようだ。なぜなら、また津波が来たとき、そこは被災する可能性が高く、人が安心して住める環境とはいえないからだ。では、これから先も東北で住む人は、どうするのだろうか。

陸前高田市での仏像調査による被災地支援を発案され、今回の調査において色々な面でお世話してくださった及川さんが、「今は、山を切り崩して高台に住むための工事が行われている。そのためにダンプカーが多い。」と話してくださった。今後の津波被害を考えて、高台に住民が住める土地を造成しているのだ。海岸沿いなど、今後も津波による被害が想定される地域は、がれきを撤去するだけにし、今のところ雑草が茂るままに放置されているように見受けられた。山を切り崩して高台を作っている間、住民は仮設住宅に住んでいる。今後の海岸沿いの土地利用について、非常に興味深く思った。

区長をされている松坂さんのご厚意で、仮設住宅も見学することができた。被災後、数年が経ち、仮設住宅の問題が徐々に露わとなっている。それは、仮設住宅に住む人々の間で交流があまりないことである。仮設住宅への入居が始まった頃、障害のある方や高齢者から順番に入居が進められたそうだ。しかし、地域コミュニティから離れてひとりで入居された場合、人間関係を築くところから始めなければならず、障害のある方や高齢者にとって簡単なことではない。そのため、誰かと話す機会が減り、会話のない日々をおくることになる。仮設住宅からいつ出られるのかといった不安を抱えながら生活する。それは、私たちには到底理解することのできない不安だと思う。今は、被災前の町内会ごとに入居する

ようになり、仮設住宅内に設けられた集会所等で、地域コミュニティの活動も行われるようになっていると、おっしゃっておられた。

民宿に到着するころ、周囲は暗くなっており、周りを見渡すとほとんど灯りがなく、人の営みを感じることができない。それは、津波により被災した地に建物が建っていないこと意味している。海岸沿いなどの瓦礫処理などには、復興の成果を確認できたが、被災した人たちへのケアという点では、課題が残る。

３．仏像調査

調査する仏像については、事前に山岸先生より写真で紹介はされていた。しかし、実際に見ると写真では伝わらないものがあることに気づかされた。像の顔、体つき、装身具の細かさ、衣の皺など今までに見たこともない表現のものが本当に多かった。そして、それらの仏像の特徴が、時代性を反映したものであるのか、それともこの地方の特徴なのかの見極めが難しく、勉強の足らなさを感じた。

今回の仏像調査を通して学んだことが３点ある。一つ目に仏教美術史の学び方、二つ目が仏像への接し方、三つ目が調査内容の開示についてである。

一つ目の仏教美術史の学び方である。今回、山岸先生より調書を記入することを任され、先生の発言を必死に記入をした。書けない・意味のわからない漢字なども多々あったが、一つ一つ質問をすることで解消することができた。完成後、像を見ながら読み直すと、山岸先生の仏像の着目点を勉強することができた。丁寧に観察することで情報を引き出していく。これが、仏教美術史の勉強方法かと理解した。

二つ目の仏像への接し方である。調査にあたっての山岸先生の準備や、仏像を前にしての敬意を示した扱い方なども学ぶことができた。やはり、信仰の対象であることを忘れてはならない。山岸先生はそのような姿勢を大切にし、像を調査されていた。

三つ目に調査内容の開示の大切さも学んだ。先生が行った講演会では、非常に多くの人が熱心に傍聴されていた。それは、地域の宝がどんなものであるのか、また、みんなで守っていかないといけないという意識の現れであるとも感じた。

見学に訪れた神社の境内で、津波によって流された仁王像が、トタン板の下でバラバラになり置かれていた。流されたものも存在するが、残ったものもある。震災にも負けなかった仏像を調査し、歴史的背景が判明したことで、未熟な学生であるが、被災地の方々に少しは貢献できたかと考える。

図１　寺の境内に置かれていた仁王像

４．まとめ

今回の東北地方への視察並びに調査は、意味をなすものとなった。被災地の視察では、現地に行かなければ知ることのできない地域の現状を知ることができた。そこでは復興とは、瓦礫処理だけではなく、人と人の繋がりをつくっていくことが重要であると感じた。

文化財調査では、仏像の観察の仕方や信仰の対象物であるということの理解、文化財というものを後世に伝えていくためにも歴史を明らかにすることが大切であるということを学ぶことができたと思う。

「奇跡の１本松」から学ぶ「高田松原の軌跡」

教職大学院２回生　英　優美

１．はじめに

2013 年 8 月 26 日（月）～29 日（木）の 4 日間，岩手県陸前高田市に赴き，文化財調査及び防災教育について学んだ。この研修を志望した理由は 2 つある。1 つ目は，もともと中学校社会科の教員を目指しており，文化財調査に興味を持っていたからである。2 つ目は，私自身東日本大震災以降，東北地方を訪れたことがなく，学校現場に出る前にどうしても被災地をこの目で見たいと思ったからである。実際に東北地方に降り立つと，予想していたイメージとは異なり，陸前高田の被災地には瓦礫すらほとんどない状態であった。しかし広範囲に何もない草原や田んぼが広がっていたことから，津波の被害の大きさを実感した。今回の被災地である陸前高田市で学んだこと，感じたことを「高田松原」を中心に述べたいと思う。

２．草原地帯になった町

被災する前，陸前高田市の海岸沿いに 7 万本の松が植えられていた。この高田松原は，やませや潮風から田畑の作物や土壌を保護する役割を江戸時代から担っていた。今回，現地視察や取材等から見えてきたのは津波によって沿岸部の土壌が浸食され，漁業だけでなく，農業にも大ダメージを与えたことであった。陸前高田市の沿岸部では，試験的に入れ替えた田以外は植物が育たないという厳しい現実であった。見渡す限りの草原地帯に驚きを隠せなかった。津波が家屋だけでなく，耕作地帯まで飲み込んでいった爪跡が未だにはっきりと残っている。そして第一次産業の復興は，この地域にとっては最も重要なことであると思った。

試験的に入れ替えた田んぼ

海岸沿いでは高台移転の工事が進み，近隣の山を崩している。その山土を被災した地域に運び込み，かさ上げしている。市街地全体を高台に移転させる計画のようだ。内陸部では，スーパーや市役所，診療所等の建物もプレハブで建てられていたが、その風景が来年にはどのように復興が進められて変わっていくのか，その過程を追いたいという思いが芽生えた。

３．「高田松原を守る会」の活動

陸前高田市には，情報番組等でよく取りざたされていた「奇跡の 1 本松」と称される 1 本の松がある。あの大津波に耐えて生き残った 1 本の松は今も尚，復興のシンボルとして地元住民の心の支えになっている。しかし，この 1 本松のモニュメント保存をめぐっては，地元住民から賛否の声があることを知った。この 1 本松は，塩水によって根が枯死し，寿命がつきている。しかし，復興のシンボルとして後世に残したいという声があがり，寄付金 1 億 5 千万円をかけて工事が行われ，今日までその姿を維持している。地元住民の中には，寄付金や復興予算を「奇跡の 1 本松」の保存に使用することに対する反対意見も多くあり，未だに仮設住宅で暮らしている地域住民等

奇跡の 1 本松

の生活の復興優先を望む意見を多いという。

ここで着目したいのは,「高田松原を守る会」の活動である。この活動の中心人物である及川征喜さんからお話を聞く機会があった。「高田松原を守る会」では,海岸沿いの高田松原を被災する以前の姿に戻すため,土壌の良い高台で畑を耕し，松の苗を育てる活動を行っている。そして育てた苗を，段階的に以前の場所に植えるという計画が推し進められている。「高田松原」の再興こそが，本当の意味で東日本大震災の復興のシンボルとしての価値があり，地元住民に希望を与えることが可能であると,「高田松原を守る会」の方々は考えておられるみたいだ。及川さんのお話や「高田松原を守る会」の活動に触れることができ，目に見える景観的復興だけでなく，地域の人々の「心の復興」の大切さと難しさを実感することができた。

松の苗を育成する「守る会」の活動

４．地域を知ることが防災教育

防災教育に関連して陸前高田市の 2 人の教育関係者からお話を聞く機会があった。1 人目は，陸前高田市の教育長である。教育長は「防災教育においては地域の文化財を知ることが大切である。子どもたちが自分の地域の文化財を知ることで興味を持ち，現地に足を踏み入れる。その結果，地域の良さだけでなく地域の地形や地図を知り，いざというときに自分の命を守る術になる」と話されていた。2 人目の陸前高田市立小友小学校の副校長は「地域に合わせた防災教育を考える必要性」についてお話をしてくださった。

大震災で子どもたちの命を守るためには，大人も子どもも地域の地形を理解しておくことが重要である。そのためにも，寺社や文化財等の地域教材を生かした社会科教育と防災教育を関連付けさせることが重要であると思った。陸前高田市には「高田松原」という財産がある。「高田松原」はこの地域の歩みそのものであり,「高田松原」を知ることで地域の歴史だけでなくこの地域の魅力や価値を学ぶことができる。地域を知り，地域に学び，地域を愛する心を養うことが，東日本大震災のような事態が起きたときの自分たちの命と地域を守る術となることを学んだ。

５．おわりに

この研修は、全ての体験が初めてのことばかりであった。特に，防災教育は他教科と連携しながら,地域の特質に合わせた指導を行うことが大切であると思った。その中でも体験活動を通じた実感を伴った知識理解がより質の高い防災教育へとつながるのではないかと感じた。たとえば, 研修を終えてから、テレビや新聞で被災地や原発の問題が取り上げられるとついつい着目することが多くなった。被災地のリポーターの活動が映像で流れるとそのバックの被災地に目が行くようになった。これは，実際に現地に訪れ, 被災地の実態を目で見て, 足で歩いて, 話を聞くという実感を伴った学びがあったからである。

これまで，私は原発の問題や被災地に関心のある方だと思っていたが，この研修を通して自分自身の持つ情報の少なさに気付かされた。もう一度，被災地に訪れる機会を持つことができるのであれば，今なお現地で活躍する同世代やティーエイジャーの方々からの視点で震災や震災後の被災地を学びたいと思った。この学びを教員になってから, 防災教育や社会科教育へと生かし, 子どもたちの「生きる力」の育成に携わっていきたい。

陸前高田での研修を終えて

美術教育専修　大学院１回生　千々石　喜一

１．はじめに

平成 25 年 8 月 26 日から 29 日にかけて平成 25 年度陸前高田市文化遺産調査団として、陸前高田市を中心に、宮城県・岩手県周辺での調査に参加させてもらった。今回、数多くの東北地方の仏像を調査することができ、関西ではできない貴重な経験をさせてもらった。その上、新たに仏像の台座裏から伊達綱村と書かれた墨書が発見され、陸前高田市周辺での伊達家の影響を窺うことができた。また「地域と文化財」という観点から考察し、その地域における文化財がもつ重要な役割についても考えることができた。

今回のプロジェクトに参加させてもらい、特に仏像調査で感じたことを中心に、震災と関連させながらまとめていきたい。

２．仏像調査

私も地方仏を中心に大学院では研究を進めているが、東北の仏像は私の想像を上回る特異性があると感じられた。初めに牡鹿半島で調査した持福院観音堂十一面観音立像は、足元の特徴的な衣紋表現や平面的な顔立ちなど、今まで見たことのない表現が多くあり、地方独特の神秘性に驚かされた。

常膳寺での仏像調査

常膳寺では写真撮影が中心であったが、持福院観音堂と同様、すらっとした細長いフォルムなど神木信仰を意識した神秘性に富んだ仏像を調査する事が出来たと思う。やはりその地方独特の表現が生まれてくるのは、中央政権からかけ離れた場所で生まれた独自の信仰形態や、形式にとらわれない独特な表現を行う仏師がいたからであろうと考えられる。また自分たちだけで仏像の寸法を測らしてもらったが、今までは先生の測量作業の助手をしたことしかなく、実際に仏像に触れることも初めてのことであった。もろく弱い部分を見極める必要があり、実際にやってみると、とても神経を使う作業であることを改めて感じさせられた。

向堂観音堂での調査で本尊十一面観音菩薩坐像は、瓔珞や臂釧の表現、また衣の端に細い彫筋を表す点など、常膳寺諸仏と酷似しており、同一の仏師または工房で制作されたものだろうと考えられる。おそらく平安前期に制作された檀像彫刻を模して作られたと考えられ、細かく精緻な表現は当時の一流仏師によって制作されたと思われる。また台座裏からは墨書が見つかり、常膳寺阿弥陀如来坐像の墨書と同様に伊達綱村の名前が見つかった。陸前高田市から住田町にかけて伊達綱村の影響があったと思われ、教材資料を制作するうえで、より深く考察をまとめていきたいと思う。

３．文化財と地域のつながり

27 日には、前回の陸前高田仏像調査の報告会が陸前高田市内のコミュニティーセンターで行われ、想像以上の参加者があり、住民の方々が地域の文化財にとても関心があることに驚かされた。話を伺うと、震災により陸前高田を離れていく住民も多いそうである。そして多くのものを失った今、住民の方々をつなぎとめているものは地域における価値だそうである。その価値を生み出すものの一つに、常膳寺を

はじめとした地域に古くから伝わる文化財があげられると感じた。私の地元にも素晴らしい文化財は数多くあるが、地元住民にもほとんど知られていないのが現状である。やはり地域の絆、団結、一体感を生み出す媒体としても文化財は適したものであると考える。今回の調査報告の例をもとに、どのような工夫を行えばより地域に根差した文化財の興味・関心が高まるか考察を深めていきたいと感じた。

向堂観音堂での調査

４．地域の文化財を活かした独自の教育

上記で述べたように地域の文化財を知ってもらい興味を持ってもらう手段として、学校の授業において教材として用いることが挙げられる。そのためにも学校教育の一環として、地域における文化財を教材化し、教育現場に普及させる必要性があるだろう。今回も調査を通して得られた成果をもとに去年と同様、実際に教材を作っていきたいと思っている。今回は伊達綱村が関連した仏像や歴史について紹介できたらと考えている。地元の小中学生に地域の価値を、学びを通じて伝えることで、誇りに思える大切な地域づくりをサポートできたらと感じている。

５．まとめ

今回の調査で大きく印象に残ったことは、被災地の方々はとても郷土に対する愛着が強く、残された文化財に大きな期待感があるということである。この期待感は復興に対しての望みかもしれない。そして、未来を握る子どもたちに郷土の良さを知ってもらうことも復興への手助けになるのではないかと考える。私が今できることは今回の調査で得たものから、教材資料を作成し、子どもたちに知ってもらうことだと思う。そのためにも、実際に見学してみたくなるような案内や、保護者・先生方にも興味を持ってもらえるような内容を考え生涯学習の場でも役立つ教材を作成したい。

調査に協力してくださった陸前高田市・住田町の方々に感謝し、今回の成果をもとに、期待にこたえられる教材資料を作成することが今後の課題であると考えている。

向堂観音堂

向堂観音堂十一面観音菩薩坐像

平成２５年度奈良教育大学陸前高田市文化遺産調査団に参加して

教職大学院２年生　土海　稚奈

１．はじめに

８月２６日から２９日までの４日間、「文化財調査」「防災教育」「ＥＳＤ学習の教材化」の３点を目的に岩手県と宮城県に文化遺産調査団の一員として赴いた。

今回参加した理由は２つある。まず１つめは、自身の教員志望動機と今回のプロジェクトが繋がっている点である。私の教員志望動機は、「命を大切にする人を一人でも多く育てたい」である。今までは、いじめを筆頭とした人間関係のみに着目してきたが、今回の東日本大震災・津波を受けて、「命を守る」方法を知ること、訓練することの大切さに気付いた。このことから防災教育という視点で、現地に赴き防災教育について学びたいと考えた。

２つめは、自身の出身地が海辺であるにも関わらず、津波の避難訓練を行った経験がないことに焦りを感じていたからである。現在、東日本大震災・津波の被害が極めて甚大であったことを受け、地元鳥取県では昨年７月より「鳥取県津波対策検討員会」を設置している。そこでは日本海側での津波の発生源を再検討し、最も鳥取県に影響があると想定されている津波が発生した場合の被害などを予測し、報告書には津波浸水予測図も掲載されている。しかし、具体的な地域別の避難計画の作成は今後の課題とされ、現在作成段階である。このことから、各学校でも独自の避難計画や防災教育が必要であることに気づいた。今後必要とされる能力として、公開されている情報などを基に具体的な個別避難計画を立てたり、地域を巻き込みながら学校で具体的な防災教育のカリキュラムを作成したりすることが挙げられると考える。そのため、実際に被災された方を訪ね、体験談や取組についてお話を伺う機会があるこのプロジェクトは私にとって大変魅力的であった。

そして４日間のプロジェクトを終え、感じたことや学んだことの中から２つ取り上げる。１つめは「復興について」、２つめは「守り方について」である。

２．復興について

持福院観音堂から見た陸前高田市の風景

被災地に赴き、一番驚いたことは工事車両の多さだ。地震や津波によって倒壊した建物を取り壊していたり、高台移転のために必要な土砂を積んでいたりと様々であった。また、町の至る所に見られる工事現場の看板には「東日本大震災復興工事」の文字が並び、同時に「がんばろう東北」などの言葉も見られた。災害から約２年たった今も工事は続き、海沿いには被災した建物を撤去した後の草原が広がっていた。町が元の状態に戻るためには、まだまだ時間がかかりそうだと、その想像以上に広がった草原を目の当たりにして感じた。しかし、地域の方や先生方から話を伺うと、建物や瓦礫が撤去され１年前とは風景が随分と変わったとのことだった。少しずつ、でも着実に町が形を取り戻しつつあるのだということを知った。

現在、モノの復興は少しずつ進み、今まで生きていくことに必死だった被災された方々も、「これか

らどう生きていこう。」という自分自身の生き方と向き合う余裕ができてきたそうだ。『忙しさの中に安堵を見出していた生活から次の段階に移る時期が訪れ、今まで以上に人と人の繋がりの大切を感じる。』と仮設住宅での聞き取り調査に協力してくださった松坂さんは話してくださった。このことから、復興の視点として「地域との繋がり」が重要になってくると考える。そのためにも、地域で協力して行っている祭りや、地域に残っている文化財に注目し、地域教材として学校教育に取り入れることは意味あることだと再確認した。

聞き取り調査に協力して下った松坂さんと

３．守り方について

復興についてこれから「地域との繋がり」が重要になってくると述べたが、防災についても同じことがいえる。小友小学校の先生にお話を伺った際に、今後のキーワードは「いきる（防災行動）」「そなえる（防災知識）」「かかわる（安心し合える関わり合い）」の３つだと教えていただいた。そして、「これからは身を守るために必要な行動訓練や知識、判断する力が必要とされ、地域力（伝統・文化等）の中で子どもを育てることが大切である」と教えていただいた。そして、児童生徒に被災体験を乗り越えるための「ストレスマネジメント」を指導することも必要不可欠であると学んだ。

そしてお話を聞く中で、地震と津波の２点しか見ていなかった自分に気づくことができた。地震が起こると、海岸沿いでは津波を警戒しなければならないが、地震によって起こった火災や土砂崩れ、ダムの決壊など様々な災害も想定し中ればならない。様々な想定をすることが人を守ることに繋がることを、今回のプロジェクトに参加して学んだ。これからは「リスクマネジメント」についても、実践例や文献を調べ、知識を増やしていきたい。

４．終わりに

今回の調査団に参加して、自分の認識の甘さに気付かされた。実際に現地に赴き、自身が国語科を中心に学んできたことから、文化財調査をする知識もなく、勿論技術もなく、防災教育に関する知識も雀の涙程度しかないという事実と向き合うことになった。専門的知識をはじめ、出身地による土地に対する意識の違いなど、自身と違う視点や考えがあり、学部生や大学院生、そして先生方との意見交流の場はとても刺激的であった。人やモノを守るためには、知識も技術も探究もどれも欠かせないこと、そして何より「守りたい」という強い意志が不可欠であると改めて感じた。このプロジェクトで学んだこと、感じたことを学習指導案などの形として残し、さらにより良いモノを提供できるよう、今後の生活や学習活動に力を入れたい。また、テレビや写真では伝わりきらない想いや、出来事が訪問先にはあったことを心に刻んで、教材研究等に取り組んでいきたい。

一本松へと向かう
高田松原を守る会の及川さん

陸前高田での研修を終えて

社会科教育専修　３回生　二階堂　泰樹

１．はじめに

平成２５年度陸前高田市文化遺産調査団の一環として、8 月 26 日から 29 日にかけて宮城県・岩手県を中心に、仏像調査と防災教育を主軸とした研修に参加した。仏像調査では、普段関わることのない文化遺産調査に参加させてもらうことで、文化財を後世に遺し伝えることの重要性とその難しさを感じ取ることができた。防災教育では、陸前高田市を中心に、被災地の現状と今後の歩みについて学ぶことができた。どちらも地元の方々とのつながりの中で成り立ったものであったが、特に私が主軸としていた防災教育では、地元の人々の生の声を聴かせていただくことで、津波常襲地帯に住まわれている人たちの防災に対する考えや、思いと現実に板挟みになっている心情など、ただ単に命を守るだけの防災だけではなく、人々の生活や暮らしと関わった防災について考えることができた。防災教育とはよく耳にするが、では防災教育とは一体何を指すものであるのか、研修中に出会った方々から私が感じたことをもとにまとめてゆきたい。

２．防災教育

防災教育と聞き、私が初めに思い浮かぶことは学校の避難訓練のような校内から運動場へ、どれだけ早く冷静に向かうことができるのか、というものである。児童らには緊張感はなく、その状況を楽しむ児童もいるくらいであった。私の家の近くの避難場所は中学校だが、私が生まれてからまだ一度も避難場所として使用されたことはなく、地域住民側にも避難場所としての印象は薄い。そもそも、有事の際に、その中学校へ逃げ込むことが正しいのかさえもわからない。そのような状況であっても、防災に関して疑問を抱く人や危機感を持っている人が多いとは言えない。かくゆう私もその一人であった。しかし、陸前高田市では市が指定した避難場所に避難して命を落とした方も多いと、うかがった。避難場所の中には海抜 0m 地点に建てられた施設もあったためである。今ある現状を批判的に検討することの大切さと、自分の身を守ることができるのは自分自身であることを強く感じた。

高田松原を守る会の活動について

陸前高田市内を回っていると、ほとんどのがれきや廃墟などは撤去されており、街は更地と化していた。街中では忙しく走るトラックや重機が目についた。住宅や飲食店、スーパーマーケットにいたるまでプレハブである様子から、がれきを撤去するだけでは消せない震災の雰囲気や傷跡が見えてくる。山岸先生の講演会のあと、少ない時間の中ではあったが、テレビのニュースや新聞では、なかなか伝わってこない具体的な事柄を、被災された方々から聞くことができた。語り部ガイドをしていらっしゃる河野さんは、他県よりも津波対策がしっかりしていたはずであるのに、チリ地震の際に被害がなかったことで大丈夫だと思ってしまった、と津波に対する危機感が薄れてしまっていたことを残念そうに悔しそうに語ってくださった。また別の方は、着の身着のままで避難をし、食べるものも満足になかったが、農家の方がおにぎりや野菜を差し入れしてくれありがたかったというお話をされた。普段の町内会のつながりなど、日頃からのコミュニティがいかに大切であるかがひしひしと伝わるお話を聞きながら、自

分の住む街には一体どれほどのコミュニティが形成されているのだろうかと考えてしまった。震災から今日にいたるまで被災された方々は苦しい中を生き抜いてこられた。そのような中、支え合うことのできる人が多くいることは生活だけでなく、心の支えにもなる。日頃から地域社会全体を通したつながりを持ち、地域のコミュニティを広げてゆくことも、防災教育の役割の一つであると考える。また、地域の地形や住民の実情に合わせた災害への備えを住民の間で共有することが重要であり、そのためには普段から防災訓練や防災教育を実施することで、人と人のつながりをつくったり、避難の仕方を確認し合ったりする必要がある。防災教育を学校内で限定してはならないと感じた。

講演会来場者の方々とのお話のあと、小友小学校の副校長から避難所における教員の役割など、貴重なお話を聞くことができた。なによりも一番大事なことは「どう管理し、動かすか」であり、学校の緊急マニュアルをしっかりと読み、日頃からシミュレーションをしておくことが必要だとおっしゃった。小友小学校の防災教育には三つの重点が据えられている。①安全な避難行動（防災行動）を学ばせること、②必要な防災学習（防災知識）を学ばせること、③安心させる関わり合いを学ばせること、の三点であるが、私は特に防災知識をしっかりと子どもたちに持たせている点が素晴らしいと感じた。なぜならば、行動に意味をもたせることができるからである。防災に関わることはどうしても日常とかけ離れたものが多い。非日常であるからこそ、年に数回ある行事のように形骸化させてしまってはならない。また、地域を知り、地域を愛することが防災につながるということも非常に納得のゆくものであった。今回、私は文化財調査に関しては右も左もわからない素人として参加させてもらったのだが、地域に遺る文化財を通し、地域を再発見してゆくことが、まさしく防災教育へとつながっていることに気付き驚いた。

津波の高さを示すビル

３．まとめ

四日間の研修を通して、私が一番に感じたことは、地域のつながりに勝る防災はないのだということである。いうまでもなく、防波堤や高台移転など対策として重要なものは多くあるが、それらを進めてゆくためにも、地域間のネットワークが必要である。震災で多くの方が亡くなり、たくさんの方が住む場所を失い故郷を離れている。そのような時だからこそ、地域を愛することが重要になってくるのではないだろうか。国が進めることをただ受け入れてゆくだけでは、本当の意味での復興とはいえない。それは、研修中に出会った多くの方々からのお話で十分にわかった。今ある現状に疑問を抱き、行動を起こしている人が被災地にはたくさんいらっしゃる。それは地域をよく知っているからである。その動きが教育の場で活かされ、地域をよく知る子どもたちが将来を担ってゆくことになる。しかし、学校に限定された防災教育だけでは地域コミュニティを育てることはできない。地域社会全体で防災知識を共有する場が必要となるが、その点は学校と自治体とが連携して進めてゆくことで、行動だけでなく知識を伴った防災教育を広げてゆくことができると私は考えている。そして、その過程で生まれた地域のつながりが有事の際に自治体同士の連携や個人間の助け合いなどの形で役立ってくる。

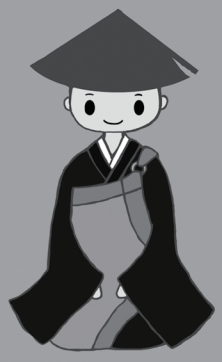
今回の研修では、防災教育や文化財調査などの学びを得ることができた。また、東北の地に足を踏み入れ、東北を中心とした様々な視点を養えたことも大きな収穫であった。震災から約３年、ようやくスタートラインに立つことができたので「地域社会の力」をキーワードにより深く東北を核とした学びをし、人々の暮らしを感じることのできる教材を開発したい。

⑦びっくり！？
向堂観音堂十一面観音菩薩坐像の実物大だ。

実は向堂観音堂の十一面観音菩薩像は小さな仏様なんだ。
小さいけど、細かな所の木彫り技術はとてもすごいんだ！！

みんなの町の大切な文化財だ。
代々伝えてきた方々に感謝だね。
次はみんなが守っていく番だよ！

あれ！？このブレスレットやネックレスの形どっかで見たような・・・！？



仏像のおもしろい所や不思議な所をみんなで見つけよう！！気づかなかったことが見つかるかもしれないよ。
次は君たちが発見する番だ！

気仙仏像調査団！

―地域の仏像を調べてみよう―

向堂観音堂

住田町

岩手県

陸前高田市

常膳寺

① 十一面観音菩薩ってなぁに

一般的な十一面観音菩薩像

髪束の上に阿弥陀様のお顔がのってるよ。

これは髪束

怒ったり、笑ったりいろいろな表情をした顔があるんだ。

多くの十一面観音像はハスをさした花瓶を左手でもって、右手は下に下げてるよ。

② 発見！こんなところに違いがあるんだ！

住田町の向堂観音堂には立派な十一面観音菩薩坐像がまつられているんだ。みんな知ってた？

向堂観音堂の十一面観音菩薩坐像

上から見ると

向堂観音堂の像は一般的な十一面観音菩薩像とどこが違っているのだろう？

答えは次のページ

③ 円仁ってどんな人？

円仁（794年―864年）

唐へ渡ってめずらしい文化を日本にもたらしてくれたんだ。

右図の十一面観音像には、阿弥陀様のほとけさまが乗っているのじゃ。

常膳寺観音菩薩像

平成２６年度 陸前高田市文化遺産調査 概要報告

次世代教員養成センター　中澤静男

１．目的

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災及び大津波により、陸前高田市をはじめとする岩手・宮城・福島三県の太平洋岸は大きな被害を受けた。陸前高田市では市民の約 1 割にあたる人命が失われたほか、市庁舎を始め、博物館や図書館、文化ホール等の市の重要施設が被災し、多くのものを失ってしまった。しかし、幸いにも高台にあった寺の仏像は被災をまぬがれた。この仏像等の文化遺産を調査し、その価値を明確にすることが、陸前高田市や周辺市町村の市民を元気づけることになると考え、本調査団を派遣する。併せて被災地の状況を視察し、被災された方から聞き取りを行い、現地に学ぶ防災教育を開発する。

２．実施月日　　平成 26 年 9 月 9 日（火）～　12 日（金）　3 泊 4 日

３．参加者

教員　　：加藤久雄、山岸公基、中澤静男
大学院生　　：沼田萌生（美術教育専修M1）
教職大学院生　：島俊彦（M2）、竹田隼也（M2）
学部生　　：横井まどか（文化財造形専修 4 回生）

４．主な日程

9 月 9 日（火）

09：30　仙台空港着
10：30　熊野本宮社（名取市）・那智神社見学
13：30　大木囲貝塚・七ヶ浜町歴史資料館見学
14：15　湊浜薬師堂　七ヶ浜町湊浜薬師見学
17：30　陸前高田市：宿泊所着
19：30　気仙沼市立小中学校教員に避難所における教員の役割について聞き取り調査

9 月 10 日（水）

09：00　陸前高田市教育委員会、山田教育長表敬訪問
10：00　正覚寺にて、被災した浄土寺の仏像を調査
13：00　仏像調査班：正覚寺での調査の継続
　　防災教育班：高田東中学校仮設住宅集会所で大津波被害者への聞き取り調査
16：00　高田市長部コミュニティセンターで、避難時の消防団の活動についての聞き取り調査
17：30　及川氏宅を訪問し、漁業の復興、市街地の復興について聞き取り調査
21：30　宿泊所着

9 月 11 日（木）

09:00　黒崎神社（東岸寺）で懸仏の調査
　　防災教育班：市街の被災・復興状況視察、高田松原を守る会の松の育苗施設見学
14：00　常膳寺で文化遺産調査
　　中吉丸乗組員の子孫である上野文雄氏への聞き取り調査
　　坂上田村麻呂に討たれた早虎の隠れ家と伝えられている岩場の調査

17：30　　宿泊所着

9 月 12 日（金）

10：30　　三輪神社大師堂（平泉町長島）見学

11：30　　柳之御所遺跡・柳之御所資料館見学

13：30　　中尊寺見学

15：00　　毛越寺・観自在王院跡見学

17：45　　仙台空港着

５．調査活動について

（１）はじめに

2012 年度から始めた本調査団も第４次となる。第１次・２次は小友町常膳寺の仏像調査を行い、本尊である十一面観音菩薩立像や千手観音立像の調査を行った他、阿弥陀仏坐像の頭部内面に墨書を発見することができたり、薬師如来立像と幕末に発生した中吉丸漂流事件のつながりを見い出したりなど、多大な成果を収めることができた。第３次調査においては、住田町向堂観音堂での十一面観音菩薩坐像の台座裏面から墨書を発見した他、頭頂仏の形態から円仁との関係を見い出すこともできた。これら仏像調査の成果として、子ども用教材を作成し、陸前高田市教育委員会等に寄贈している。また、第１次調査から継続して、陸前高田市の被災・復興状況、特に高田松原の復興について見学・聞き取り調査を行い、防災教育についての報告書や指導案を作成している。

今回の主たる仏像調査の対象は大津波で被災した東岸寺（黒崎神社）の懸仏であった。この懸仏を選択した理由は、これまでに調査を行った常膳寺十一面観音菩薩立像と千手観音菩薩立像に共通するブレスレットの形態とこの懸仏を縁取る彫刻の形態に類似点があり、作者が同一人物あるいは同一工房である可能性が指摘できるからである。

また、防災教育においては、今回初めて仮設住宅にお住いの方々へ聞き取り調査を行い、避難時の様子やその後の避難所生活での小中学生の働き、また仮設住宅での現状といった、なかなか聞くことのできない実際を見聞し、防災教育の研究を行うことが主たる目的であった。

（２）市街地の復興について

今回、陸前高田市に到着してまず目についたのが、巨大なベルトコンベアーであった。奇跡の一本松にほど近い、高田バイパスと国道 340 号線の交差点を中心に、山上から土砂を運ぶコンベアーが林立している。

陸前高田市では、大半の市街地の海抜が低く、大津波の被害が大きかったことから、ハード面の防災対策として２つの工事が進められている。一つは防潮堤の再構築である。もう一つが市街地の造成である。

奇跡の一本松とベルトコンベアー

昭和時代の津波被害の経験から、陸前高田市では高さ 6.2 メートルの防潮堤が造られていたが、今回の大津波で、防潮堤そのものが流されてしまった。そこで、新たに高さ 12.2 メートルの防潮堤を構築している。今回、仙台空港から浜通りを北上してきたが、陸前高田市だけでなく、海岸に面するところでは防潮

堤の工事が行われている。

二つ目がこのベルトコンベアーを用いた市街地の造成である。山田教育長のお話では、市街地を取り囲んでいる標高 120 メートルの山を、40 メートルの高さまで切り崩して住宅地を造成する他、採取した土をかつての市街地に運び、市街地そのものの高さを 14 メートルにする計画であるということだ。ここでかさ上げされた造成地には、住宅ではなく商業施設を建設するという。120 メートルの山の２/３を切り崩すにあたって発生する大量の土砂を、ダンプカーで運ぶと 10 年かかるが、ベルトコンベアーだと 2 年ほどであるため、時間的にも経費的にもメリットがあるらしい。このような市街地の造成を行っているのは陸前高田市だけであり、ひとつの社会実験として世界の建設業界が注目しているそうである。

この復興事業について懸念される点が一つある。それは海への影響である。本調査をコーディネートしてくださっている及川氏は山を削ることで土砂が川に流れ込み、それが海を汚染して漁業にも影響があるとおっしゃっていたが、海への影響はそれだけではない。これまでは山の森林環境で降雨が浄化されるとともに、ミネラルなどの栄養が付加され、それが海に流れ込むことで植物プランクトンが増え、水産資源に良い影響を与えていたと思われる。それが、湾を囲む森林環境が大きく変化することで、海の環境に変化があるのではないかと心配している。

（３）熊野信仰の広がりについて

今回の調査において気づいたことは、東北地方における熊野信仰の広がりである。最初に訪れた名取市の熊野本宮社においては、本宮だけでなく高舘山に那智神社があり、新宮社として熊野神社があった。三日目に訪れた東岸寺では黒崎神社の懸仏を調査したが、懸仏は高舘山の那智神社にもあるらしい。また、午後には、中吉丸で漂流した水主清吉の母親が、清吉が亡くなったものと思って建立した石碑を訪問したが、石碑のある場所は大船渡市末崎の熊野神社であった。奈良に帰ってから、あらためて東北地方の地図を見ると、その他にも多くの熊野神社が存在する。

10 月に熊野三山を巡る研修を計画しているが、熊野信仰について事前に学習していきたいと感じた。

清吉の母が建立した
念仏百万遍の碑

（４）仮設住宅訪問から

米崎中学校仮設住宅集会所での聞き取り

二日目の午後に、米崎中学校仮設住宅集会所を訪問し、米崎中学校仮設住宅自治会長の金野氏をはじめ、多くの方々から大津波からどのように避難したか、避難所での生活、そして仮設住宅お住いになられてからのお話をうかがうことができた。

東日本大震災から 3 年半が経過し、奈良では仮設住宅のことがテレビで放映されることもなくなっているが、仮設住宅にお住いの方々にとっては、被災状況は続いている。津波によって、家や仕事、あるいは大切な人を失った喪失感は、忘れることはないだろう。しかし訪問させていただいた集会所には、

悲痛さや悲惨さを引きずることなく、多くのものを失いつつも、新たな人間関係を築き、力強く生きておられる姿に感動させられた。レベッカ・ソルニットの『災害ユートピア』に「不幸のどん底にありながら、人は困っている人に手を差し伸べる。人々は喜々として自分のやれることに精を出す。見ず知らずの人間に食事や寝場所を与える。知らぬ間に話し合いのフォーラムができる。」と記されているそのことが、この集会所にも出現していると感じた。金野自治会長が「ここにおられる方々は、すばらしい方々ばかりだ」「仮設住宅に来て、知り合いになれてうれしい」「みなさんに助けられてここまでやってこれた」と涙ながらに語られる合間に、「いやいや、会長さんのおかげだよ」「会長さんあっての我々だ」というような発言が飛び出し、互いに互いを尊敬し、大切にしているということをひしひしと感じさせられた。

昨今は無縁社会とも言われ、都会では隣の住人のこともわからないという状況であるが、仮設住宅には、不自由をみんなで一緒に乗り切ろう、楽しんでやろうという気概に満ち溢れていた。仮設住宅を卒業し、復興住宅に移り住んだ人たちも、ここを懐かしく帰って来られるという。人と人のつながりの大切さやどうすれば築くことができるのかなど、教えられることがたくさんあった。

（５）まとめ

３年前に東日本大震災復興支援の一つとしてはじめた文化遺産調査団であるが、生き方や学び方を支援されているのは私たちの方であるということを考えさせられる。文化遺産調査を通じて、地域の文化財と歴史の関わりが見えてくるに従い、教科書に記載されている中央政権側の歴史とはまた違った、地域から中央を見通した歴史の存在に気づかされることが多い。画一化された日本の歴史ではなく、地域の歴史文化を掘り起こし、尊重することは地域史という空間的な多様性の尊重でもあり、時間的な文化の多様性の尊重でもある。また常膳寺の薬師如来立像や今回はじめて訪れた念仏百万遍の碑など、地域の文化財からその時代の人たちの願いや希望を聴くこともできる。地域に生きた先人の声を聴きとり、自分たちが創っていく未来を考えることがＥＳＤの目標であろう。

また、東日本大震災・大津波を経験された方からの聞き取り調査からは、非常事態下で出現した善意や信頼を基盤とした人と人とのつながりは、今後追究すべき本当の幸せについて考える契機となった。誰もが幸せになりたいと思いつつ、市場経済に巻き込まれ、幸せを見失っているのが現在の日本社会ではないだろうか。被災され、無を共有された人たちの中に、私たちの社会が失ってしまった人と人のつながりを見い出すことができたように思う。

陸前高田市では昔から地震の後には津波がくると言われており、日ごろから地域ごとに避難訓練が行われてきた。特に今回の大震災前には、30 年以内に大きな地震が来ると言われていたので、早く的確な避難行動をとることができたという話もうかがった。奈良においても、30 年以内に南海地震、東南海地震が発生すると言われているのだが、各家庭、あるいは個人レベルでの意識や備えはどうであろうか。学校や職場で実施されている避難訓練は、広場などに避難することで終了であるが、本当はその後に学校などの施設において避難所生活が始まる。これからの防災教育においては、どこでどのような災害が発生しても確実に避難ができるような、避難行動の中核を押さえることと、一次避難後の避難所生活での自主的行動の体験までをプログラム化した教育実践が必要であると感じている。

第三回陸前高田市文化遺産調査に参加して

文化財造形専修　４回生　横井　まどか

１．はじめに

平成 26 年 9 月 9 日から 12 日にかけて文化財調査及び防災教育に関わる活動を学ぶため、岩手県陸前高田市を訪問した。私は仏像調査班に属し、二日目の正覚寺および浄土寺の諸尊と三日目の黒崎神社の懸仏の調査に参加させていただいた。私は昨年に引き続きこの活動に参加するのは 2 度目であった。今回の調査に参加した理由は、昨年同様に地域の文化財を調べることで少しでも被災地の方の励みになったらと思ったことと、一年経って昨年よりどれほど復興が進んでいるのか気になったことと、昨年度調査した向堂観音堂十一面観音菩薩坐像と類似性を持つ黒崎神社の懸仏を実際に見てみたいと思ったためである。

今回の調査で私が学んだことが三つある。一つ目は震災と文化財について、二つ目は地域と文化財調査について、三つ目は被災地の復興の進み具合についてである。

２．震災と文化財について

三年前の東日本大震災において東北地方の太平洋沿岸地域が甚大な被害を受けたことはまだ記憶に新しい。多くの人々が被災し、現在でも仮設住宅などで避難所生活を余儀なくされている。それと同時に、被災地の文化財も被災していたことは情報としては多く聞き及んでいたが、今回の調査でその実際を目の当たりにした。一日目に見学した宮城県七ヶ浜町の湊浜薬師堂は海岸から約 500m あり、海水を被った。石造如来形坐像は大きく損傷しており、表面には白く海塩が吹き出し始めていた。先に訪れた七ヶ浜町歴史資料館にはこの石造如来形坐像のレプリカがあり、両者の違いによっての損傷具合がはっきりと分かった。震災後に応急処置として覆屋を立てたそうであるが、いつかこの石仏は消滅してしまうのではないかと強く危機感を抱いた。また、この石仏以外にも震災によって甚大な被害を受けつつも、未だに保護の手が差し伸べられていない文化財がたくさんあるのではないかとも感じた。人命や被災地の復興を優先しつつ、被災した文化財をどのように救出していくのかについて深く考えさせられた見学であった。

宮城県七ヶ浜町湊浜薬師堂と覆屋

３．地域と文化財調査

前回の向堂観音堂の十一面観音菩薩坐像を含め、私にとっては三度目の文化財調査であった。調査の順序や方法を頭の中で繰り返していたが、実際に調査を始めると、前回と同様に目の前のことで精一杯になってしまっていた。前回以上に時間に追われる場面が多い中、タイムキープをし、仏像や仏像以外の室内物に配慮しつつ、今自分がやるべきことを確認しながらの作業はとても神経を使うものであった。しかし前回と異なるのは仏像をしっかり観察することができた点である。山岸先生がどの部分に着目して像を見ているのかを確認しながら私自身も像を観察することが出来た。三日目の黒崎神社の懸仏の調査では、常膳寺十一面観音菩薩立像との技法や表現方法の類似点を確認することができ、前回の調査で

は気が付かなかったことも知ることが出来た。今回の調査での発見や気付きを子ども向け教材の作成に生かして行きたいと思う。

文化財調査の際、昨年同様に地域の方々が興味を持って下さった。前回の調査も今回の調査も、地域の人々の協力がなければ成し得なかったことである。二日目に調査させていただいた浄土寺の諸尊は、被災したため高台にある正覚寺に避難していた。そのような大変な状況にも関わらず調査をさせていただけたのは、お寺のご住職や地域の方々の理解が得られたからである。今回調査をさせていただけたのは、これは大切なものだという意識がそれぞれの文化財を守ってきた地域の方々の中にあるからだと感じた。これらの文化財は国宝や重要文化財に指定されているわけではなく、調査・保存することは義務ではない。だからこそ自分たちの手でこれからも守り伝えようという意志を感じた。脈々と地域に受け継がれてきた宝物を次の世代に受け継いでいこうとする人々の姿がここにあるのだということを強く実感することができ、同時に私自身も何かお手伝いできることはないだろうかと思えた。

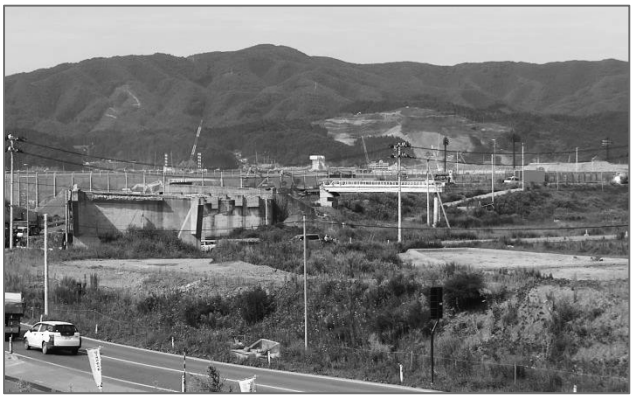
４．被災地の復興の進み具合について

昨年訪れた際は、旧市街地にはまだ瓦礫の山があり、津波によって被災した建物の痕跡が複数見受けられた。高台移転に利用される山も、昨年にはまだかろうじて山としての原型を留めていたように思う。陸前高田市に入って真っ先に目に付いたのは、巨大なベルトコンベアーであった。昨年は山を削って出た土砂をダンプカーで運んでいたが、ベルトコンベアーに切り替えることによって効率化を図ったらしい。また、昨年は被災しながらも残っていた建物も今年は多くが撤去され、旧市街地にあるのは見渡す限りの草原と切り崩された山の土砂でかさ上げされた土の山、それといくつかの商業施設であった。復興が進んでいるかと言われると、正直私にはよくわからない。自然環境に影響がないのか不安に思うところもある。陸前高田市が復興を遂げるのはもう少し先のように感じた。

５．終わりに

今回の調査も多くの方々のご協力のもとに行わせていただいた。前回もそうであったが、四日間を通して感じたのは地域の人々の自分たちの住む地域を守ろうという意志であった。そして震災復興も文化財の保護も、鍵を握るのは地域の方々のつながりではないかと思う。また、文化財調査も防災教育も、地域の方々の協力なしでは成し得ないということを改めて実感することができた４日間であった。まだまだ私にできることは少ないが、今私自身にできることでこれからも復興に貢献していきたいと思う。

今回の調査でお世話になった全ての方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。



左：H25.8.29 撮影（宿泊施設の駐車場より）

右：H26.9.12 撮影（左に同じ）

陸前高田市研修報告

美術教育専修　　大学院１回生　　沼田　萌生

１．はじめに

陸前高田市滞在中は文化財調査班とＥＳＤ防災教育班の２班に分かれ、そのうち文化財調査班に加わり活動した。

陸前高田市を訪問するのは今回が初めてであった。津波の被害を受けた地域にも店舗が建ち、徐々に生活を取り戻しているようだった。震災を受けて土地をかさ上げする作業が行われていた。しかし、多くの方々が現在も仮設住宅で暮らしており、元の暮らしに完全に戻るにはまだ時間がかかりそうだった。

２．文化財調査

陸前高田市では正覚寺と東岸寺で文化財調査を行った。今回対象とした文化財は江戸時代のものが多かったが、中には室町時代の文化財も含まれている。

文化財調査は初めての経験であり、本物に間近で接する緊張感と嬉しさを感じた。狭い空間で観察したり、広い部屋の中でも文化財を傷つけないよう周囲に気を配ったりしなければならず、調査の補助をする中で手順や注意すべき点を学んだ。

陸前高田市の文化財の多くが失われたが、常膳寺に安置されている観音菩薩立像の願主の子孫にあたる方が今も市内に住んでおられたことに現在と過去のつながりを感じ、市内の寺院に残された仏像のほとんどが江戸時代の作である中で黒崎神社（現東岸寺）に室町時代の懸仏が現在まで伝えられているということが感慨深かった。

今回見学した文化財の中には近年になって補修された跡もあり、今まで長い間継続的に守られてきたことが。建物ごと被災した文化財が多く、今後の文化財の保存や災害対策についても考えさせられた。

また陸前高田訪問の前後で名取、七ヶ浜、平泉の文化財を見学し、中世の宮城、岩手一帯の文化や信仰について学ぶことができた。

常膳寺千手観音
（背後に十一面観音菩薩が安置される）

黒崎神社十一面観音菩薩坐像懸仏

３．防災教育

・長部地区の例

長部地区は７地区２５０世帯からなる。平成１６年に自主防災会を結成し、地区ごとに支部を設けている。支部はさらに情報連絡班、救急救護班、避難班、炊出班の４班に分かれている。支部

の一つである福伏地区ではこの制度が東日本大震災の際に上手く機能し、他地区に比べ犠牲者数が少なく済んだ。

高齢者を誘導する担当を地区内で決め、震災以前から訓練に住民が全員参加するなどがその要因であった。インタビューさせて頂いた長部地区コミュニティーセンターの館長のお話では、犠牲となったのは自宅に戻ったり海へ行ったりした人で、訓練の慢性化や自分は大丈夫という過信が被害に遭う原因となり、被害を免れるためには地域性に基づく命令系統と速やかに避難指示に従うことが必要とのことである。

・気仙小学校の例

気仙小学校は避難所に指定されていたが、津波で校舎の３～４階まで浸水した。当時校舎にいた児童は高台へと避難していたため助かった。

小学校の機転により津波の被害から逃れたが、このことで市の避難所の指定に見直しが必要であることが分かった。避難所の指定は過去のデータに基づくものであり、今回のような大規模な津波は想定されていなかった。また、現在の学校教育における防災教育は、避難後の行動に関する指導が少ない。

学校が再開することで子供だけでなく、地域全体の生活や精神面の安定を取り戻すことができる。

防災は日頃の訓練が重要であると伺ったが、人の出入りの多い都市部で避難訓練ができるのかなど、地域によって防災の課題は異なる。

学校においては教員がまず学校の所在地の地形や防災マニュアルを把握し、子どもたちに学校の管理下以外で災害が発生した場合にどう行動すべきか理解させておく必要がある。自らが危機意識を持ち災害に備えることや、災害発生後の自分の役割を明確にしておくことが重要なのである。

４．終わりに

陸前高田市のように何世代にもわたって同じ場所に長く住み続けている方々は土地への愛着が強く、自分の家系や地域の歴史に関心が高い方が多いと感じた。土地のかさ上げ工事は以前と同じ場所で暮らしたいという住民の気持ちの表れだと思うが、一方で土地のかさ上げで津波を完全に防ぎきれるのかなどの不安を感じる。

気仙沼市の小学校の先生が「津波の記憶は消えないし、それを抱えてこれからを生きていかなければならない」「気仙に住む以上は海と共に生きていかなければならない」と仰っていた。海は恩恵と災害の両方をもたらすものである。いくら高い防潮堤を築きたり土地をかさ上げしたりしても、絶対に安全とは言えないのではないだろうか。地域で生きるため、地域の自然とうまく付き合っていくためにも自分の身を守る術を身に着ける必要がある。

今回の研修旅行で学んだことをもとに、自分が住む地域に誇りを持つことと、地域で生きるための防災教育の２点を自分なりに教材化できるよう考えていければと思う。

土地のかさ上げ作業の様子

陸前高田市訪問を通して学んだ人のつながり

教職大学院　　2 回生　　竹田　隼也

はじめに

9 月 9 日から 4 日間、陸前高田市を訪問した。この訪問では陸前高田市の文化遺産調査や被災地見学だけでなく、仮設住宅で暮らしていらっしゃる方々や気仙沼市の小学校、中学校の先生方、お世話になった及川さん、松坂さんに東日本大震災が起こってからの被災地の様子や被災者の暮らしについて聞かせていただいた。3 年前にも陸前高田市には訪問させていただいたが、土地をかさ上げするためにベルトコンベアで大量の土を運んでいたり、多くの作業用車両が走っていたり、様子が大きく変化していた。しかし、被災した市街地であった場所には今も建物はなく、住民の方の多くは仮設住宅で生活されているということであった。

奇跡の一本松

この訪問を通して、被災された方々の生活について学んだり考えたりすることができた。中でも大きな学びが二つある。第一に人と人とのつながりの大切さ、第二に防災教育を学校で行うことの大切さである。

人と人とのつながり

第一の人と人とのつながりの大切さについては、仮設住宅訪問時のインタビューで学んだ。大きな震災を経験され、家や家財道具を失われた方、家族を失われた方、目の前で人が流れていく様子を見ていることしかできなかったと嘆く方、それぞれ心に大きな傷を負われている方々が仮設住宅にいらっしゃった。それぞれの経験を聞かせていただくと私にはとても耐えることができない状況で生活されていると感じた。その中で生きる目標を持つために自治会の金野会長をはじめ、仮設住宅にいらっしゃる方々で様々な取り組みをされていた。文化祭や運動会を開催されたり、合唱を練習されたり、集会所で茶話会を開いたりしているということである。この話を聞かせていただく中で、仮設住宅に入ってから人とのつながりが広がったという言葉が印象的であった。震災以前は関わりのなかった人と仮設住宅に入ったことでつながりができ、一緒に様々な取り組みをされているということであった。そのようなつながりがあるために、入居者の方々は生きる目的を持っており、笑顔やあいさつが絶えないということであった。このように、自治会が中心となって全員で様々な取り組みを行うことで、人と人とのつながりが生まれ、助け合いが生まれる。訪問させていただいた仮設住宅の方々は互いを思いやる心を大切にされていると感じた。今の自分を振り返ると、そのようなことができているだろうかと考えさせられる機会となった。人と人とのつながりをどのようにつくっていくのか、つくったつながりをどのように広げていくのか、自分自身が考えていかなければならないと考えた。

防災教育

第二の防災教育を学校で行うことの大切さは、様々な人から話を聞く中で学んだ。陸前高田市や気仙沼市は海に面した市である。そのため、防潮堤を築いたり、土地をかさ上げしたりしても、大きな津波

には万全とは言えない。また、防潮堤を築くことで海流が変わったり、土地のかさ上げのために山を削ることで土砂の流入が起こったりするなど、海の生態系が崩れてしまい、漁業関係の仕事をされている方の生活に影響を与えることも問題である。そのため、海が多い地域で大切なのは「海と共に暮らすためにどうするか」を考えることだと教えていただいた。津波についても、防ぐことだけを考えるのではなく、津波からどう逃げるかを考えるということであった。津波から逃げる訓練として、多くの学校で避難訓練が行われている。しかし、避難後の行動についてまで取り組まれている学校はあまりない。先生方の話の中で、「被災した時のことを乗り越えたわけではなく、その時のこともかかえて生きていく」とおっしゃっていた。全てを失い、精神的にも辛い中でどのように生き抜いていくのかを考えることが防災教育に必要なのではないかと考えた。学校で防災教育を行うことは自分の命を守るだけでなく、人と人とをつないでいく役割もあるのではないか。避難の際の助け合いや避難所、仮設住宅での暮らしを疑似体験ことは世代内のつながりを考えることになるだろう。また、避難されて助かった方々の中には「地震があったら津波と思え」という昔からの教えから避難したとおっしゃる方もいた。このような先人からの教えを未来につなげていくという意味では世代間の交流になるだろう。これからこの訪問で学んだことをもとに防災教育についての ESD 教材開発を行う。自分の命を守ることはもちろん、人と人とのつながりについて考えることができる教材開発を行っていきたい。

陸前高田市の街並み

おわりに

この訪問は、本当の意味での「復興」とは何かを考える機会となった。奈良県にいると震災のことをニュースなどで見る機会は減り、震災は終わったかのように感じていた。しかし、現実は大きく異なっていた。3 年経った今も多くの方々が仮設住宅で生活されている反面、金銭面の問題や、今のコミュニティーから離れることに対する抵抗から復興支援住宅への入居率は低いという現状もある。土地のかさ上げのための工事が進んでいるが、そこに多くの費用が投じられているという印象を受けた。ハード面とソフト面、どちらも復興するのにはまだまだ時間がかかりそうである。そのような中で、今の私たちに何ができるだろうか。その一つが今回の訪問から学んだことをもとに文化財についての教材作成や、防災教育の教材開発だと思う。文化財調査については地域にある文化財の価値がわかっていくことで、住民の方々に喜んでいただけるという言葉が印象的であった。防災教育においては子どもたちがこれからの生活を考える契機にしていきたい。直接的ではないが、このような形で復興支援をすることが今の私たちにできることだ。今回の訪問でお世話になった方々に感謝するとともに、これからの教材開発に力を入れていきたい。

陸前高田市に広がるベルトコンベア

平成 26 年度 陸前高田市文化遺産調査団

教職大学院 2 回生 島　俊彦

はじめに

9 月 9 日~12 日の 4 日間、陸前高田市での文化遺産調査に参加した。

文化遺産調査団の活動内容は、(1)陸前高田市の文化財調査(2)防災教育:高田松原を守る会・被災地見学(3)文化遺産を通した ESD 教材の作成である。私は東日本大震災発生以降、被災地に足を運んだことがなかった。将来教師として子どもたちにこの震災を伝えていくためにも、被災地を実際に自分の目で見なければならない、被災者の生の声を聴かなければならないと考えていた。そのこともあり、(2)防災教育:高田松原を守る会・被災地見学の活動を中心とした ESD 防災教育班として活動した。

現地では気仙沼市の小学校と中学校に勤務する 2 人の先生、高田東中学校で仮設住宅暮らしをされている方々、長部地区コミュニティーセンターの館長にインタビューをしたり、壊滅的な被害を受けた沿岸部周辺の見学をしたりした。それらを通して、私は大きく 3 つのことを学んだ。1 つ目が「復興」、2 つ目が「絆」、3 つ目が「防災教育」である。

復興

調査期間中、私たちが滞在した民宿は奇跡の一本松などがある、陸前高田市沿岸部であった。震災発生以前は、お店や市役所などの建物が集まる、市の中心地であったそうだが、現在は瓦礫が撤去され野原が広がっている。

陸前高田市の街並み

野原の中に一際目を引く大きな橋の様なものがあった。滞在中私たちのお世話をしてくれた及川さん、松坂さんにお話を伺うと、それは橋ではなく土を運ぶためのベルトコンベアだと分かった。近くの山を削り取り、土砂をベルトコンベアで海抜 0m 地点の沿岸部に運び、土地のかさ上げをするのだという。

大手ゼネコンを中心に復興作業が進み、地元住民の利益や雇用が少なかったり、壊滅的被害を受けた土地を復興させて元の活気を取り戻せるのかといった懸念があったりするようであるが、物的意味での復興は日々進んでいるということであった。

絆

二日目の午後、高田東中学校の仮設住宅に住む 9 名の方々とのインタビューの場を設定していただいた。そこでは現在約 75 世帯の方々が、自治会長を中心に皆で支え合って生活している。

インタビュー中、ある方が「ここでの生活は、笑いが絶えません。」と言ったのが印象強かった。報道などでは仮設住宅のネガティブな部分が伝えられていることが多く、私も「仮設住宅＝大変」と思っていたので驚いた。なぜ皆さんが生き生きと暮らしているのかと疑問に感じたが、話を聴いていくうちに疑問が解けた。それは、皆さんが目標を持って生きているからである。

高田東中学校の仮設住宅には、様々なコミュニティーがある。75 歳以上のお年寄りを対象としたデイ

サロンや中高年が集まる人生ベテランズクラブ、合唱隊や麻雀大学などを組織している。更には住民全員参加の運動会や文化祭も開催していて、出席者が「全てに参加しようと思ったら毎日が忙しい。」と言っていたほどである。これらに参加して、皆と一緒に何かを達成するという目標を持って生きることが、住民の笑顔や元気の源になっていることを理解した。

高田東中学校仮設住宅でのインタビュー

また、住民の皆さんは仮設住宅での共同生活や様々な行事、取り組みを通じて深い人間関係を築いている。「被災前よりも友達が増えた。」と皆さんが口を揃えて言っていた。誰とでも「おはよう」と挨拶を交わし会話を楽しむ関係が出来上がっている。話の最後に自治会長が「住民は皆不安を抱えているからこそ、協力して生きているのだよ。」と教えてくれた。震災以降、「絆」という言葉が様々な場所で復興の合い言葉として使われているが、本当の意味での「絆」を目の当たりにすることができた。その姿から、人々のつながりが失われつつある現在の社会について考え直す機会となった。

防災教育

被災地見学や被災者へのインタビューを経て、防災教育を推進していかなければいけないという必要性を感じるようになった。

高田東中学校の仮設住宅のインタビューの時には、「私たちは来年から学校現場に出るので、しっかりとした防災教育を進めていきたい。そのために皆さんの話をお聞かせください。」とお伝えすると、思い出すのも嫌なくらい辛い経験だったにもかかわらず、快く話をしてくださった。また、皆さんが口を揃えて「がんばってな。」と、声をかけてくださった。私たちの将来や教育に対する期待を強く実感できた。そんな皆さんの期待にこたえるためにも、得た学びを生かし、子どもたちに自らの命と人の命を守り抜くことできる力を身に付けさせることが出来るような教材を開発していきたい。

陸前高田市文化遺産調査団

おわりに

今回の研修は私にとって大変学びの多いものとなった。震災後初めて現地を訪れたが、実際に足を運び、自分の目で見て、耳で聴かなければ分からないものがあると痛感し、真の復興とは一体何なのかについて考えるきっかけになった。また、4 日間を通して文化遺産調査に関わることができたのも貴重な経験である。調査によって分かったことを伝えていくことで、地元住民が「この土地にはこんなに凄いものがあるんだ。すごい人が居たんだ。」と実感できる。それによって地域に対する誇りを持ってもらえる。このことも一つの大きな復興支援であると感じることができた。

この四日間で得た学びを自分の中に留めるだけではなく、より多くの子どもや大人に伝えていくためにも、今後の教材開発に力を注ぎたい。

Ｙ君の仏像あれこれ

これは獅噛紋（しかみもん）。
獅子（ライオン）が噛みついている
ようにみえるからこう呼ばれるよ。

ボクの作る仏像の特徴は２つ。
どこが特徴かわかるかな？
１つ目は観音菩薩の頭頂仏（頭の一番上にいる仏様）に上半身があること。

常膳寺十一面観音菩薩
立像の頭頂部の拡大←

向堂観音堂十一面観音
菩薩坐像の頭頂仏拡大←

上から見るとこんな感じ！

二つ目は胸飾（むなかざ）りや宝冠（ほうかん）、
懸仏の周辺に見える連珠文（れんじゅもん）と
列弁文（れつべんもん）だよ！

↑向堂観音堂十一面観音菩薩
坐像の宝冠部分拡大

連珠文

↑東岸寺十一面観音菩薩
坐像懸仏の周辺部分拡大

列弁文

連珠文

常膳寺十一面観音
菩薩立像の胸飾り←

懸仏の裏面には文字が
書かれていたよ!

明應五年（１４９６年）
二月十八日の銘文

ボクはＹ。室町時代にこの地域で活躍した
仏師（仏像を作る職人）なんだ。
実はボクが一体どこの誰なのかはわかって
ないんだ。君たちの誰かがボクの正体を解
明してくれるのを期待してるよ。

大きさ比べしてみよう！

常膳寺十一面観音菩薩立像
（じょうぜんじじゅういちめんかんのんぼさつりゅうぞう）
高さ　325.0 ㎝

常膳寺千手観音菩薩立像
（じょうぜんじせんじゅかんのんぼさつりゅうぞう）
高さ　163.0 ㎝

東岸寺十一面観音菩薩坐像懸仏
（とうがんじじゅういちめんかんのんぼさつざぞうかけぼとけ）
鏡板（円盤の径）　49.5 ㎝

向堂観音堂十一面観音菩薩坐像
（むかいどうかんのんどうじゅういちめんかんのんぼさつざぞう）
高さ　29.8 ㎝

発見！私たちの文化財！

学校名

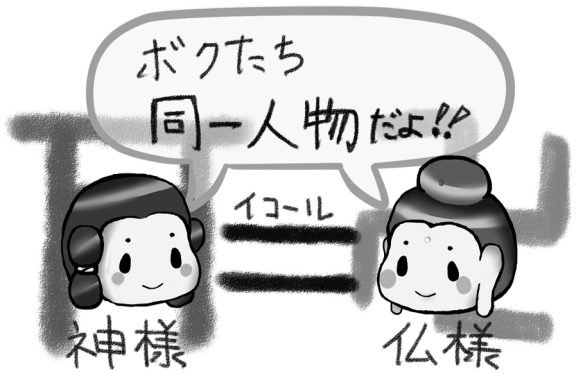
年　　組　名前

①神仏習合

多くの神社には「御神鏡（ごしんきょう）」という鏡が祀（まつ）られている。
神様が鏡に宿ると信じられてきたためなんだ。

御神鏡のイメージ

平安時代になると、日本の神様は仏様が姿を変えたものと考えられるようになったんだ。
これを神仏習合（しんぶつしゅうごう）と言うよ。



②御正体と鏡像

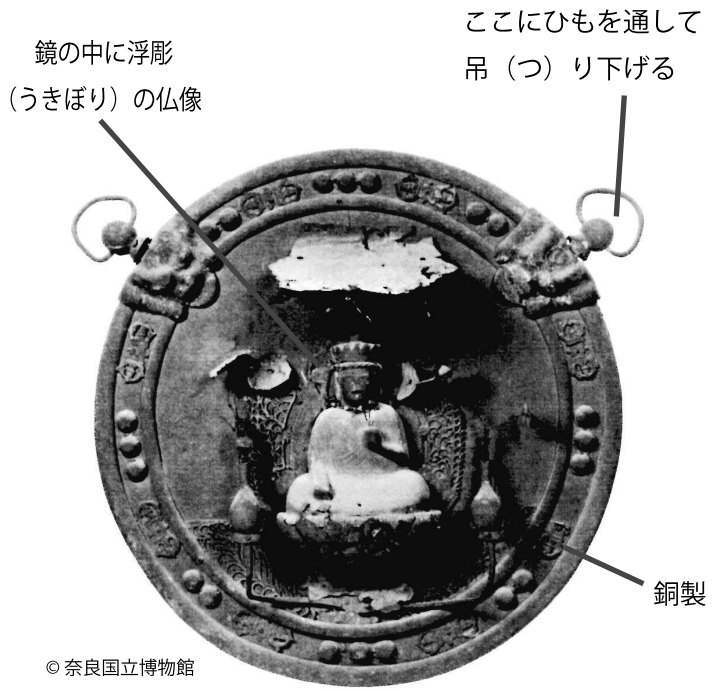
神仏習合で神様と仏様が一緒と考えられるようになると、神様が宿る鏡に仏様の姿を表すようになったんだ。この、鏡に仏様を表したもののことを「御正体（みしょうたい）」と言うよ。

御正体には２つの種類があるんだ。
１つ目は「鏡像（きょうぞう）」と言って、鏡に仏様の姿を刻（きざ）んで御神鏡と同じ様に祀るものだよ。

鏡像のイメージ

③よくある懸仏

２つ目は「懸仏（かけぼとけ）」。これは鏡像と違って、鏡に仏様を刻むんじゃなくて浮彫（うきぼり）で表されることが多いんだ。銅や鉄でつくられたものが多いよ。



© 奈良国立博物館

④これが黒崎神社の懸仏だ！

実はみんなの身近な所にも懸仏が。
広田半島にある黒崎神社（くろさきじんじゃ）にはこんな立派な懸仏があったんだ。みんな知ってた？

⑤修験の寺・東岸寺

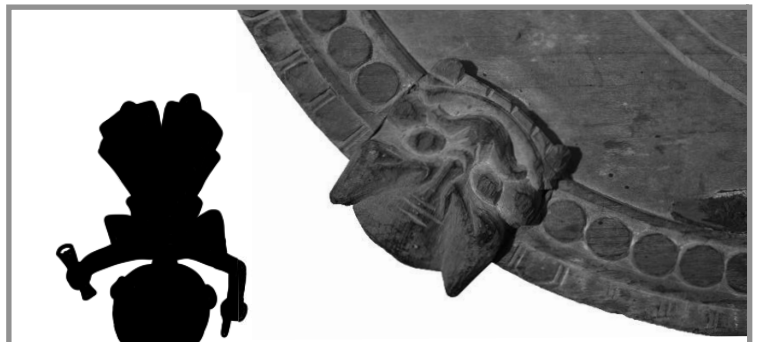
黒崎神社の懸仏は、同じ広田半島にある東岸寺（とうがんじ）というお寺に保管（ほかん）されていたんだ。東岸寺はちょっと変わったお寺。お堂の正面に御神鏡があって、その横に仏様が祀られているんだ。
それと、みんなは神社に行くと柏手（かしわで）を打って、お寺に行くと合掌（がっしょう）するけど、東岸寺はお寺だけど参拝の時も合掌ではなく柏手を打つんだ。

黒崎神社と
東岸寺は何か関係が
あったのかな？

⑥修験道とは

修験道（しゅげんどう）とは、山には神様がいるという日本古来の信仰と仏教が結びついてできた「仏教と神道の間に生まれたこども」のようなもの。修験道では人里離れた山の中で修行をするんだ。この修行をする人たちのことを山伏（やまぶし）って言うよ。
東岸寺はこの山伏たちが修行をするためのお寺だったんだ。だから寺と名前がつくけどお寺としては登録されてないし、今でも神社みたいに鏡や しめ縄を飾るし、柏手を打つんだね。

神仏習合の象徴だった
修験道だけど、明治になって修験
道廃止令（しゅげんどうはいしれい）
という法律ができたんだ。これに
よって修験道は一時期禁止されて
しまったんだ。



上から見ると…
手と頭に穴が開いている

何かささって
いたのかも？

答えは裏を見てみよう！

このさき物はなんだろう？

陸前高田市文化遺産調査におけるESD教材開発（1）
― 中吉丸がつなぐ小友町と小笠原諸島 ―

中澤　静男
(奈良教育大学持続発展・文化遺産教育研究センター)
新宮　済
(奈良教育大学教育学研究科専門職学位課程大学院生)

The First Teaching Material Creation for Education for Sustainable Development at Researching Cultural Heritage in Rikuzentakata City
－ The Nakayoshimaru Boat joins Otomo Town to Ogasawaha Islands －

Shizuo NAKAZAWA
(Center for Study of Education and research of Sustainable Development and Cultural Properties, Nara University of Education)
Wataru Aramiya
(Graduate School of Education, School of Professional Development in Education, Nara University of Education)

要旨：陸前高田市小友町の常膳寺で文化遺産調査を行ったところ、観音堂に安置されている薬師如来立像の胎内に墨書があることがわかり、さらに製作年と大願主及川庄兵衛という名前から、中吉丸の漂流事件と関係があるのではないかと予想された。天保十年 11 月 15 日に 6 名の乗組員を乗せて小友浦を出帆した中吉丸は、35 日間の漂流の末、30 名ほどの島民が住む島に漂着した。言葉は通じなかったが、親切な島民たちに助けられ二か月ほど暮らした後に、全員無事に帰国する。この中吉丸が漂着した島が小笠原諸島父島であった。本稿では、薬師如来立像と中吉丸、小笠原村を結ぶ地域の歴史を通して、地域を大切にする心を養い、持続可能な発展に関する価値観のひとつである人と人のつながりについて学ぶことを目的に、総合的な学習の時間におけるＥＳＤ教材の開発に取り組んだ。

キーワード：持続発展教育　ＥＳＤ　　東日本大震災津波 Great East Japan Earthquake tsunami
教材開発 Teaching material creation　　中吉丸 Nakayoshimaru Boat

１．はじめに

奈良教育大学では、陸前高田市在住の元新聞記者、及川征喜氏、元小学校長の佐藤文隆氏、陸前高田市教育委員会教育委員の松坂泰盛氏からの依頼を受け、「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクトの一環として調査チームを編成し、陸前高田市の文化遺産調査を行った。調査チームは、本学教員２名、大学院教育学研究科修士課程２名、専門職学位課程２名、学部生２名の８名である。そして、6 月 22 日から 25 日、9 月 6 日から 9 日の 2 回にわたり、陸前高田市を訪問し、同市小友町常膳寺に安置されている仏像の調査を行った。

調査の一つに仏像の胎内にファイバースコープを入れ、胎内にあるかもしれない文書や墨書を探すというものがあった。常膳寺の仏像には胎内文書があるという言い伝えがあり、それを発見することができれば、東日本大震災津波で多くのものを失った陸前高田市民を元気づけることができるという、先述した陸前高田市在住の方々の依頼によるものである。

本稿では、常膳寺観音堂の薬師如来像の調査から発見された墨書を手がかりに、現地の方々へのインタビュー調査や文献調査に基づいて明らかになってきた陸前高田市と小笠原諸島との結びつきを小学校総合的な学習の時間の教材として開発した。そのことを通して小友小学校など、陸前高田市の小学生が地域の文化遺産を学び、地域の歴史に目を向けることで、地域を大切にする心を養い、持続可能で住み続けたい地域社会づくりの担い手を養うことに寄与したいと考えている。

２．鶏頭山常膳寺について

常膳寺は気仙三十三観音霊場の二十七番札所になっ

ており、中心的な建物である観音堂には、気仙三観音のひとつである像高324.5センチメートルにも及ぶ木造の十一面観音菩薩立像が安置されている。寺伝によると、常膳寺は寛文十一年（1671年）に祐圓によって開かれたと伝えられ、元は天台宗寺院であったのが真言宗となり、現在は気仙町金剛寺の末寺となっており、小林信雄氏が住職を務められている。主な建造物としては、本堂、観音堂、阿弥陀堂、牛頭明王堂がある。本尊である不動明王立像の他に、上述した十一面観世音菩薩立像、千手観世音菩薩立像、毘沙門天立像、阿弥陀如来坐像、薬師如来立像が安置されている。このうち、十一面観世音菩薩立像には縁起があり、大同2年（807年）に坂上田村麻呂が建立したが、寿永元年（1182年）に野火で焼失したため、これを建立したと伝えられている。この仏像は三十三年毎に本開帳、十七年目に中開帳が行われる秘仏である。

その他の文化財としては、観音堂の前に樹齢1000年以上と推定されている姥杉があり、1969年に岩手県指定天然記念物に登録されている。また、江戸時代に作製された二面の算学が伝えられ、その保管を陸前高田市立博物館に依頼していたが、今回の津波によって博物館が被災したため、現在は行方不明となっている。

3．薬師如来立像の墨書について

6月に実施したファイバースコープによる調査によって、観音堂に安置されている薬師如来立像に墨書があることが見つかった。像の前面に直径2センチメートルほどの穴が開いており、そこからファイバースコープを差し込んだところ、背板内面と体部前面に墨書が見つかった[1]。

そこには、薬師如来立像の製作年と大願主、及び仏師が次のように記されていた。

①	製作年	天保十三年（1842年）
②	大願主	小友村肝煎及川庄兵衛
③	仏師	邑上牛彦

小友村とは常膳寺がある場所である。常膳寺の観音堂前に置かれている狛犬の石像には、「願主世話人　及川庄兵衛」と刻まれており、及川庄兵衛氏が実在の人物で、実際に小友村の肝煎であったことがわかっている。

常膳寺としては、狛犬だけでなく薬師如来立像の製作にも及川庄兵衛氏が関わっておられたということが初めて明らかになったということもあり、ご住職の小林氏が及川庄兵衛の子孫である及川庄八郎氏に連絡をとられたところ、早速おいでになり、インタビューをさせていただくことができた。

薬師如来立像胎内の墨書

問題は、なぜ天保十三年という時期に、薬師如来立像を作ったのかということである。

そこで、調査を依頼された3名の方と及川氏を交えて、製作理由について協議を続けるうちに、及川征喜氏から幕末に発生した中吉丸の漂流事件との関わりがあるのではないかとの示唆を受け、中吉丸についての調査を行うこととした。及川征喜氏はこれまでにも中吉丸の漂流事件については詳しく調査をされているが、常膳寺の薬師如来立像との関連が見つかったのは初めてのことであるという。氏によると中吉丸関連の資料は津波によって陸前高田市立博物館、図書館が被災したためにすべて失われてしまい、陸前高田市史に記載があるだけであろうとのアドバイスをいただいた。そこで、隣の大船渡市立図書館に出向いて文献調査を行った。

4．中吉丸の漂流事件

天保十年（1839年）11月15日（太陽暦では12月21日）に、気仙郡小友村の商い船である中吉丸は、魚〆粕201俵、鰹節354箱、昆布248俵を積み込み、常州那珂湊（現ひたちなか市）に向けて出航した。船主は小友村の肝煎であった及川庄兵衛である。乗組員は船頭三之丞（55歳）、舵取勇治（45歳）、水主和吉（35歳）、同三蔵（35歳）、同徳松（35歳）、同清吉（35歳）の6名であった。

出帆から10日程たった頃、鹿島沖で大時化にあい、帆柱を切り倒し、積み荷を海中に投げ捨てることで転覆はまぬがれたが、太平洋に吹き流され方向を見失い、洋上を漂うこととなった。35日間の漂流の末、かろうじて見知らぬ島にたどりつき、九死に一生を得た。

この中吉丸の漂着先が小笠原諸島の父島であった。当時の小笠原諸島には日本人は住んでおらず、捕鯨船への物資補給を商いとしていた外国人が住んでいた。それらの島民に助けられ、二か月ほど過ごした後、船を修理した中吉丸は出帆し、3月24日に無事に銚子湊に着船した。小友浦を出港してから実に四か月半ぶりに、全員無事に帰国したのである。

しかしその後の役人の取り調べにおいて、外国人と接したことが問題視され、密航貿易の疑いで及川庄兵衛も江戸に呼び出されて九か月もの間取り調べを受け、島から持参した品物を没収した上で、全員が無事に帰村できた。

漂流から16年目にあたる安政二年（1855年）に、船頭であった三之丞が自分の家の傍らに「船玉碑」を

建立している。これは漂流中に助命を祈願した船玉様への感謝を表したものである。この船玉碑も大津波で被災し、現在は広田半島の琴平神社前に移されている。また、水主の清吉の母が清吉が死亡したものと思い、村人と共に「念仏百万編之碑」を建て供養したことが知られている[2]。

この「船玉碑」、「念仏百万編之碑」に加え、今回の調査により常膳寺の薬師如来立像が中吉丸漂流事件とかかわりのある文化遺産であろうと考えられるのである。

5．小笠原諸島の歴史

小笠原諸島が発見されたのは、寛文十年（1670 年）である。阿波国海部郡浅川浦（現海部郡海南町浅川）の船主で船頭でもあった勘左衛門ら 7 名が乗り組んだミカン船が、前年の 11 月 15 日に紀州の宮崎（有田市宮崎）で江戸へ送るミカンを積み込んで出帆したものの、遠州灘で遭難し漂流、翌年 2 月 20 日（太陽暦 4 月 9 日）に漂着したのが母島であった。当時の母島は文字通りの無人島であった。船頭である勘左衛門は亡くなるが、残りの 6 名は母島に 50 日程滞在し、その間に船をつくり、父島にも上陸した後、八丈島に到着し、帰国している[3]。

このミカン船の生還者の報告から、幕府も探検船を派遣し、延宝三年（1675 年）に父島に到着、36 日間にわたって父島、母島など主な島々を探検している[4]。

一方、ヨーロッパ人も東洋の崖に金・銀を豊富に産する島があるという伝説から、16、17 世紀にスペインやオランダの探検船が、日本の近海に派遣されている[5]。

ミカン船によって発見された無人島を最初にヨーロッパに紹介したのは、1727 年に出版されたケンペル(オランダ商館の医師）が著した『日本誌』で、そこにはブネシマ（無人島）またはブネ（無人）の島と呼ばれていると記されている[6]。

この無人島に漂着ではなく、人が定住するようになったのは、天保元年（1830 年）6 月である。マテオ・マザロ、リチャード・ミリチャンプという 2 人のイギリス人、ナザニエール・セボリー、アルディン・B・チャピンという 2 人のアメリカ人、チャールス・ジョンソンというデンマーク人と、名前がわかっていないハワイ出身の男女 20 名の計 25 名が父島に到着するが、乗ってきた船から 2 名のハワイ人と 1 名のアメリカ人が脱走して加わったことで、最初の入植者は 28 名になった[7]。

彼らの入植の目的は、無人島近海でクジラを獲る捕鯨船相手の商売であった[8]。当時は石油資源が発見されておらず、鯨油は貴重な商品であった。そのため、イギリスやアメリカはまず大西洋で捕鯨を行い、大西洋のクジラ資源を破壊してしまう。その後アメリカは太平洋に進出し、日本近海にマッコウクジラの生息海域を発見し、ジャパングランドと名付けている。しかし、ジャパングランドはアメリカ本国との距離が大きいため、効率よく鯨油を集める方法としてアメリカ式捕鯨が行われるようになる。アメリカ式捕鯨とは、捕獲したクジラを船上で解体し、脂分の多い皮と骨の部分以外は海中に投棄し、それらを船上に設置した釜で煮て鯨油を取り、船内に積み込んだ樽が鯨油でいっぱいになるまで操業を続けるというものであった。そのため、捕鯨船に補給する薪や水、船員の食料を調達するために、小笠原諸島の位置は重要であった。

1853 年にペリーが 4 隻の黒船で浦賀に来航し、幕府に開国を求めるが、その理由のひとつが、捕鯨船への食料等の補給と災害時の避難場所の確保であった。ペリーは浦賀に来航する一月ほど前に、父島に上陸している。ペリーは父島の二見湾で最も給水に便利な土地 66 ヘクタールを貯炭所用地として 50 ドルで買収し、セボリー氏にその管理を委ねるとともに、島民に自治政府をつくるよう勧告している。ペリーは捕鯨基地としてだけでなく、日本開国の前進基地として、また太平洋横断汽船航路の中継地として、さらに極東貿易の基地として、父島に注目していたようである。ペリーが去った後、島民の署名のもとにピール島（父島）植民政府が樹立され、セボリー氏がその長官に任じられている[9]。

時代は前後するが、中吉丸が漂着したのは、セボリー氏らが入植して 10 年ほどの頃であった。

6．中吉丸乗組員と島民との交流

船頭の三之丞らは島の様子を次のように報告している。

① 正月四日の夕方その島の入口に到着すると、間もなく島人 4、5 人が小舟二隻に乗ってやってきて、本船に乗り込んできた。(中略) 言葉は通じなかった（中略)。間もなく足を縛った豚ブタやアヒルのような鳥を持ってきてくれたが、日本人には食べられないと固辞すると、今度は芋を持ってきてくれた（後略)。

② 島には人家が 12、3 軒あり、男女合わせて 30 人ほど住んでいた。

③ 島人の家に食べ物を貰いに行くと、どこの家でも惜しげもなくたくさん呉れる。実に仁慈の地である。

④ 島民は男女とも色が黒く眼中が赤く、女は特に色が黒い。衣服は柿色の木綿の筒袖を着ていた。

⑤ 他人の家を訪れる時「アローハ」と手をあげ、食物を懐中に入れて、オランダ文字の本を読みながら歩くのも平気である。

⑥ 道具では、火縄も使わず火を吹きだす鉄砲もあっ

た。

⑦　箸を使わずに、真鍮のヘラ（スプーン）や、箸に似た二股にとがったもの（フォーク）で、食物を突き刺して食べていた。

⑧　茶ーてい。水ーおかわ。女ーめい。など。

また、乗組員の証言をもとに役人が描いた島民の生活風俗を表したイラストも残っており、興味深い。

二か月後の出帆の時には、島民が浜辺で手を振って見送ってくれただけでなく、船の中にキリスト教伝道書、ギヤマンなど色々な品物を投げ入れてくれた[10]。

これらの品物は、江戸での取り調べがあったにもかかわらず隠して持ち帰られ、子孫に伝えられていたが、近年になって市立博物館がその保管にあたっていた。水主和吉の子孫である上野文雄さんからキリスト教伝道書のコピーを見せていただいたが、今回の津波被害で失われてしまったのは、大変残念なことである。その伝道書にはナザニエール・セボリーの署名があったらしい。

７．現在の陸前高田市と小笠原諸島との交流

中吉丸が漂着した島については、ルソン島説やハワイ島説などもあった[11]が、1968 年 2 月に小笠原諸島がアメリカから返還されるにあたって、政府に招かれて東京に来られたジェリー・セボリー氏が「私の祖父が、たしかに日本の漂流民 6 人をお世話したと聞いています」とインタビューに答えた[12]ことから、中吉丸の漂着地が小笠原諸島であったことが確実となった。

2010 年 2 月には、乗組員の子孫や関係者が小笠原村を訪問した他、2010 年 5 月には小笠原村教育委員会教育課長の佐々木英樹氏が陸前高田市を訪れ、乗組員の子孫と交流した。また、11 月には、小笠原村ビジターセンターで小友浦船（中吉丸）漂着 170 年特別展が開催されたりして、交流が始まってきた。東日本大震災津波被害に対しても、小笠原村から支援の手が差し伸べられている。

今後、陸前高田市の稀有な歴史的事実である中吉丸漂流事件と小笠原島民との交流を、中吉丸の子孫や関係者だけでなく、陸前高田市民や子どもたちが共有していくことが課題であろう。

８．学習活動の概要

以上の常膳寺の薬師如来立像の胎内墨書からつながっていった歴史的事実をもとに、小学校総合的な学習の時間における地域遺産を活用した持続発展教育の授業計画を作成した。6 年生を対象としたのは、社会科学習で日本の歴史を学んでおり、ペリー来航等と関連付けて学ぶことで、理解が深まると考えたからである。

また導入において「なぜ、及川庄兵衛は薬師如来立像をつくったのだろうか。」という課題を設定することで、謎を解き明かそうという児童の学習意欲が高まり、地域の歴史や人々のつながりについて積極的な調査活動が行われることを期待した。

８．１．単元名

海を渡った中吉丸

８．２．単元の目標

- 常膳寺の薬師如来立像の胎内墨書から地域の歴史に関心を持つとともに、地域を大切にしようとする心を育てる。
- 小笠原村と陸前高田市の時間を越えたつながりから、持続可能な発展に関する価値観の一つである人と人のつながりの大切さを考える。
- 中吉丸関係者等へのインタビューやインターネット、図書資料からわかったことを年表や図にまとめる。
- 陸前高田市と小笠原村双方の関係者の中吉丸事件への思いを共感的にとらえ、交流の重要さを理解する。

８．３．評価規準

評価規準

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
①　中吉丸に関心を持ち、意欲的に調べる。 ②　地域の歴史に関心を持ち地域を大切に思う。 ③　人と人のつながりを大切にする。	①　中吉丸に関わる人々の思いを考える。 ②　人と人がつながる上で大切な利他的行動を考える。	①　インタビューやインターネット、図書資料からわかったことを、年表や図にまとめる。	①　陸前高田市と小笠原村双方の関係者の中吉丸事件への思いを共感的にとらえる。 ②　交流の重要さを理解する。

８．４．単元計画（全 14 時間）

主な学習活動	学習への支援	評価について
１．常膳寺に行こう（4） ・　常膳寺の仏像を見学し、和尚さんから、お寺についての話を聞く。 ・　薬師如来像の胎内にある墨書の中で読める文字を探していく。	・　地域遺産が守り、伝えられてきたものであることを押さえる。 ・　墨書の貴重さや身近に見学できる貴重さを伝え、意欲を高める。 ・　及川庄兵衛という名前に注目させる。	社会的事象への関心・意欲・態度①
なぜ、及川庄兵衛は薬師如来立像をつくったのだろうか。		
２・中吉丸について調べる（4） ・　中吉丸はどこに漂着したのか。 ・　図書館やインターネットを利用し、中吉丸の漂流事件を調べる。 ・　中吉丸の乗組員の子孫にインタビューし、漂流事件に関する感想を聞き取る。 ・　中吉丸事件の意味を話し合う。	・　イラストを提示し、意欲を高める。 ・　グループで目的を決めて調べる。 ・　事前に主な質問事項をまとめて相手に伝え、インタビューの仕方を指導する。 ・　中吉丸事件の貴重さを考えさせる。	観察・資料活用の技能① 社会的な思考・判断・表現① 社会的事象への関心・意欲・態度②
３．小笠原村との交流について（4） ・　最近始まった交流に参加された方から、話を聞く。 ・　東日本大震災津波の被災への小笠原村からの支援について調べる。 ・　人と人のつながりについて話し合う。	・　現在も交流している意味を考えることから、人と人のつながりについて考え、一人一人が現代の中吉丸として、様々な人とつながっていこうという意欲を高める。	社会的な思考・判断・表現② 社会的事象についての知識・理解①・②
４．まなびの交流（２） ・　小笠原村立小笠原小学校に、現在の気持ちを伝える。	・　自分たちから働きかけることの大切さを指導したい。	社会的事象への関心・意欲・態度③

９．終わりに

本稿では、陸前高田市における文化遺産調査結果をもとに指導計画を作成した。今後、作成した指導案や資料を陸前高田市教育委員会に届け、市立小学校の総合的な学習の時間において授業実践していただくことで、陸前高田市の小学生に地域を大切にする心や、人前と人のつながりの大切さ、そのための利他的な行動力を育てていただければと思う。

まだ小笠原村での調査ができていないため、今後、小笠原村を訪問し、セボリー氏の子孫等にインタビュー調査を行い、指導内容の充実を図っていきたいと考えている。

注

1)墨書の発見者は奈良教育大学教授山岸公基氏である。本稿の薬師如来立像胎内の墨書の内容は、山岸氏の解読によるものである。

2) 金野静一監修、陸前高田市史編集委員会編集、『陸高田市史 第三巻 沿革編(上)』陸前高田市、1995 年、pp.720-722、p.725、pp.727-728

3) 田中弘之、『幕末の小笠原』中央公論社、1997 年 pp.2-7

4)同上、pp.7-9

5)同上、pp.15-18

6)同上、pp.18-20

7)同上、pp.41-42

8) 大熊良一、『歴史の語る小笠原島』南方同胞援護会、1966 年、pp.38

9)前掲注 3)田中、pp.93-94
10)前掲注 2)金野、pp.722-725
11) 渡辺兼雄「中吉丸漂流始末記」東海新報、第 11600 号、1997 年 1 月 1 日
12)前掲注 2)金野 p.729

（出典:『教育実践開発研究センター研究紀要第 22 号』奈良教育大学教育実践開発研究センター、2013 年 3 月、pp.291-295）

陸前高田市文化遺産調査におけるESD教材開発（2）
― 高田松原と奇跡の１本松を通して ―

中澤　静男
(奈良教育大学持続発展・文化遺産教育研究センター)
中澤　哲也
(奈良教育大学教育学研究科専門職学位課程大学院生)

The second Teaching material creation for Education for Sustainable Development at researching cultural heritage in Rikuzentakata city
－ Through a seashore dotted with pine trees “Takatamatubara” and　A pine tree of miracle －

Shizuo NAKAZAWA
(Center for Study of Education and research of Sustainable Development and Cultural Properties, Nara University of Education)
Tetsuya NAKAZAWA
(Graduate School of Education,School of Professional Development in Education, Nara University of Education)

要旨：奈良教育大学は日本で一番初めにユネスコスクールに認定された大学として、持続発展教育（以下ESDとする）を指導できる教員の養成に取り組んでおり、「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクトを立ち上げた。その一環として 2012年９月に、教員２名、教職大学院生２名、大学院教育学研究科大学院生２名、学部生２名からなるチームで、東日本大震災津波で被災した陸前高田市において文化遺産調査を行った。調査の目的は、①文化遺産調査、②文化遺産の教材化、③防災教育であった。本稿では、②文化遺産の教材化に関わり、今回の津波被害で全滅した高田松原を取り上げ、ESDとしての教材開発を行う。具体的には高田松原についての学び、高田松原のための学び、高田松原を通した学びによって、陸前高田市の小学生が地域を大切に思う心を養うと共に、森林環境の果たす役割や人と人のつながりの大切さなどの持続可能な発展に関する価値観を身につけ、持続可能な陸前高田市の構築に参加しようという態度を育てることを目的に教材開発を行った。

キーワード：持続発展教育 Education for Sustainable Development　　奇跡の一本松 A pine tree of miracle 東日本大震災津波 Great East Japan Earthquake tsunami

１．はじめに

陸前高田市は2011年３月11日の東日本大震災津波によって、死亡者1735名、行方不明者14名（2012年10月23日現在）という、市民の約１割に及ぶ人的被害の他、海抜が低いところにあった市役所や市民体育館、市立博物館など、主要施設が被災した。

このような状況の中､2011年５月に陸前高田市在住の元新聞記者の及川征喜氏､元小学校長の佐藤文隆氏、教育委員の松坂泰盛氏から、多くのものを失った市民を元気づけたいという願いを込め、奈良教育大学（以下「本学」とする）の山岸公基教授に、残された文化遺産調査の依頼があった。この依頼を「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクトに位置付け、①文化遺産調査、②文化遺産の教材化、③防災教育の３つのねらいを設定し、現地調査を行った。

本稿は、その中の②文化遺産の教材化として、陸前高田市にあった高田松原の教材化に取り組んだものである。東日本大震災津波によって失われた高田松原の歴史を調べたり、それが果たしていた役割を考えたりする学習や、高田松原を復興させようと取り組んでおられる方々の思いにふれ、共感することで、次の地域社会を受け継ぐ者としての当事者意識と、持続可能な地域社会づくりに参加しようという態度を育てることができると考える。

２．文化遺産を通した持続可能な発展のための教育

先進国における公害などの環境問題に端を発して、エネルギー資源の枯渇や、食料問題、戦争、貧困、人権などの様々な地球的諸課題を解決し、持続可能な社会を構築するために、世界中で持続可能な発展のため

の教育（以下、ESD）の推進が求められている。日本においても、2008 年改訂の学習指導要領に ESD の理念が反映された。

ESD がこれまでの教育と大きく異なることは、これまでの教育が理解することに重点が置かれていたのに対して、ESD では価値観と行動の変革がねらいとされているところである。

２．１．ESD の基盤となる地域を大切に思う心

例えば、環境問題について学び、その原因が判明したとしても、行動しないと環境問題は一向に解決されない。子ども一人一人が当事者意識を持って、環境改善のために行動を起こすことが、環境問題解決の第一歩である。この地域での行動化の基盤となるのが地域を大切に思う心である。

地域に伝えられている文化遺産について学び、その価値を理解すると共に、それを大切に保護し伝えてきた先人の存在に思いをはせ、現在もその継承や価値の発信に取り組んでおられる地域人材と出会い、文化遺産に対する熱い思いを聞き取ることで、子どもの心が変容する。地域を大切にする心が育ち、持続可能な地域社会の形成に参加する態度を養うことができる。

２．２．文化遺産から学ぶ持続可能な発展に関する価値観

日本ユネスコ国内委員会（2012）は持続可能な発展に関する価値観として、人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重等を例示している [1] が、その多くは、文化遺産を通して学ぶことが可能である。

今回取り上げた高田松原においても、高田松原の歴史を学ぶことから、環境を尊重することや人と人のつながりの大切さを学ぶことができる。

地域を大切に思う心を養うと同時に、持続可能な発展に関する価値観を身につけることで、子どもは持続可能な地域社会づくりの担い手として、考え、行動を始める。

ESD はあらゆる教育や学びの場に取り込まれることとされており、教科や道徳、特別活動などにおいて、持続可能な発展に関する価値観を学ぶことが求められる。しかし、例えば教科には教科の目標があるため、ESD が求める行動化まではいたらないことも多くある。そこで、文化遺産を通して地域を大切に思う心を養い、持続可能な発展に関する価値観を学び、行動化までのひとまとまりの学習の機会として、総合的な学習の時間の活用は有効である。

３．高田松原

陸前高田市の名勝、「高田松原」は市民からも大変愛される陸前高田市のシンボルであった。約 7 万本もの松が海沿いに 2 キロメートルにわたって続いており、高田市民はもちろん、観光客にも海水浴や、憩いの場として親しまれていた。しかし、高田松原が自然に形成されたものではなく、多くの人が植え、守ってきたものであるという事実はほとんど知られていない。高田松原は 1666 年に仙台藩主であった伊達綱宗が気仙郡高田村の豪商、菅野杢之助（かんのもくのすけ）に立神浜（当時の高田松原）の田畑に被害を及ぼす塩害や、強風を防ぐため、気仙郡高田村に、長さ 440 メートル幅 220 メートルに渡る松の植栽を命じたのが始まりである。翌年から、杢之助はのべ 200 人を動員して約 6200 本の松を植えた。しかし活着したのは半分程度であった。その後 1673 年までの 7 年間に、のべ 672 人を動員して、さらに 18000 本の松を植えたが、志半ばに倒れ、その子七左衛門が父の遺志を継いで完成させた。

その 50 年後の 1724 年、旧仙台領の主要金山の一つであった玉山金山を治める松坂新右衛門が、仙台藩から新たに御山林方御横目を仰せつかり、気仙川流域の新田を塩害、風害、洪水から防ぐために今泉村（陸前高田市気仙町）に松の植林を行った。

杢之助が植林した松原は「高田松原」、新右衛門が植林した松原は「今泉松原」と呼ばれていたが、1955 年の町村合併によって陸前高田市となって以来、その 2 つを合わせて高田松原と呼ばれるようになった。

アカマツ、クロマツ約 7 万本が 2 キロメートルに渡って、海岸沿いに続いていた。しかし、この高田松原はこれまで何事もなく伝えられてきたのではない。1896 年の三陸大津波、1933 年の三陸大津波、1960 年のチリ地震津波では海水や土砂を被り、大きな被害が出たが、その都度地元の人たちが補植し、景観が保たれてきた。高田松原は 1930 年に東北十景に選ばれたのを皮切りに、1940 年国の名勝に指定、1958 年には日本百景に、1964 年陸中海岸国立公園、1986 年には森林浴の森百選に選ばれるなど、陸前高田市のシンボル的存在であった。

枯死する前の奇跡の一本松
(2012.9.8 筆者撮影)

しかし、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災津波に

よって高田松原は１本を残して崩壊した。残された松は奇跡の一本松としてたくさんのメディアに取り上げられたが、やがて枯死してしまった。現在陸前高田市ではその「奇跡の一本松」の芯の部分に樹脂を入れ、地域の活性化のシンボルに、また、津波の恐ろしさを伝えるモニュメントにしようと取り組まれているが、未だに仮設住宅に暮らし、将来の展望も持てない市民がたくさんおられることから、大金を投じてのモニュメント化には、賛否両論ある。

４．高田松原の教材に向けて

高田松原の教材化を通して、陸前高田市の子どもたちに伝えたいことが３つある。１つ目は高田松原についての学び、２つ目は高田松原のための学び、３つ目に高田松原を通しての学びである。

４．１．高田松原についての学び

高田松原が天然の松林ではなく、菅野杢之助や松坂新右衛門が多くの人々の協力の下、新田開発のために松を植えたことがその始まりである。それまでは、高田松原は荒涼とした不毛の地であり、潮風が絶えず砂塵を吹き上げて田畑を埋めつくし、作物の収穫がないこともしばしばだったと言われる。杢之助は村方と経費を負担し合って行った始めの年の植栽がうまくいかなかった翌年からは、私財を投じてクロマツを中心に18000本を植え付けた。杢之助亡きあとは、子孫が代々立神御林御山守（たつがみおはやしおんやまもり）として、私財を投じて松林の保護育成に努めた。

その 50 年後、気仙川流域の新田を災害から守るため、私財を投じて、防潮・防風林の植栽に取りかかったのが新右衛門だった。海水が染み込んだ砂地、夏の高温、冬の凍結などの数々の悪条件にも打ち勝ち、20年の歳月をかけて数千本の松の育成に成功する。これら新田開発により、仙台藩では表向きは62万石だが、実高は100万石を越えていたと言われる。松を植えたことで、人々がどれだけ助かったのかを当時の時代背景と合わせて考えさせたい。

残念ながら松坂新右衛門の偉功を称える顕彰碑も津波に流されてしまったが、高田松原にまつわる地域の先人について学ぶことで、陸前高田市を誇りに思い、大切に思う心が育つと考える。

４．２．　高田松原のための学び

陸前高田市には高田松原を守る会がある。今回の調査を依頼された３人の方もその会員である。現在、陸前高田市は津波によって高田松原を流されただけでなく、塩害によって、海岸沿いには松が育つことができない状況になってしまった。そのような中、2012 年10月10日の毎日新聞（大阪本社発行版・朝刊）に「『奇跡の一本松』後継樹展示」の記事が掲載された。住友林業筑波研究所主席研究員である中村健太郎氏が、千本松原で津波から唯一残り、被災地に希望を与えた一本松の松ぼっくりから採取した種を発芽させ、それが約７センチの苗木にまで成長しているという記事である。高田松原を守る会の方々も、震災前に松原の松枝や松ぼっくりを使って作られていたアート作品から種を採取し、苗木を育てておられる。こういった高田松原のための取り組みをされている方々にインタビューし、高田松原や街の復興に対する思いを聞き取ることで、自分も何かしようという能動性が育まれ、学習者の行動の変革をもたらすものと考える。

高田松原を守る会で育てている松の苗木
(2012.9.7 筆者撮影)

４．３．高田松原を通した学び

さらに地域の人や保護者に、高田松原にまつわる思い出などを聞き取ることで、松林が持っていた文化的サービスに気付くことができる。森林環境は、人間社会が生態系から受けるあらゆる利益を意味する生態系サービスの基盤である。生態系サービスは次の４つに分類される。①食料や燃料などの資源を提供するサービス、②水の浄化や災害防止など、私たちが安全で快適に生活する条件を整える調節的サービス、③さまざまな喜びや楽しみ、精神的な充足を与えてくれる文化的サービス、④それらのサービスをうみだす生物群が維持されるために必要な一次生産（光合成による有機物の生産）や生物間の関係などを支える基盤的サービスである[2)]。

高田松原についての学びから、森林環境が人間に与えてくれるサービスを理解し、様々な森林環境を保全することの大切さに気づく契機となると考える。

５．学習活動の概要

高田松原を教材に、小学校６年生を対象とした総合的な学習の時間における ESD の学習活動案を作成し

た。小学校６年生を対象としたのは、５年生の社会科の内容（１）「国土の保全などのための森林資源の働き及び自然災害の防止」での学習を深めたり、発展させたりして、行動化につなげたいと考えたためである。

５．１．単元名

高田松原に込めた願い

５．２．単元の目標

・　高田松原に関わった先人について意欲的に調べる。
・　松原などの森林環境の果たす役割を具体的に考えると共に、高田松原の復興に取り組んでおられる方の思いを聞き取り、自分にできることを考える。
・　現地見学やインタビュー調査など、五感を通して調べたことを効果的にまとめる。
・　高田松原と地域の人々との関わり、震災復興への人々の願いを理解する。

津波で破壊された高田松原
(2012.9.8 筆者撮影)

５．３．評価規準

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
①　高田松原の植林し、補植し続けてきた人々に関心を持ち、意欲的に調べる。 ②　高田松原に込められた震災復興への願いを次の世代に伝えるために意欲的に参加する。	①　植林・補植によって受け継がれた人々の願いや、思いを考える。 ②　高田松原が津波で破壊された今、先人の思いを伝えていくにはどうすればいいか考える。 ③　森林環境が果たしている様々な役割を具体的に考える。	①　高田松原を現地調査したり、高田松原を守る会の方にインタビューしたりして、高田松原の持つ意味を効果的にまとめる。	①　菅野杢之助や松坂新右衛門や、保全活動を行ってきた地域の方々の努力と、高田松原に込められた震災復興への願いの共通点を理解する。

５．４．単元計画（全10時間）

１．高田松原を知ろう。（1時間） ・　なぜ、海岸沿いに高田松原があったのかを考える。 ・　文政 5 年の高田村、今泉村の古地図をもとに、高田松原の成り立ちを話し合う。	・　東日本大震災津波以前の高田松原の写真や映像により、高田松原への関心を高める。 ・　高田松原が 2 つの松原を合わせてできたものに気付くことから、高田松原の成り立ちに対する関心を高める。	社会的事象への関心・意欲・態度①
２．陸前高田におられた先人を調べる。（1時間） ・　高田松原の歴史年表を作成する。	・　菅野杢之助や、松阪新右衛門の資料を提示し、高田松原がつくられた理由やその効果、またその後の保全活動について年表にまとめさせる。	社会的事象についての知識・理解①
３．高田松原を救え！（3時間） ・　年表から、明治20年、昭和８年の三陸大津波、昭和55年のチリ地震による大津波が陸前高田を襲ったことを読み取る。	・　陸前高田市の災害史年表を提示する。	観察・資料活用の技能①
・　3度の大津波後の地域の人々の松原保全の取組を知る。	・　津波が松原に影響しなかった理由を考えさせる。	
・　高田松原を守る会の方々にインタビューし、これまでの松原保全活動と、これからの復興活動を聞き取る。	・　高田松原を守る会の方をゲストティーチャーに招き、話を聞かせていただく。	社会的な思考・判断・表現①
４．私たちの高田松原を思い出そう。（2時間） ・　高田松原は自分たちにとってどんな存在であったか考える。	・　高田松原での家族の写真などを持ち寄らせたり、家族や地域の人にインタビューさせ、高田松原を舞台とした人と人のつながりの大切さに気付かせる。	社会的な思考・判断・表現②
・　高田松原だけでなく、周囲の森林環境の役割を考える。	・　4つの生態系サービスを意識して、子どもの意見をグループ分けする。	社会的な思考・判断・表現③
５．陸前高田市をつくっていこう。（3時間） ・　高田松原の復興と震災復興の願いを受け取る。	・　家族や地域の人、仮設住宅に住む人、市役所の人など、身近な人の声と高田松原を守る会の人の願いの比較から、共通する願いを明らかにさせる。	社会的事象への関心・意欲・態度②
・　住み続けたくなる陸前高田市をテーマにレポートや作文、絵画などを作成し、発信する。	・　全校生徒や家庭、地域の方などに、自分たちが考える陸前高田市を伝え、そのための第一歩を踏み出すよう、意欲化する。	

６．終わりに

本稿では、陸前高田市における文化遺産調査における現地見学や、市民の方へのインタビューをもとに指導計画を作成した。今後、作成した指導案や資料を陸前高田市教育委員会に届け、市立小学校の総合的な学習の時間において授業実践していただくことで、陸前高田市の小学生に地域を大切にする心を育て、これからの陸前高田市の建設に参加する態度を育てていただければと思う。そして高田松原が津波によって流されてしまった今、先人から受け継がれてきた願いを次の世代に伝えるにはどうすればいいのかを考え、高田松

原の代わりに、陸前高田市の子どもたちが次の世代に何を残していくのかを考え、行動するきっかけになることを願っている。

引用文献

（1）名村栄治、「名勝「高田松原」の由来」『平成23年三陸大津波　被災地からのレポートⅡ』一関プリント社、平成23年、pp.133-138

（2）金野静一監修、陸前高田市史編集委員会編集、『陸前高田市史 第四巻 沿革編（下）』陸前高田市、平成8年、pp.675-679

注

1) 文部科学省国際統括官付（日本ユネスコ国内委員会事務局）『ユネスコスクールと持続発展教育（ＥＳＤ）』、2012年、ｐ.2

2) 鷲谷いづみ、『〈生物多様性〉入門』岩波書店、2010年、pp.20-21

（出典:『教育実践開発研究センター研究紀要第22号』奈良教育大学教育実践開発研究センター、2013年3月、pp.297-301）

陸前高田市文化遺産調査におけるESD教材開発（3）
― ＥＳＤとしての防災教育 ―

中澤静男
(奈良教育大学持続発展・文化遺産教育研究センター)
土海稚奈・英優美
(奈良教育大学教育学研究科専門職学位課程大学院)
二階堂泰樹
（奈良教育大学学校教員養成課程教科教育専攻社会科教育専修）

The third Teaching material creation for Education for Sustainable Development at researching cultural heritage in Rikuzentakata city
－ Disaster prevention education as ESD －

Shizuo NAKAZAWA
(Center for Study of Education and research of Sustainable Development and Cultural Properties, Nara University of Education)
Wakana Dokai・Yumi Hanahusa
(Graduate School of Education,School of Professional Development in Education, Nara University of Education)
Taiki Nikaido
（Department of Social studies Education,Nara University of Education ）

要旨：昨年に引き続き①文化遺産調査、②文化遺産の教材化、③防災教育の３つを目的に陸前高田市文化遺産調査を実施した。市庁舎を含む市街地中心部全域が被災した陸前高田市では、震災復興の真っ直中にあった。近隣の山を掘削して山上に平地を造成しての街全体の高台移転、2 倍以上の高さを上げた防潮堤の建造などの土木工事といったハード面の復興が本格化している。本調査においては、被災地の見学だけでなく、仮設住宅や市立小学校での教員への聞き取り等のソフト面に関する調査を行った。その結果、学校においては東日本大震災を教訓に防災マニュアルの改訂が行うといった進歩が見られる一方で、仮設住宅では生活の落ち着きと共に、被災者の生き方に関する新たな課題も明らかになってきた。本稿ではこれらの調査結果をもとに、特に③防災教育に焦点化し、事前の危機管理（備える）と発生時の危機管理（命を守る）、事後の危機管理（立て直す）の 3 つの段階ついて陸前高田市の取り組みに考察を加え、その意義を明らかにした。さらに各地域で備えなければならない多様な自然災害に対するソフト面の備えである防災教育について、ＥＳＤで育てたい価値観にも留意した学習活動案を提示した。

キーワード：持続可能な開発のための教育 Education for Sustainable Development
東日本大震災津波 Great East Japan Earthquake tsunami
防災教育 Education for Protection against disasters

１．はじめに

奈良教育大学では、昨年度に引き続き、地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクトの一環として、2013 年 8 月 26 日から 29 日の日程で、陸前高田市を中心に文化遺産調査を行った。調査チームは、本学教員２名、大学院教育学研究科修士課程２名、専門職学位課程２名、学部生２名の８名である。本調査の目的は３つある。一つ目が文化遺産調査、二つ目に文化遺産のＥＳＤ教材開発、三つ目に防災教育である。

2014 年 11 月に国連ＥＳＤの 10 年の最終年会合が岡山市と名古屋市で開催されるが、民間主導のＥＳＤとして、「ＥＳＤの 10 年・世界の祭典」推進フォーラム主催のＥＳＤテーマ会議が昨年から開催されている。そこには世界と共有すべきＥＳＤの５つの主要なテーマが設定されており、その一つが「防災教育と気候変

動教育」である。日本は自然災害の多い国であり、全国の学校において避難訓練が実施されているが、特に2011年3月11日の東日本大震災津波によって、事前の備えと事後の対処の両方を体験的に学ぶ防災・減災教育の重要性が浮き彫りにされた。

本稿では、陸前高田市の被災状況・復興状況の視察、小学校での聞き取り調査、市民への聞き取り調査、仮設住宅訪問、「高田松原を守る会」等の復興に向けた市民活動に関する聞き取り調査をもとに、ＥＳＤとしての防災教育について考察を加え、ＥＳＤとしての防災教育に関する授業モデルを提示することで、これからの防災教育に資することを目的としている。

２．ＥＳＤと防災教育

今でこそ防災教育はＥＳＤであるという認識が定着しているが、東日本大震災以前には、管見する限り、気仙沼市立階上中学校の「私たちは未来の防災戦士ー持続可能な社会のためにー」の取組と同じく気仙沼市立浦島小学校の「「知る」、「見つめる」、「生かす」ことを重視したＥＳＤ学習のあり方」の一環として、全学年で取り組まれていた津波避難訓練が、ＥＳＤとして取り組まれていただけであった。特に階上中学校では、『災害発生時に、家庭や地域で、自分たち中学生ができることは何か、地域の一員として地域住民と協力してできることは何かについて、「自助」・「公助」・「共助」の視点から考え、防災意識を家庭から地域へ波及できる防災リーダーを育成する。「自助」・「公助」・「共助」を３年１サイクルで実施し、災害発生時に対応できる力を養う[1]。』ことを目的に、単なる避難訓練に終始するのではなく、地区防災マップの作成や災害発生のメカニズムを学ぶことで、どこででも通用する災害対応力の育成を図るという先進的な取組であった。

2012年6月に改訂された『我が国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画（ＥＳＤ実施計画）』においては、「大震災等の経験を基にした教訓や復興についての考え方をまとめ、それをＥＳＤ実施計画に反映させるには、もう少し時間を要します。（中略）ＥＳＤの推進にどう生かしていくかについては、被災地の安定等を待って改めて議論し、それを踏まえて再度実施計画を改訂することとします[2]。」と述べられているように、ＥＳＤと防災教育の関連については明言されていない。

しかし東日本大震災で大きな被害を受けた気仙沼市教育委員会では、ＥＳＤを視点とした体系的な防災教育に取り組み、その成果として「平成23年度気仙沼市教育研究員実施報告」を作成している。それによると、『ＥＳＤの観点では、「他者との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「関わり」「つながり」を尊重できる個人を育むこと』とされ、「防災教育は、自然について学び、社会や経済などのかかわりから、災害を捉え、それに備えるために行動することであり、まさに、ＥＳＤのねらいをもとにした教育であるといえる[3]。」と述べ、自然災害のメカニズムを学ぶことを通して地域の自然環境を知ること、災害に備えたり災害時の行動について具体的に考えたりする上で、地域社会について学び、地域の方々と連携することから、ＥＳＤと防災教育の関連性を見いだしている。

３．陸前高田市で学んだ防災教育

文部科学省は、東日本大震災での被害を受け、「学校防災マニュアル（地震・津波災害）作成の手引き」を作成した。そこでは学校における地震防災のフローチャートとして、事前の危機管理（備える）と発生時の危機管理（命を守る）、事後の危機管理（立て直す）の3つの段階が考えられている[4]。

この3つの段階について、陸前高田市での調査をもとに考察を加える。

（１）事前の危機管理（備える）

陸前高田市を含む東北地方太平洋沿岸では、今回の大震災以前にも、明治以降だけで、明治29年と昭和8年の三陸大津波、昭和35年のチリ地震津波という3回の大津波により被災している。この事実を踏まえ、陸前高田市では海水面＋5.5メートルの高さの堤防が建造されていたのであるが、それを大きく上回る海水面＋17メートルの津波に襲われ、市庁舎を含む中心市街地が壊滅的な被害をあった。

高田地区海岸災害復旧事業概要によると、津波対策として「頻度の高い津波」と「最大クラスの津波」にわけ、前者へ対応した堤防として海水面＋12.5メートルの高さの堤防を築く計画が進行中であり、訪問中もたくさんのトラックやクレーン車による工事が、街中で進められていた。また、後者に対しては、海岸堤防への依存だけでなく、住民の避難を最優先したソフト・ハードを総動員した「多重防御」の考え方による減災を図っている。

訪問した高田市立小友小学校では、副校長先生から防災教育計画を聞かせていただいた。小友小学校では、防災教育として①自分の命は自分で守る力をつける、②支え合って生き抜く力をつける、③未来を切り開く力をつけることを目標に取り組んでおり、それを支える学びとして地形や立地条件、歴史・文化・伝統、関わり合い・助け合いなど、地域を知ることを目的とした「地域の学び」を位置づけている。そして小友の子どもたちに残したいこととして「震災当時の小友地区での助け合い（個人的な活動と組織的な活動）」と「震災後、どのように地区の復旧に取り組んだのか」を挙

げ、小友地区の担い手としての当事者意識の養成を重要視している。

ＥＳＤで育てたい価値観の一つに人と人のつながりを尊重することがあるが、人と人のつながりには次の3 つが考えられる。一つ目は現代の人とのつながり、二つ目が未来の人とのつながり、三つ目が過去の人とのつながりである。

一つ目の現代の人とのつながりとは、自己の生活が与える、同時代の人々の生活に対する影響を考え行動できるということである。二つ目の未来の人たちとのつながりとは、自己の生活が未来の人の生活に影響を与えることを自覚して行動できるということである。そして三つ目の過去の人とのつながりとは、今の社会が所与のものではなく、先人の苦労のたまものであることを自覚すること、さらに先人の意志を引き継いで、よりよい社会にしていく当事者であることを意識して行動化することである。

前掲のＥＳＤ実施計画には、我が国が優先的に取り組むべき課題として、「社会経済システムに環境配慮を織り込んでいくこと」と「人権や文化等に対する配慮を織り込んでいくこと」が挙げられている[5]。前者は具体的には、利益至上主義を基にした大量採取・大量生産・大量消費・大量廃棄に基礎を置く生活スタイルや産業構造を、持続可能な形に変換することである。また、後者は人と人のつながりを意識しそれを尊重する態度の育成である。

以上の課題を整理したのが図１である。

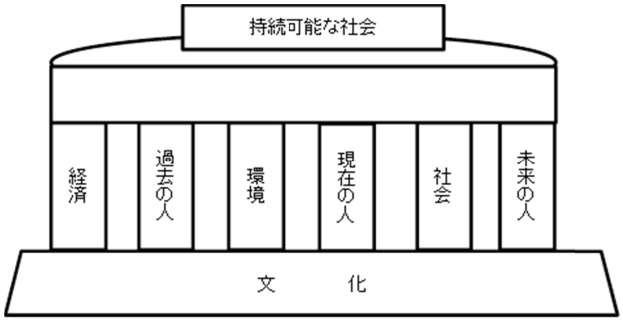


図１　持続可能な社会を支える文化モデル

そして環境に配慮した社会経済活動や人と人のつながりを意識した行動をとることが当たり前であるとの文化を、教育を通じて創造していくのがＥＳＤの役割である。その意味からも、小友小学校での防災教育における小友町の地形などの自然環境の把握や関わり合いや助け合いなどの社会環境の理解、さらに当事者意識の養成はＥＳＤに通底するものがあり、それはまた高田地区海岸災害復旧事業におけるソフト面に連なるものである。

（２）発生時の危機管理（命を守る）

陸前高田市での聞き取り調査で印象に残ったのが、陸前高田市立気仙小中学校の避難の実際である。海際に建っていた気仙中学校の避難場所に指定されていたのは気仙小学校の体育館である。しかし気仙小学校も海岸から 100 メートルほどの平地に立地している。地震発生時、気仙中学校では翌日の卒業式の予行練習で、全校生徒が体育館に集合していた。地震発生後、ただちに避難したのだが、気仙中学校では学校長の判断で、本来の避難場所である気仙小学校ではなく、近くの山に避難した。その頃、近くの人たちは気仙小学校の体育館に避難を開始していたが、気仙小学校では子どもたちを集めて、指定された避難場所である学校を出て、山に避難した。

気仙小学校の体育館も津波に襲われ、ここに避難されていた多くの方が亡くなったが、市が作成したハザードマップに記載された避難場所ではなく、山に避難したおかげで、気仙小中学校の児童生徒は全員無事であった。教職員の判断が、子どもの命を救ったのである。安全確保のための的確な初期対応を図るためにも、防災教育を通して、自分自身で考え、判断し、行動する力を養っておくことは、教員にとっても児童生徒にとっても重要である。

（３）事後の危機管理（立て直す）

仮設住宅を訪問し、区長である松坂氏から陸前高田市の仮設住宅の課題について教えていただいた。陸前高田市では、仮設住宅が造られ始めた当初、高齢者や体が不自由な方を優先的に入居させたが、これは失敗だったとおっしゃった。高齢者や体が不自由な方は引きこもりがちであり、新しい人間関係をつくることを苦手とする方が多い。そのため仮設住宅での孤独が問題になっている。後で仮設住宅に入居された方々は、元々住んでおられたコミュニティごと入居されているので、入居後も人間関係が保たれ、仮設住宅内の集会室で編み物などの教室を開いたり、協力して畑作りを始めたりといった活動が展開されている。

「震災から２年半、これまでは生きるのに必死だったが、これからはどう生きるかが課題になると思う。」と松坂氏もおっしゃっていたが、仮設住宅の建設というハード面だけでなく、関わり合いや助け合いといったコミュニティの再生というソフト面での立て直しが求められている。

さらに陸前高田市民の特筆すべき活動に高田松原を守る会の活動がある。2 キロメートルに渡って約 7 万本の、松が、美しい景観をつくり出し、海水浴やスポーツなど陸前高田市民の憩いの場であった。

この高田松原が、江戸時代の人々によって植えられた人工的な松林であったことはあまり知られていない。菅野杢之助や松坂新右衛門が多くの人々の協力の下、

新田開発のために松を植えたことが始まりであり、現在に至るまで市民の手で補植されて現在に至っている。今回の大震災・大津波によって高田松原は、奇跡の一本松を残して全滅した。津波に耐えた一本松も現在では枯死してしまっている。

この高田松原の復興を目指した活動が、高田松原を守る会を中心に展開されている。震災前に高田松原の松ぼっくりを使って作られていたアート作品から種を採取し、苗木を育てておられる。また、今回取材させていただいた陸前高田市在住の及川氏は、毎日のように高田松原跡を歩き、自然に生えてきた松苗を見つけては、自宅で育てておられた。今、及川氏が心配しているのは、高田松原の護岸工事の進み具合と松苗を植えかえるタイミングである。現在陸前高田市で進められている松原復元計画では、復元された砂浜に続いて、海水面＋３メートルの高さの第一線堤と海水面＋12.5メートルの高さの第二線堤の間の約100メートルに松原が復元されることになっており、堤防が築かれるまでは植えられないため、松苗が大きくなりすぎ、移植できなくなる可能性がある。また、第二線堤が高いため、せっかく復興できたとしても市街地から松原が見えなくなってしまう懸念もある。

高田松原の再生は陸前高田市民の原風景を取り戻す試みであり、奇跡の一本松が多くの被災者の心の支えになったのと同じように、ソフト面での立て直しという側面を担うものであると考えられる。

４．学習活動の概要

陸前高田市での視察や聞き取り調査において、自然災害に対するソフト面での防護態勢の確立の重要性を学ぶことができた。それを担うのが、防災教育である。そこで、中学校１年生を対象に、様々な自然災害に対応できる総合的な学習の時間における ESD 防災教育の学習活動案を提案する。

本学習活動案を作成するにあたって、ＥＳＤの視点から意識したことは２つある。一つ目が地域の自然環境に対する関心を高めると共に自然環境に配慮する意識を養うために、地形や土地利用の状況の調査に基づいてハザードマップを作成するということである。二つ目は、人と人のつながりを尊重する意識を育てるために、地域における助け合い、関わり合いに関する調査結果をハザードマップに反映させると共に、既存のコミュニティを核とした避難所運営において、中学生としてできることを考える活動を位置づけると共に、学習活動全般にわたって地域との連携を意識し、学習活動のプロセスを通して、地域の人たちと中学生との顔が見える関係づくりを意図したところである。

中学校第１学年　総合的な学習の時間学習活動案

（1）単元名　「校区のハザードマップを作ろう」

（2）単元の目標

- 地域の人々との交流を通して、地域の防災における当事者意識を養う。
- 地域の自然環境・社会環境を把握し、ハザードマップを作成したり、避難所での役割を考えたりする。
- 収集した情報を地域防災の観点から適切に取捨選択する。
- 様々な自然災害発生のメカニズムを理解する。

（3）評価規準

防災への関心・意欲・態度	防災に関する思考・判断・表現	資料活用の技能	防災についての知識・理解
①　地域の人々との交流を通して、地域防災の担い手としての当事者意識をもつ	①　地域の自然環境・社会環境を把握し、様々な自然災害に対するハザードマップを作成する。 ②　避難所の運営において、自分にできることを考える。	①　収集した情報を地域の環境と照らし合わせ、適切に取捨選択することができる。	①　様々な自然災害発生のメカニズムについて理解を深める。

（4）単元展開の概要（全10時間）

学習内容	学習への支援	評価
1．地域の防災訓練に参加する。 （課外） 2．学習課題をつくる。（1）	・活動中に気づいたことはメモするよう指導する。	地域の人々との交流を通して、地域防災の担い手としての当事者意識をもつ。（関・意・態：①）
なぜ、地域で防災訓練をしているんだろう。		
3．防災センターを見学する。（2） ・ 様々な自然災害のメカニズムを学ぶ。	・ 事前学習に取り組み、疑問に思うことは進んで質問するよう促す。 ・ 想定される自然災害ごとにグループで調査させる。	様々な自然災害発生のメカニズムについて理解を深める。（知・理：①）
4．校区のハザードマップを作る。（4） ・ ハザードマップに書き込む内容を考える。 ・ 地形や建造物、地域の人の関わりについて、現地調査を行う。 ・ これまでの自然災害時の対応について地域人材への聞き取り調査を行う。	・ 地域人材へ協力を依頼する。 ・ メモを取りながら聞き取り調査をさせる。 ・ 地形等がわかる写真を撮影する。 ・ 各グループで作成したハザードマップを合成し、全体的なマップを作成する。	地域の自然環境・社会環境を把握し、様々な自然災害に対するハザードマップを作成する。（思・判・表：①） 収集した情報を地域の環境と照らし合わせ、適切に取捨選択することができる。（技能①）
5．避難所で中学生ができることを（2）考える。	・ 東日本大震災での避難所運営における中学生の活動を紹介する。	避難所の運営において、自分にできることを考える。（思・判・表：②）
6．防災発表会を開く（1） ・ 地域の方を招き、発表を元に地域防災について話し合う。	・ 具体的事例をもとにした話し合いができるよう、環境を調整する。	地域の人々との交流を通して、地域防災の担い手としての当事者意識をもつ。（関・意・態：①）

5．終わりに

本稿では、陸前高田市での被災地の見学・仮設住宅や小学校への訪問、被災された方々への聞き取り調査などをもとに指導案を作成した。今回作成した指導案や資料を、さまざまな地域で中学校の総合的な学習の時間において活用していただくことによって、それぞれの地域で備えなければならない多様な自然災害に対するソフト面のさらなる充実に資することができればと期待する。地域の環境を知り、地域の人々とかかわりを持つことによって、一人一人が地域防災での当事者意識を育み、日常生活から災害に備え、災害時の各々の行動について思案し、地域の人と協力し防災・減災活動に取り組むことができるようになればと思う。この指導案が実際に災害に見舞われた場合、お互い協力し支え合うことができるきっかけの一つとなることを願っている。

注

1）宮城教育大学、気仙沼市教育委員会、気仙沼市立学校教頭会『ＥＳＤ共同研究紀要　持続可能な社会を担う児童・生徒の育成をめざして』、2011年、ｐ.67

2）「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議『我が国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画書』、平成23年、ｐ.2

3）気仙沼市教育委員会『平成23年度気仙沼市教育研究員実践報告』、平成23年、ｐ.6

4）文部科学省『学校防災マニュアル（地震・津波）作成の手引き』、平成24年、ｐ.4

5）前掲『我が国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画書』、ｐ.8

（出典：『教育実践開発研究センター研究紀要第23号』奈良教育大学教育実践開発研究センター、2014年3月、pp.163-168）

陸前高田市文化遺産調査における ESD 教材開発（4）
—防災教育を通したＥＳＤ—

中澤静男
(奈良教育大学次世代教員養成センター)
竹田隼也・島俊彦
(奈良教育大学教育学研究科専門職学位課程大学院)

The fourth Teaching material creation for Education for Sustainable Development at researching cultural heritage in Rikuzentakata city
－ ESD through Disaster prevention education －

Shizuo NAKAZAWA
(Teacher Education Center for the Future Generation, Nara University of Education)
Junya TAKEDA・Toshihiko SHIMA
(Graduate School of Education,School of Professional Development in Education, Nara University of Education)

要旨：陸前高田市文化遺産調査を実施して３年目となる。陸前高田市では、高さ 120 メートルほどの山を 40 メートルになるまで切り崩すことで高台に住宅地を造るとともに、排出される土砂を旧市街地のかさ上げに使うという、ハード面での復興が目を引く。しかし、未だに多くの被災者が仮設住宅に暮らしておられ、生活再建の目途の立っていない高齢者も多い。そのような中、今回は高田東中学校仮設住宅集会所を訪問し、住民の方々にインタビューすることができた。インタビューを通して感じたことは、住民の方々が、互いが互いを尊重し、みんなで協力して困難を乗り越えようとしていることである。ここに見られる人と人のつながりが、大震災の被害を軽減したとともに、事後の危機管理にも効果を発揮している。また、互いに尊重しあう生き方は、持続可能な社会づくりの担い手育成にも通じるものである。本稿ではこれらの調査結果をもとに、特に事後の危機管理に焦点化し、ESD で育てたい人材育成にも寄与する、これからの防災教育計画活動案を提示した。

キーワード：持続可能な開発のための教育 Education for Sustainable Development
東日本大震災津波 Great East Japan Earthquake tsunami
防災教育 Education for Protection against disasters

１．はじめに

奈良教育大学では、地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクトの一環として、陸前高田市を中心とした文化遺産調査に取り組んで３年目となる。今年度は、本学教員３名、大学院教育学研究科修士課程１名、専門職学位課程２名、学部生１名の７名からなる調査チームで、2014 年９月９日から 12 日にかけて、文化遺産調査とそれをもとにしたＥＳＤ教材開発、及びＥＳＤ・防災教育の研究開発に取り組んだ

今回の調査の主な日程は、１日目に名取市熊野本宮社・那智神社見学、大木囲貝塚・七ヶ浜歴史資料館見学、湊浜薬師堂見学。２日目が陸前高田市正覚寺での仏像調査、高田東中学校仮設住宅集会所訪問・聞き取り調査、高田市長部コミュニティセンターでの聞き取り調査、３日目は黒崎神社（東岸時）での懸仏調査、陸前高田市街の被災・復興状況視察、高田松原を守る会の松の育苗施設見学、常膳寺での仏像調査、４日目に平泉町に移動しての三輪神社大師堂見学、柳之御所遺跡見学、中尊寺見学、毛越寺・観自在王院見学という、盛りだくさんの内容であった。本稿においては、特に高田東中学校仮設住宅集会所訪問・聞き取り調査において学んだことを中心に、陸前高田市の復興計画にも言及しながら、避難所生活や仮設住宅での暮らしに焦点を当て、地域と連携したこれからのＥＳＤ防災教育について考察する。

昨年度の報告書においては、文部科学省の「学校防

災マニュアル（地震・津波災害）作成の手引き[1]」を参考に、事前の危機管理（備える）と発生時の危機管理（命を守る）、事後の危機管理（立て直す）の 3 つの段階について考察を加えた。昨年訪問させていただいた仮設住宅の区長である松坂氏も「震災から 2 年半、これまでは生きるのに必死だったが、これからはどう生きるかが課題になると思う。[2]」とおっしゃっておられたが、今回は「事後の危機管理（立て直す）」について仮設住宅居住者の声をもとに、避難所生活や仮設住宅における人と人のつながりや、児童生徒の果たしうる役割について考察する。アメリカのノンフィクション作家であるレベッカ・ソルニットはその著書『災害ユートピア』の中で、「大惨事に直面すると、人間は利己的になり、パニックに陥り、退行現象が起きて野蛮になるという一般的なイメージがあるが、それは真実とはほど遠い。」「地震、爆撃、大風などの直後には緊迫した状況の中でも誰もが利他的になり、自身や身内のみならず隣人や見も知らぬ人々に対してさえ、まず思いやりを示す。[3]」そして災害は、「人々とつながりたい、何かに参加したい、人の役に立ち、目的のために邁進したいというわたしたちの欲求がいかに深いものであるかを見せつけてくれる。[4]」と述べている。本書の帯には「大爆発、大地震、大洪水、巨大なテローいつもそこにはユートピアが出現した」と記されているが、このユートピア運営の一部に児童生徒を位置づけたい。それは災害発生時のための備えというよりも、ユートピア的な活動を体験することを通して、「人々とつながりたい、何かに参加したい、人の役に立ち、目的のために邁進したい」という自己の欲求を発見することが、日常的な持続可能な社会の実現への参加意欲になると考えるからである。

２．陸前高田市の復興計画

陸前高田市では、平成 23 年 12 月に復興計画を策定している。そこでは「災害に強い安全なまち」「快適で魅力あるまち」「市民の暮らしが安定したまち」「活力あふれるまち」「環境にやさしいまち」「協働で築くまち」という 6 つの基本方向のもと、11 の重点計画が推進されている。そして「いのちを守るまちづくり」を最優先に、重点計画の基盤となっているのが、最大 12.5 メートルの海岸保全施設の整備と新市街地の形成である。

今回、陸前高田市を訪問して、まず目についたのが巨大なベルトコンベアである。現在、被災市街地復興土地区画整理事業が高田地区（192.4ha）、今泉地区（124.3ha）において行われている。今泉地区にある高さ 120 メートルほどの山を 40 メートルの高さになるよう削り取っていき、そこに新しくコンパクトな住宅地を開発する。また、削り取りによって排出された膨大な量の土や岩を、ベルトコンベアで元の市街地に運び、市街地も高さ 9～11 メートルまでかさ上げして、新たに商業エリアとする計画である。

林立する巨大ベルトコンベア

さらに防災集団移転促進事業として、長部地区（113 戸）、矢作・竹駒・高田・今泉地区（118 戸）、米崎地区（133 戸）、小友地区（56 戸）、広田地区（136 戸）を対象に進められている。この高台移転については、前例がある。2004 年 10 月 23 日に新潟県中越地方を震源に発生した新潟県中越地震では、12 万棟の家屋が土砂に巻き込まれ、水害のために損壊したが、2007 年度までに 15 集落の住民が国の防災集団移転促進事業に基づき、高台へ集団で移り住んだ。集団移転が比較的スムーズに進んだ理由として 3 つあげられている。

一つ目が家の近くに安全な土地を確保できたこと、二つ目に集落自体が血縁・地縁でつながり、コミュニティが強いこと、三つ目が仮設住宅などでの避難生活の時から集落単位で行動していたことである。これらは 1995 年に発生した阪神淡路大震災では仮設住宅の入居をくじ引きで決めたため、地域コミュニティの分断が問題になったことを教訓としたものだ[5]。

陸前高田市においても、昨年度の聞き取り調査において、「仮設住宅が造られ始めた当初、高齢者や体が不自由な方を優先的に入居させたが、これは失敗だった。高齢者や体が不自由な方は引きこもりがちであり、新しい人間関係をつくることを苦手とする方が多い。そのため仮設住宅での孤独が問題になっている。後で仮設住宅に入居された方々は、元々住んでおられたコミュニティごと入居されているので、入居後も人間関係が保たれ、仮設住宅内の集会室で編み物などの教室を開いたり、協力して畑作りを始めたりといった活動が展開されている[6]」ことを報告したが、高台への移転についても、地域コミュニティを維持した移転が求められるであろう。

３．高田東中学校仮設住宅での聞き取り調査から

9 月 10 日に高田東中学校仮設住宅集会所訪問し、集

まってくださった 10 名の方々から 2 時間にわたってお話を聞かせていただくことができた。お話の内容は多岐にわたるものであったが、その概要を被災時の様子、避難所でのこと、仮設住宅でのことに分類して以下に記す。

（1）被災時の様子

- 大震災の二日前にも大きな地震があったが、その時は津波は来なかった。だから逃げ遅れた人が多かったのかもしれない。
- 高校生の時に体験したチリ津波とは全く違い、覆いかぶさってくるようだった。エネルギーの大きさがまったく違った。30 年以内に 80%の確率で地震が来ると言われていたが、ここまで大きな津波が来るとは、誰も思ってもみなかった。
- 父親から、地震の大きさじゃない、長さだ、長く揺れたときには津波が来ると言われていた。だから、大きい津波が来ると直感した。沿岸部の人たちは、地震があると津波が来ると、昔から聞いていた。
- 水だけでなく、家の壊れたのや瓦礫が一緒に流れてくるので、助けることができなかった。年寄りをどうして助けられるかは大きな課題だと感じる。
- 助けることができず、目の前で流れていった人の顔が浮かんで、夜、眠れなかった。
- 高田松原の松が、津波に飲み込まれ、ボキンボキンと折れていくのが見えた。そのとき高田松原の松は赤松だったんだとわかったくらい、真っ赤で美しかったのが、悲しかった。
- 防災無線は停電になったので、役に立たなかった。素早い伝達方法をどうするかは課題だ。
- 防災対策の拠点施設も被災した。68 か所ある第一次避難所のうち 41 か所が被災した。26 か所ある第二次避難所も 10 か所が被災した。避難所で亡くなった人が 400 人くらいいた。マニュアルではなく、自分で判断して行動しなくてはならない。
- 何が何でも逃げなさい。１メートルでも２メートルでも高いところに逃げないさいと伝えたい。全国の人が、今回のことを教訓にしてほしい。

（2）避難所でのこと

- 電気も水道もとまっていた。トイレはバケツに水をくんで流すしかなかった。児童生徒が、バケツで水汲みをしてくれた。
- クロワッサンを一人一個、米を一人一合支給された。３時間も並んだ。物資はあるが、配布がうまくいってなかった。
- 情報がなくて困った。誰が生きているのか、どこの避難所にいるのかわからなかった。
- 避難の際に肉親の手を放してしまって、心理的なダメージを受けている方も多くいた。
- 助かった家から、米があるところは米を持ってきて、味噌があるところは味噌を持ってきて、木材は流れてきたものを使って、炊き出しをした。そして、子どもや高齢者から先に食べさせた。
- 小中学校の野外活動では、飯盒炊爨をやっておいた方がいい。一斗缶を炉にすると、ご飯を炊くことができる。

（3）仮設住宅でのこと

- この仮設住宅では自殺はない。
- 月曜日から金曜日まで、75 歳以上の方を対象にお茶を飲んで話し語りをするという、デイサロンをしている。
- 年齢に関係なく、毎週水曜日にお茶っこ飲み会をして、話し語りしている。
- 年に１回は仮設文化祭をしている。
- 仮設で歌の練習をして、合唱団もつづいている。夜には火の用心、朝はラジオ体操、そのあとには子どもたちの見守り、みんなで野菜作り、金曜日の夜には、居酒屋もやっている。月一回はベテランズクラブで飲み食いをしている。麻雀の学校もある。すごく行事がある。全部出たら忙しい。でもそれがみんなの元気のもとになっている。
- マスコミがここの仮設には笑顔がいっぱいあるということで取材に来た。みんなにこにこしている。仮設に来てからの方が、友達も増えた。
- ここから自立していった人が、かえってさみしいと言っている。わざわざ遊びに来る人もいる。
- 会った人には必ずあいさつしている。そうすればいつか必ず返事がもらえる。そこから人づきあいが始まっていく。

以上の聞き取り調査を通じて、これからの防災教育に必要な視点について、次の３点から考察する。第１に必要な支援、第２に参加の重要性、第３が互いを尊重することである。

第１の必要な支援についてである。文部科学省が作成した「学校防災マニュアル（地震・津波災害）作成の手引き」が学校における地震防災のフローチャートには、事前の危機管理（備える）と発生時の危機管理（命を守る）、事後の危機管理（立て直す）の３つに分類して、それぞれの重要性が述べられている。今回行った聞き取り調査においても、「被災時の様子」の中で、「１メートルでも２メートルでも高いところに逃げないさい」「マニュアルではなく、自分で判断して行動しなくてはならない。」といった、大震災津波を教訓とした発生時の危機管理についてのお話があった。これまでの防災教育では、避難訓練からの発展として、避難持ち出し袋の準備、家族との連絡方法の備えといった、事前の危機管理や発生時の危機管理に重点が置かれて

おり、多くの学校で危機管理マニュアルも作成されている。

一方、事後の危機管理については、例えば学校が避難場所に指定されていることから、教員に求められる役割などについての研修は行われているだろう。しかし、避難される人数に対して教員の人数は限られており、充分な対応は出来かねる。そこで本稿においては、事後の危機管理として、避難所生活における児童生徒の役割を含んだ防災教育を提案する。高田東中学校仮設住宅の方々は、避難所で困ったこととして、次の４つを挙げられている。

① トイレ用の水の運搬
② 支援物資の配布時の混乱
③ 生存者に関する情報の混乱と少なさ
④ 炊き出しの手伝い

これらのことは、児童生徒でも十分に手伝うことができる内容である。実際に①トイレ用の水の運搬については、ペットボトルを使って水を運搬した児童生徒のことに言及されている。他の避難所では、また他の困難もあったかもしれない。そういった事実を抽出し、今後の学校での防災教育に生かすことは重要であろう。

第２の参加の重要性についてである。仮設住宅での暮らしについて、高田東中学校仮設住宅では、数多くのイベントが企画され、継続されている。これらを企画・運営する理由として、高田東中学校仮設住宅自治会長の金野廣悦氏は、「毎日目標をもって生きることが大切だと思う。目標のない人は引きこもったり、自殺になったりする。そうならないようにするにはどうしたらいいだろうかと、みんなで相談して始めたのが文化祭だ。」とおっしゃっておられるが、そのご苦労は並大抵なものではないだろう。しかし、それに積極的に参加する住民の構えも重要である。そのことについて金野氏の「こういう訪問も、毎日のようにある。そのたびに皆さんに案内しているが、断る人はいない。苦情もない。それが本当にありがたいと思っている。」との声からわかるように、参加するという住民の「支え」が、継続の鍵となっていることがわかる。

第３の互いを尊重することについてである。仮設住宅での暮らしについて、金野氏の「素晴らしい人たちがいっぱいいて、みんなが守られている。本当にすごいことだと思う。」「ここに来たときは不安いっぱいだった。でも、ここでの経験から住めば都だなあと思っている。」という発言があったときに、すぐに他の方々から「リーダーがいるからですよ。」「ここの土台をつくったのは会長だ。」という声が出たことからもわかるように、高田東中学校仮設住宅では、互いが互いを尊重し、みんなで協力して困難を乗り越えようとしていることが、インタビューの言葉の端々からうかがうことができた。今回の災害で、大きな借金をしたり、将来に不安を抱えたりしている人たちが、互いのつながりを大切に生きておられる姿に心を打たれた。

ドイツの社会心理学者であるフロムが、「「ある」「分かち合い」「与え」「犠牲を払う」傾向であって，その強さの根拠は，人間存在の独特の条件と，他人と一体になることによって孤立を克服しようとする生来の要求にある。[7]」と指摘するように、このような互いを尊重する人と人のつながりを希求し、それに参加したいと思うことは、本来的に人に備わったものであろう。

事後の危機管理に焦点を当てた防災教育を通して、人間本来の要求を自覚させ、災害時だけでなく、平常時においても利他的行為に積極的に取り組む児童生徒を育成することが、持続可能な社会づくりの担い手を育むことでもあると考え、次の指導計画を作成した。

４．事後の危機管理に焦点を当てた防災教育活動案

本活動案は、小学校最高学年である６年生を対象として、総合的な学習の時間の学習として作成した。中学校においても、また小学校の下学年においても、発達段階を考慮した工夫を行うことで本活動案が活用できると考える。

（1）単元名
避難所での生活から自分について考える

（2）単元の目標
- 避難所宿泊生活疑似体験を通して、人と人とのつながりに関心をもつ。
- 避難所宿泊生活疑似体験を通して、自分たちにできることを考え、日常生活に活用できる「ユートピア宣言」を出す。
- 避難所宿泊生活疑似体験での参加者のコメントを分類し、共通点を見いだすことができる。
- 避難所宿泊生活疑似体験を通して、人と人との温かいつながりの大切さを理解する。

（3）評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
避難所生活に関心をもち、自分たちにできることに意欲的に取り組もうとしている。	避難所宿泊生活疑似体験を通して、人と人とのつながりにおける自分たちにできることを考える。	避難所宿泊生活疑似体験を通して得た参加者からのコメントを分類・整理できる。	日常生活における、人と人とのつながりの大切さを理解する。

（4）単元展開の概要（全12時間）

主な学習活動（時間）	学習への支援	◇評価と〇備考
1．学習課題をつくる。（1）	・被災地で手伝う子どもの写真を見せ、防災に対する関心を高める。	◇避難所生活に関心をもち、自分たちにできることに意欲的に取り組もうとしている。（関・意・態）
避難所で自分たちにできることは何だろう。		
2．避難所生活で自分たちにできることについて考える。（2）	・グループごとにKJ法を用いて考えさせる。	◇避難所宿泊生活疑似体験を通して、人と人とのつながりにおける自分たちにできることを考える。（思・判・表）
3．避難所宿泊生活疑似体験を行う。（6） ・水運び、炊き出し手伝い、名簿作成連絡、話し相手　等	・保護者、地域の方に協力を依頼する。	◇避難所宿泊生活疑似体験を通して、人と人とのつながりにおける自分たちにできることを考える。（思・判・表）
4．疑似体験での経験や参加者からのコメントをもとに、人と人とのつながりについて考える。（2）	・避難所生活だけでなく、日常にも目を向けることができるように声かけをする。	◇避難所宿泊生活疑似体験を通して得た参加者からのコメントを分類・整理できる。（技）
5．ESDサミットを開き、「ユートピア宣言」を出す。（1）	・全校児童、保護者、地域の方を招待する。	◇日常生活における、人と人とのつながりの大切さを理解する。（知・理）

5．まとめ

これまでの防災教育は、災害発生を念頭に置いた備えや対応が中心であった。しかし、今回のインタビューを通して感じたことは、日頃の人と人のつながりの大切さや、人への信頼、互いを尊重する態度の重要性であった。これらは、災害発生時の互いの助け合い、避難直後の被災者救済、そしてインタビューに対する「仮設に来てからの方が、友達も増えた。」の声に見られるように、避難所や仮設住宅での協力的で前向きな生き方の基盤となっているということである。そしてこれが大震災の教訓として、児童生徒にぜひ学ばせたいことである。避難所宿泊生活疑似体験における地域住民とのふれあいを通して、自己もそれを欲していることに気付かせ、日常的な利他的行為を促進する。このことこそが、ソフト面での防災対策でもあるし、持続可能な地域社会づくりへの一歩になるのではないかと考える。

注

1）文部科学省『学校防災マニュアル（地震・津波）作成の手引き』、平成24年、ｐ.4

2）中澤静男・土海稚奈・英優美・二階堂泰樹、「陸前高田市文化遺産調査におけるＥＳＤ教材開発（3）」『教育実践開発研究センター研究紀要』23巻、奈良教育大学教育実践開発研究センター、2014、p.165

3）レベッカ・ソルニット『災害ユートピア』亜紀書房、2010、ｐ.10

4）同上、ｐ.428

5）毎日新聞大阪版、「「地域」維持し再建」13 版、2014.10.23、ｐ.3

6）前掲、中澤静男他、ｐ.165

7）Erich　Fromm『生きるということ』紀ノ國屋書店、1977、ｐ.148

（出典：『次世代教員養成センター研究紀要第 1 号』奈良教育大学次世代教員養成センター、2015年3月、pp.279-283）

地の木肌にこだわり、実人的でやや土臭い面貌表現には、奈良・松尾寺十一面観音菩薩立像［南北朝時代・北朝延文五年（一三六〇）、南朝正平一七年（一三六二）在銘、行成作。以下松尾寺像と略称］や奈良・般若寺十一面観音菩薩立像［室町時代・文明一四年（一四八二）在銘、尊弘・学専作。以下般若寺像と略称］等との一定の類似が認められ、奈良の地で古代の請来檀像などに学びつつ南北朝～室町時代の時代相も摂取したこれらの仏師［松尾寺像の作者行成は、文和二年（一三五三）に奈良・金峯山寺薬師如来坐像を南都興福寺大仏師康成が造立するにあたっての助作者。般若寺像の作者尊弘・学専は「大仏師南都住僧」と名乗っている］と常膳寺諸像や向堂観音堂像・黒崎神社懸仏の作者との間にはある関連を認めてよいのかもしれないが、なお慎重な検討を要する。また、特に黒崎神社懸仏十一面像本体の大衣をつける衣制や法衣垂下の形式には、室町時代の東国において近畿圏と並ぶ文化波及力をもった鎌倉の造仏との関連を見出すことが出来るのかもしれない。先行する東北地方での造仏が常膳寺諸像や向堂観音堂像・黒崎神社懸仏に及ぼした影響についても、今後の検討課題となろう。

平成二十六年度調査に際しても、廃東岸寺を管理する沙田カホ子氏、学術調査を支援する会世話人及川征喜氏、松坂泰盛氏をはじめとする陸前高田市の方々に数々のご高配を賜った。また本稿は平成二十六年度奈良教育大学「学ぶ喜び」プロジェクト　陸前高田市文化遺産調査団（加藤久雄副学長・教授、山岸、中澤静男講師、大学院生沼田萌生氏、島俊彦氏、竹田隼也氏、学部学生横井まどか氏）による調査成果の一部である。関係各位に対して深甚の謝意を表したい。

参考文献（抄）

・陸前高田市史編集委員会編『陸前高田市史』第一～第十二巻　（平成三年三月～平成十四年三月、陸前高田市）
・奈良教育大学「岩手県陸前高田市常膳寺仏像調査報告書」（『平成二十四年度　奈良教育大学「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト報告書』所収、平成二十五年三月、奈良教育大学）
・奈良教育大学「岩手県気仙郡住田町向堂観音堂仏像調査報告書」（『平成二十五年度　奈良教育大学　地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト報告書』所収、平成二十六年三月、奈良教育大学）
・入間田宣夫編『葛西氏の研究　第二期　関東武士研究叢書３』（平成十年六月、名著出版）
・奈良国立博物館編『室町時代仏像彫刻　在銘作品による』（昭和四十五年三月、奈良国立博物館）
・清水真澄・林宏一・山田泰弘「宋風彫刻再考」上・中・下（『佛教芸術』一二一・一二三・一二六号所収。昭和五十三年～五十四年）

であって、願主賢春や大旦（檀）那源綱継の注文により懸仏を造ったものの、周縁の意匠には仏像の装飾意匠を応用したのではないか、との推論が導かれる。この想定を補強するのが、黒崎神社・廃東岸寺とも程近い、陸前高田市小友町常膳寺観音堂本尊十一面観音菩薩立像（以下常膳寺十一面像と略称）胸飾の列弁文・紐・珠繋・紐・列弁文の意匠と、黒崎神社懸仏鏡板周縁の紐・珠繋・紐・列弁文の意匠との酷似である。また、黒崎神社懸仏十一面観音菩薩坐像（黒崎神社懸仏十一面像と略称）本体に、全体の輪郭が波形を呈し中央に花飾りのある胸飾が共木彫出されることは、常膳寺十一面像だけでなく、常膳寺不動明王立像（十一面像と同作とみられる。以下常膳寺不動像と略称）や、気仙郡住田町向堂観音堂十一面観音菩薩坐像（以下向堂観音堂像と略称）と共通している。また、黒崎神社懸仏十一面像本面の天冠台下地髪部の彫りや眼尻の二条の皺は、常膳寺十一面像頭上面の当該箇所と彫りの調子が似通っている。黒崎神社懸仏十一面像の本体材（七面が表される頭上面最下段上面を上端とする）上に寄せられていた別材（亡失）には、想像を逞しくすれば常膳寺十一面像や向堂観音堂像と同様、頂上仏面に上半身までが表現され、その肩以下に三ないし二面の頭上面が配されていたのかもしれない。

これらの特徴を共有する作例は常膳寺十一面像・不動像や向堂観音堂像が造立されたと目される室町時代にあっても稀であり、明応五年（一四九六）在銘の黒崎神社懸仏も同作となると、地理的な近さも勘案してこれら諸像は十五世紀後半を前後する頃に同一仏師または同一工房によって相次いで造られたと考えることができよう。平成二十五年度・二十六年度の本学の調査では、常膳寺十一面像・不動像に同寺の千手観音立像・毘沙門天立像を加えた常膳寺諸像四軀と向堂観音堂像について、室町時代を前後する頃の作と位置づけたのみで、二百年にも及ぶこの間の何時造られた仏像群か特定するすべを見出せなかったが、黒崎神社懸仏という基準を得て、これらの仏像を造立した仏師、造立させた願主・檀那層を歴史の文脈に沿って想定してゆくことが可能となった。『風土記御用書出』が黒崎神社懸仏の大檀那源綱継について、「葛西御家臣と相見得申候事」と記すように、鎌倉時代～室町時代の陸前高田市・住田町地域（旧陸奥国気仙郡）に宗主的な支配権を及ぼしていたのは葛西氏であり、これら一群の仏像造立の背景に、直接的な後援者は葛西氏に属する地元中小領主層であった可能性を留保しつつも、大局的に葛西氏の影響力を認める蓋然性は大きいといえよう。

十五世紀後半は、応仁・文明の乱（一四六七～一四七七）で京都が荒廃し、近畿各地での戦乱が長期化する中で、貴族・文化人の地方下向が枚挙にいとまなく、画僧雪舟（一四二〇～一五〇二／〇六）が山口を中心に活動するなど、地方の文化的比重が相対的に大きくなった時期であった。常膳寺諸像や向堂観音堂像・黒崎神社懸仏を制作した仏師ないし工房も、近畿圏から気仙地域に下向した可能性が考えられる。素

陸前高田市黒崎神社の十一面観音菩薩坐像懸仏と陸前高田市・住田町の十五世紀後半の仏像

奈良教育大学教授　山岸公基

平成二十六年九月の奈良教育大学陸前高田市文化遺産第四次調査では、陸前高田市黒崎神社所蔵の十一面観音菩薩坐像懸仏（以下黒崎神社懸仏と略称）を主な調査対象とした。黒崎神社懸仏は平成二十三年三月の東日本大震災による津波の難を逃れ、神仏分離まで黒崎神社の別当を務めた修験寺である廃東岸寺（陸前高田市広田町前花貝三六所在）に保管され、現存する。

黒崎神社懸仏は鏡板背面に室町時代・明応五年（一四九六）の銘記があり、金石文資料として早く江戸時代・安永六年（一七七七）の『風土記御用書出』にも一部著録されている［『神道大系　神社編二十七　陸奥国（下）』（昭和五十九年三月　神道大系編纂会）に抄出］。文化財（工芸）としては陸前高田市の文化財に指定されており、昭和五十七年には岩手県立博物館で展示される［参照：『岩手の懸仏展解説図録』、昭和五十七年六月、岩手県立博物館。『岩手の懸仏』、昭和五十九年三月、岩手県立博物館］など、稀少な岩手県所在の室町時代の在銘基準懸仏として注目を集めてきた。ただ、黒崎神社懸仏の特異性（A．木造であること。B．鏡板の下に短い柄がつくこと。C．鏡板周縁の、内側から紐・珠繋・紐・列弁文となる装飾意匠）については、議論が尽くされているとは言い難い。

A・Bに関連して、柄は長いが神奈川・浄楽寺の毘沙門天立像・不動明王立像［鎌倉時代・文治五年（一一八九）、運慶作］像内納入心月輪との概形の類似は注目され、黒崎神社懸仏の背面上部中央に種子（梵字キャ）を表わすのも浄楽寺心月輪との類似に挙げて差し支えないであろう。黒崎大明神御宝殿での一百日間の参籠に際して、経典と並んで陀羅尼・真言が勤行されたことを伝える銘記の内容自体、心月輪を仏像内に納入するという密教的意想と通底している。

Cは他の懸仏に類例を見出せない意匠であり、懸仏として稀な例に属する木造という品質（いっぽう平安時代以降の日本で仏像彫刻の大半は木造となることが知られている）や手慣れた木彫の手法も勘案すると、黒崎神社懸仏の作者は懸仏制作を専門とするのではなくむしろ仏師

保存状態

亡失部　頭上面最下段上面より上の材、冠繒、天蓋、鏡板上水瓶に挿した華、吊手。

銘記

鏡板背面墨書ならびに刻書

敬白　於于薄田郷黒崎大明神御宝殿
一百日之間　奉参籠勤行次第配
錫杖〈三百五十巻〉般若心経〈一千巻〉観音経〈五百五十巻〉
尊勝陀羅尼〈三百返〉光明真言〈十万返〉随求陀羅尼〈十万返〉
九字文〈一百万返〉諸神呪各〈十万返〉礼拝〈三千五百礼〉
（梵字キャ）　右意趣者〈奉為〉天長地久御願円満〈殊者〉
信心願主仰願依彼報恩現世安穏後生
善処無疑令守護給　如件
生年三十一歳
于時明應五年〈太才丙辰〉二月十八日　願　主　賢　春
大旦那　源綱継

岩座奥	一〇・四
総高（現状）	二七・六
鏡板及び柄総高	五〇・五（一尺六寸七分）
鏡板高	四九・五
鏡板張	四九・六
鏡板奥	三・四
鏡板奥（含獅噛）	四・八
柄高（最大）	四・〇
柄張	二三・二
柄奥（最大）	二・九

品質構造

広葉樹散孔材。サクラか。

本体、蓮華座、岩座を含み、木芯を像の右後方に去る竪一材より半肉に彫出する。両手先まで共木である。

ただし、像本体材上端は頭上面最下段の上面までで、上面は幅六・〇cm、奥四・八cmの楕円形平面をなし、径〇・四cmの円孔二が穿たれる。これより上部は別材矧ぎであった痕跡であるとみられる。

また、両手は拳を握り、第二指側から第五指側に至る円形貫通孔がある。左手分は貫通孔の第五指側から球状に刳り込まれ、華瓶もしくは水瓶をとったか。右手分は貫通孔の径が〇・三～〇・四cmとほぼ一定であり、右膝上に持物円孔を伴う。長谷式十一面の持物である錫杖を執ったか。

鏡板および柄は一材製で、木芯を後方中央はるか遠くに去る厚み一寸強の板目板を用いている。この鏡板に像本体と天蓋（亡失。もと左右一ずつ雇釘並びに漆で接合する。水瓶左右各一（上面に径〇・三cmの別材を挿した跡。もと華瓶か。水瓶、獅噛各別材製）

当初は獅噛部鏡板側面に鉄製の吊手（三・五cmの間隔を設ける）を設けていた。

像表面は素地を呈し、上半身肉身中央に竪に梵字数字を書く。鏡板表面に陰刻された光背輪郭に沿って墨描が認められる。

十一面観音菩薩坐像懸仏

木造　一面　鏡板径四九・五cm（一尺六寸三分）

岩手県陸前高田市広田町字黒崎

黒崎神社

法量（単位cm）

本体

像高（現状）	二〇・五（六寸八分）
髪際高	一六・三（五寸四分）
頂―顎（現状）	九・七
面長	五・五
面幅	五・二
耳張	七・二
面奥（現状）	六・四
胸奥	五・五
腹奥	七・〇
肘張	一一・八
坐奥	八・九
膝張	一〇・八
袖張	一五・〇
蓮肉高	三・〇
蓮肉張	一三・三
岩座高	八・九
岩座張	一六・七

黒崎神社　十一面観音菩薩坐像懸仏　背面

黒崎神社　十一面観音菩薩坐像懸仏　鏡板周縁の紐・珠繋・紐・列弁文となる意匠

常膳寺　十一面観音菩薩立像　胸飾の列弁文・紐・珠繋・紐・列弁文となる意匠

常膳寺　十一面観音菩薩立像　胸飾

黒崎神社　十一面観音菩薩坐像懸仏　本体胸飾

常膳寺　不動明王立像　胸飾

向堂観音堂　十一面観音菩薩坐像　胸飾

黒崎神社　十一面観音菩薩坐像懸仏　本体正面（左写真）・本体左斜側面（右写真）

黒崎神社　十一面観音菩薩坐像懸仏　頭部正面（左写真）・頭部右斜側面（右写真）

黒崎神社　十一面観音菩薩坐像懸仏　正面

岩手県陸前高田市黒崎神社
懸仏調査報告書

2015 年 3 月

奈良教育大学

中尊胎蔵大日如来坐像が居高（＝像高）八尺であり、奈良・薬師寺金堂薬師三尊像のように坐高約八尺の中尊に立高約一丈の脇侍菩薩像が附属する典型例が存することからも、『叡岳要記』大講堂条の「立高一丈五寸」が真を伝えるものと思われる。常膳寺十一面像の像高一丈八寸三分もしくは一丈六寸七分は一丈五寸と誤差の範囲であり、常膳寺十一面像は現存しない延暦寺講堂像を意識して造立された蓋然性が大きいと考えられる。

奈良教育大学の陸前高田市文化遺産調査は東日本大震災被災地支援を目的として開始されたものであったが、かえって、かつて図像集にも収載され注目を集めながらその後天災・人災により失われた近畿地方所在の仏像彫刻のよすがを伝える作例を、東日本大震災で甚大な被害を蒙った気仙郡地域に見出す結果となった。旧気仙郡に隣接する釜石市・鵜住居観音堂十一面観音菩薩立像［永正七年（一五一〇）］も、頂上仏面に上半身が表現され常膳寺十一面像・向堂観音堂像の図像と通じており、今後悉皆調査の進展に伴い常膳寺十一面像・向堂観音堂像の影響下に制作された作例や、場合によっては手本とした平安時代前期彫刻それ自体が見出される可能性もないとはいえない。

平成二十五年度調査に際しても、金剛寺住職（常膳寺兼務住職）小林信雄師、浄福寺前住職（向堂観音堂管理）多田俊一氏、及川征喜氏、佐藤文雄氏、松坂泰盛氏、佐々木克孝氏、千葉英夫氏をはじめとする陸前高田市・住田町の方々に数々のご高配を賜った。また本稿は平成二十五年度奈良教育大学「学ぶ喜び」プロジェクト　陸前高田市文化遺産調査団（山岸、中澤静男講師、大学院生木谷智史氏、千々石喜一氏、土海稚奈氏、英優美氏、学部学生二階堂泰樹氏、横井まどか氏）による調査成果の一部である。関係各位に対して深甚の謝意を表したい。

参考文献（抄）

長岡龍作「山形宝積院十一面観音像をめぐって」（『美術史』第一二一冊所収、昭和六十二年一月）
川村知行「東大寺二月堂小観音の儀礼と図像」（『南都仏教』第五二号所収、昭和五十九年六月）
川村知行「寛信の類秘抄と類聚抄―覚禅抄の引用をめぐって―」（『密教図像』第三号所収、昭和五十九年十二月）
奈良教育大学「岩手県陸前高田市常膳寺仏像調査報告書」（『平成二十四年度　奈良教育大学「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト報告書』所収、平成二十五年三月、奈良教育大学）

平成二十四年度の奈良教育大学陸前高田市文化遺産調査（第一次・第二次）における主要な調査対象であった常膳寺観音堂本尊十一面観音菩薩立像［木造　素地　像高三二五・〇cm（三〇cm＝一尺とした場合一丈八寸三分、三〇・三cm＝一尺とした場合は一丈六寸七分）、以下常膳寺十一面像と略称］と向堂観音堂像との間には、法量や立・坐の体勢の違いがあるにもかかわらず顕著な形式面での類似が認められる。すなわち、中央花飾りから左右に唐草が展開する天冠台、全体の輪郭が波型を呈し中央に花飾りのある胸飾、基本帯が紐―珠繋―紐となり、布帛の副帯をつける臂釧（向堂観音堂像の臂釧は、常膳寺十一面像と同作とみられる同寺不動明王立像のそれととりわけ酷似する）、以上がすべて共木彫出されること等である。これらの特徴は同時代の仏像彫刻中にあってきわめて稀であり、常膳寺十一面像と向堂観音堂像とは、同一工房もしくは同一仏師、あるいはそれに准じるような相近い環境のもと制作されたと考えて大過ないであろう。

ところで常膳寺十一面像と向堂観音堂像の図像的性格を考えるうえで、檀像を意識して素地を基本とする表面仕上げとならんで、頂上仏面に拱手する上半身が表現されるという特異な共通点を見逃すことはできない（常膳寺十一面像頂上仏面正面下部の山形の立上りは、向堂観音堂像の精査を経て拱手であることが確定的となった）。円仁（慈覚大師。七九四～八六四。下野国出身の天台宗僧で、入唐八家の一人。第三代天台座主）請来とみられる延暦寺前唐院十一面観音菩薩像（檀像。現存しない）の頂上仏面に合掌する上半身が表現されていたこと（『行林抄』・『阿娑縛抄』による）、延暦寺講堂十一面観音菩薩立像（中尊胎蔵大日如来坐像の脇侍。以下延暦寺講堂像と略称）の頂上仏面に拱手する上半身（もしくは全身）が表現されていたこと（『類秘抄』・『覚禅抄』、特に高野山西南院本『覚禅抄』図像）、現に東北地方に山形・宝積院十一面観音菩薩立像のように頂上仏面に上半身が表される九世紀彫刻の実例が遺されていることから、常膳寺十一面像と向堂観音堂像は、円仁開創伝承に託されるような東北地方（もしくは東国）への天台宗の広布を背景に造立されたと推定することが可能になった。常膳寺十一面像・向堂観音堂像ともに、気仙郡地域における中世・近世間の有力者層の交代等の事情により制作当時や中世に遡る古記録を伝えていないが、江戸時代中期［宝暦十一年（一七六一）］の相原友直『気仙風土草』が、常膳寺について「真言宗。（中略）今泉金剛寺門中。」と現在の宗旨や兼務関係と同様に記すにもかかわらず、常膳寺観音堂については今日一般に流布する坂上田村麻呂創立伝承と並んで、十一面像の作者に関する一説に「慈覚の作」、向堂観音堂像の作者についても「慈覚作」と記載することは、何らかの古伝を反映するものと理解されよう。

古像の遺されていない延暦寺講堂像の法量については、一尺五寸とする『山門堂舎記』や一丈五尺とする『三塔諸寺縁起』の記載もあるが、

陸前高田市・常膳寺と住田町向堂観音堂の十一面観音菩薩像

奈良教育大学教授　山岸公基

平成二十五年八月の奈良教育大学陸前高田市文化遺産第三次調査では、陸前高田市の隣町、気仙郡住田町向堂観音堂の十一面観音菩薩坐像（以下向堂観音堂像と略称）を主な調査対象とした。（他に陸前高田市小友町常膳寺の千手観音菩薩立像、薬師如来立像、阿弥陀如来坐像の追調査を実施した。）

向堂観音堂像は像高二九・八cm（三〇・三cm＝一尺とした場合九寸八分）、髪際高二〇・〇cm（同上の換算で六寸六分）、台座天板底面に元禄九年（一六九六）の墨書銘があり、台座の作者（京大佛師四條通長兵衛）および施主（松田市郎左衛門尉義廣）の名が知られる。当時の気仙郡が仙台（伊達）藩領であることから「従四位中将／松平陸奥守綱村公（＝仙台藩第四代藩主伊達綱村、一六五九～一七一九）御治世」と記されるのであろうが、膨大な近世の仏像彫刻のすべてに当時の藩主名が銘記されるわけではなくこれは稀少な例であり、常膳寺阿弥陀如来坐像銘記［元禄十年（一六九七）］の「伊達氏四位／松平陸奥守／綱村持（＝時か）代」と年代・地域・書式ともに近いことが注目される。なお向堂観音堂像には、当初の本体・台座の緊結に関わるとみられる枘穴が頭体幹部材像底に一、両脚部前半材像底に二あるが、台座天板にはこれに対応する枘穴がなく、台座作者が本体を造ったのではないこと、本体は元禄九年（一六九六）以前に遡る造像であることが明らかである。

向堂観音堂像は、頭体幹部が両腕肘まで、両腰脇三角部と両脚部後半まで、及び右天衣遊離部、左右天衣垂下部の遊離する部分までを含む竪一材より彫出される一木造で、基本的に素地とされる表面仕上げも合せ、平安時代前期（八世紀末～九世紀）彫刻、とりわけ素地とされるのが一般的な檀像風彫刻と通う風が認められる。天冠台や胸飾、臂釧を共木で鏤刻するのも檀像風彫刻に例が多い。ただし向堂観音堂像の、目の見開きが小さく口を引き結んだ面貌には、たとえば大阪・千手寺千手観音菩薩像［南北朝時代、南朝延文二年・北朝正平十二年（一三五七）銘、康成作］との間に一定の類似を認めることができ、南北朝～室町時代（一四～一五世紀）に平安時代前期彫刻に倣って制作されたと考えるのが妥当であろう。

長兵衛

従四位中将

松平陸奥守綱村公御治世

秋七月廿日

施主氣仙郡世田米村中澤

松田市郎左衛門尉義廣

光背嵌入鏡背陽鋳

藤原光重

備考

一、実査　平成二十五年八月二十八日(山岸公基・中澤静男・木谷智史・千々石喜一・土海稚奈・英優美・二階堂泰樹・横井まどか)

品質構造

針葉樹。目がよくつまる。材色が黄色味を帯びる。カヤか。

頭体幹部は、髻頂よりやや（一・八cm）下から像底に至るまで、両腕肘まで、両腰脇三角部と両脚部後半まで、及び右天衣遊離部、左右天衣垂下部の遊離する部分までを含んで、木心を像の後方遠くに去る竪一材より彫出し、内刳を施さない。（右体側部と右腕間、両前膊と両脚部との間を、トンネル状に刳り透かす。）

この頭体幹部材に、頂上仏上半身（高さ八・三cm。周囲に上段頭上面四を矧ぐ。仏面三道第二条より上を矧ぐ。頭体幹部とは丸雇枘で緊結する。）、髻頂、地髪部上頭上面（七面）、天冠台及び臂釧花飾り突出部、天冠台正面飾りの上方突出部、両手首先、両脚部前半、裳先を各矧ぐ。白毫別材製。現在胸飾の天衣と接する部分に環状の金具が遺り、左にも環状金具を差した痕跡がある。別材製瓔珞を懸けたか。

像表面は、当初より素地または素地色彩色とされたとみられる。

像底に、頭体幹部材に一、両脚部前半材に二の丸枘穴がある。当初の本体・台座の緊結に関わるとみられる。

保存状態

後補部　上段頭上面のうち右二面、下段頭上面のうち左端一面及び中央一面。光背（木造漆箔）。台座（木造漆箔）。

亡失部　白毫、裳先、両手持物。天冠台及び臂釧の花飾り部。天衣垂下部より腰布から地付に至る部分。

銘記

台座天板底面墨書

作者　京大佛師

岩元禄九年丙子歳　四條通

十一面観音菩薩坐像

木造　一軀　像高二九・八cm

法量（単位cm）

本体

像高	二九・八（九寸八分）
髪際高	二〇・〇（六寸六分）
頂―顎	一六・〇
面長	五・七
面幅	五・七
耳張	七・三
面奥	七・八
肘張	一四・八
坐奥	一四・六
膝張	一九・九
膝高（左）	四・三
（右）	四・四
台座高	二〇・〇
光背高（現状）	三九・二
厨子高	七五・五

岩手県気仙郡住田町世田米字川向

向堂観音堂

向堂観音堂　十一面観音菩薩坐像　像底（左写真）・頭頂（右写真）

向堂観音堂　十一面観音菩薩坐像　台座天板底面墨書（左写真）・光背および台座（右写真）

向堂観音堂　十一面観音菩薩坐像　頭部右斜側面（左写真）・頭部正面（右写真）

向堂観音堂　十一面観音菩薩坐像　頭部右側面（左写真）・頭部左側面（右写真）

向堂観音堂　十一面観音菩薩坐像　全身右側面（左写真）・全身左側面（右写真）

向堂観音堂　十一面観音菩薩坐像　全身背面（左写真）・全身左斜側面（右写真）

向堂観音堂　十一面観音菩薩坐像　全身正面

岩手県気仙郡住田町向堂観音堂
仏像調査報告書

2014 年 3 月

奈良教育大学

上面のうち正面中央のそれは鎌倉時代の作かとみられる。ただ四軀を通じてやや形式化への傾きが認められること、また今後詳細な検討を要するが同じ三陸地方所在の宮城・旧牡鹿町保管十一面観音菩薩立像（榧かと思われる針葉樹を用いた木造、素地。像高二八八・〇㎝、室町時代の作とされ、国指定重要文化財)と、用材や作風に一定の類似があり、室町～安土桃山時代の作と考えるのが妥当であろう。

阿弥陀如来坐像

ファイバースコープ調査により面部内銘記の存在が明らかとなり、元禄十年（一六九七）五月、仏師佐々木安路一遍居士の作であることが明らかとなった。作者の知られる十七世紀の基準作として、同時期の仏像を考えるうえで指標となる作例である。また銘記中に「伊達氏四位／松平陸奥守／綱村持（＝時か）代」と当時現前高田市域が属していた仙台藩の第四代藩主伊達綱村（一六五九～一七一九）の名が記されることはきわめて珍しい。元禄十年五月には伊達綱村は江戸に在府しており本像の制作に直接関与した形跡は認めがたいが、常膳寺と仙台藩との密接な関係を示す新出史料といえよう。当時「常善寺」の表記がなされていたことも知られる。なお、体部内銘記により大正四年（一九一五）に修理が行われたことも明らかとなった。相貌に土臭さと生々しさが混在するが、衣文表現、とりわけ垂下する両袖部のそれが迫真的で、左足を踏み下げる像容も当代の如来像として例が少なく、佐々木安路一遍居士の巧技が示されている。

薬師如来立像

ファイバースコープ調査により体部内前面・背板内面の銘記の存在が明らかとなり、その後背板がいったん外されて銘記の全貌が知られた。天保十三年（一八四二）、邑上牛彦（源）宜雅の作である。また本像の大願主「小友村肝煎／及川庄兵衛／莫信」は、天保十年（一八三九）～同十一年にかけて、鎖国の幕藩体制下にあって異国に漂着した事例として知られる中吉丸の船主である。中吉丸漂着事件直後に造立された本像は、同期のおそらくは在地仏師である邑上牛彦の作風を伝えるとともに、銘記の内容が豊かで新出の歴史資料としても注目される。

謝辞

二度の調査を通じて、金剛寺住職（常膳寺兼務住職）小林信雄師、及川征喜氏、佐藤文雄氏、松坂泰盛氏をはじめとする陸前高田の方々に数々のご高配を賜った。また本稿は奈良教育大学「学ぶ喜び」プロジェクト　陸前高田市文化遺産調査団（山岸、加藤久雄副学長・教授、中澤静男講師、大学院生宮武杏名氏、小松原絵里氏、新宮済氏、中澤哲也氏、学部学生古川真理奈氏、幸田早苗氏）による調査成果の一部である。関係各位に対し、深甚の謝意を表したい。

岩手県陸前高田市・常膳寺の仏像

奈良教育大学教授　山岸公基

はじめに

岩手県陸前高田市小友町常膳寺の仏像をめぐっては、平成二年一月の『仏像を旅する　東北線』（至文堂）に十一面観音菩薩立像に関する大矢邦宣氏の簡単な紹介があり、当時大学院生であった筆者も同年八月に簡略な調査の機会を得たことがあった。平成二十三年の東日本大震災での陸前高田の惨状が報じられるにつけ、人的被害の大きさに心を痛めるとともに、常膳寺の仏像が震災を経てどのような現状にあるか懸念していた。平成二十四年に及川征喜氏より常膳寺諸像の調査依頼を受け、本学「学ぶ喜び」プロジェクトの一環として六月と九月との二度にわたり調査を実施した成果を本報告書に盛っている。不幸中の幸い、仏像に震災による大きな被害は無かった。

常膳寺の仏像のうち十一面観音菩薩立像（観音堂本尊）・千手観音菩薩立像（観音堂前立尊）・不動明王立像（客殿本尊）・毘沙門天立像（観音堂西脇壇安置）・阿弥陀如来坐像（阿弥陀堂本尊）・薬師如来立像（観音堂東脇壇安置）の主要な六軀は、作風から十一面観音菩薩立像以下の四軀と阿弥陀如来坐像、薬師如来立像の三グループに分けられる。以下各グループの特色に触れたい。

十一面観音菩薩立像・千手観音菩薩立像・不動明王立像・毘沙門天立像

十一面観音菩薩立像と他の三軀とは法量に大差があり、垂直性の強い、前後矧の原材に規制された十一面観音菩薩立像の造形の異色さが際立つ。しかし、紐・珠繋・紐の基本帯外側に円形飾をつけ帯一条の副帯を渡す臂釧や、列弁文・紐二条・列弁文とする腕釧の制が十一面観音菩薩立像・千手観音菩薩立像・不動明王立像で、胸飾の波形の輪郭が十一面観音菩薩立像・不動明王立像で共通しており、材質・構造、及び耳孔の彫りなど細部が十一面観音菩薩立像や千手観音菩薩立像・不動明王立像で互いに近似し、また不動明王立像と毘沙門天立像とは保存状態に相違があるとはいえ法量や頭体の比例が似通うことから、同時期に共通の制作環境下に成ったとみられる。不動明王像と毘沙門天像とが観音の脇侍とされることは、比叡山横川根本観音堂（横川中堂）の例などを嚆矢として全国に類例が多い。

このうち十一面観音菩薩立像は差首の寄木造であるが、通常と異なり三道下縁で差すことにより頭体を共木のように見せており、平安時代の一木造ないし立木仏に倣う意図が看取される。より時代の風に敏感な千手観音菩薩立像は、垂直性の強い裙・腰布の布帛表現が鎌倉時代・貞応二年（一二二四）定慶作の京都・大報恩寺六観音像などに淵源しており、鎌倉時代彫刻を踏襲しようという意図が顕著で、特に地髪部頭

品質構造

本体

広葉樹環状孔材。センダンか。木造。素地。

伝来

一、常膳寺観音堂東脇壇に伝来した。

備考

一、　実査　平成二年八月(山岸公基)。平成二四年六月二十三日・二十四日(山岸公基・加藤久雄・中澤静男)。九月七日・八日(山岸公基・中澤静男・宮武杏名・小松原絵里・新宮済・中澤哲也・古川真理奈・幸田早苗)。

薬師如来立像

木造　素地　一軀　像高一〇〇㎝前後

銘記

体部前面墨書

小友村肝煎
大願主　及川庄兵衛
天下泰平國　家安康　莫信
奉造立藥師　如來尊像
于時天保十三　大佛師　邑上牛彦
丙寅八月日　宜雅作之

背板内面　墨書

点眼師　金剛寺　小友村肝煎
為大願主二呑祐道濟川居士　及川庄兵衛
法印阿春　安樂　法號　安躰妙延禅尼　莫信
天下泰平國家豊饒
奉造立薬師瑠理光如来尊像
大佛師
日月清明　願主并諸寄進信心之民子　生歳五十七才
時天保十三晨壬寅　家運長久延命専　邑上牛彦
秋九月吉旦　祈願所也　金輪良語居士　源　宜雅敬作之

岩手県陸前高田市小友町字上の坊二四　**常膳寺**

奉修覆阿彌陀如来尊像壱軀
當寺現住
法印英完代
職工　當村
小松平助師

法量(単位㎝)
本体
像高　四八・五(一尺六寸二分)

品質構造
本体
針葉樹。寄木造（頭体別材)。玉眼。素地。

伝来
一、常膳寺阿弥陀堂本尊として伝来した。

備考
一、実査　平成二年八月(山岸公基)。平成二四年六月二十三日・二十四日(山岸公基・加藤久雄・中澤静男)。九月七日・八日(山岸公基・中澤静男・宮武杏名・小松原絵里・新宮済・中澤哲也・古川真理奈・幸田早苗)。

阿弥陀如来坐像

木造　玉眼　素地　一軀　像高四八・五cm

岩手県陸前高田市小友町字上の坊二四　**常膳寺**

銘記

面部内　墨書

元禄　丁
仙・領　丑拾歳
佐々木　玉眼(亡)　氣仙郡小友

佛師　白毫　安路一遍居士俗名
伊達氏四位　綱村持代
松平陸奥守　五　玉眼(亡)　月良辰

溪當　常善寺

体部内　墨書

大正四乙卯歳参
願主鈴木喜作

頭部幹部を通し、木芯を像のほぼ中央を通る線に籠める。竪一材ないし、前後二材より彫出。前後の割目（または矧目）は両耳後ろ寄り、両体側、両足ふくらはぎを通る線。この頭体幹部材に、髻、両肩以下（左右とも肘・手首矧）、両沓先を各矧ぐ。持物別製。

保存状態

本体　像表面全面にわたって風化・ささくれ立ちが著しい。

備考

一、実査　平成二年八月(山岸公基)。平成二四年六月二十三日・二十四日(山岸公基・加藤久雄・中澤静男)。九月七日・八日(山岸公基・中澤静男・宮武杏名・小松原絵里・新宮済・中澤哲也・古川真理奈・幸田早苗)。

毘沙門天立像

木造　一軀　像高七二・三cm

法量(単位cm)

本体

像高	七二・三		
髪際高	六七・六		
髻頂―顎	二〇・〇	面長	一二・〇
面幅	一〇・〇	耳張	一四・五
面奥	一四・五	胸奥	十三・八
腹奥	十三・〇	腋張	十五・二
肘張	三三・五	裾張	三〇・二
足先開外	三三・五	足先開内	二六・五
邪鬼高	一五・三	邪鬼張	四三・五
邪鬼奥	二一・一	框座高	三・八

光背

高	八五・五

台座

框座高	三・八

品質構造

本体　針葉樹

岩手県陸前高田市小友町字上の坊二四　**常膳寺**

肘張　三二・三　裾張　三〇・三
足先開外　三〇・七　足先開内　二五・〇
台座
高（天板上面）二八・二

品質構造

本体　針葉樹　榧か。素地。割矧造または寄木造。素地。
頭体幹部を通し、木芯を像のほぼ中央を通る線に籠める竪一材ないし、前後二材より彫出。前後の割目（または矧目）は両耳後ろ、両体側、左足首を通る線。この頭体幹部材に、両肩以下（左右とも肘・手首矧）、両足先（右は体幹部材との間にマチ材をはさむ）を各矧ぐ。持物別製。

備考

一、実査　平成二年八月(山岸公基)。平成二四年六月二十三日・二十四日(山岸公基・加藤久雄・中澤静男)。九月七日・八日(山岸公基・中澤静男・宮武杏名・小松原絵里・新宮済・中澤哲也・古川真理奈・幸田早苗)。

不動明王立像

木造　一軀　像高七四・〇cm

岩手県陸前高田市小友町字上の坊二四　**常膳寺**

形状

もと頂蓮（または莎髻）をいただく（円孔径〇・八cmが遺存）。髪、髪際近くは巻髪（耳より前は毛筋彫、耳より後ろは疎彫）、背面髪際は筆先状。他は素髪。左耳前に弁髪を垂下。結上下二段。上段は長列弁・紐二条・長列弁、下段は上から細二条・反花（間弁付）。先端は筆先形。水波相は陽刻四条。眉を寄せ、鼻根にこぶ。右眼瞋目、左眼も瞋目でやや細める。鼻孔を凹ませる。口はへの字に結び、右下牙上出、左上牙下出。耳垂環状不貫。三道相をあらわす。条帛・裙・腰布を各つける。条帛は左肩から右脇腹にかけて懸け、一端は左胸上で上端から折り込み下端で環状を呈したのち鳩尾で上端より垂下。もう一端は背面左肩下りで垂下。裙は右脚前で右前に打合せ。正面ほぼ中央に舌状の折返し、腰布は一段折返し付。背面では折返しが反転する。胸飾・臂釧・腕釧・足釧を各つける。胸飾は概形波形。列弁文・紐一条・列弁文。正面中央に花飾。臂釧は基本帯紐・珠繋・紐。外側に花飾、副帯は帯一条でもと花飾から結びが出たか。

腕釧　列弁文、紐二条、列弁文。足釧　列弁文、紐二条。

右腕屈臂、右腹前で三鈷剣の柄を握る。左腕屈臂、左腰脇で掌を上に羂索を執る。頭をわずかに右に向け、両肩をそびやかし、腰を左にひねり、右足を踏み出して立つ。

法量(単位cm)

本体

像高	七四・〇		
髪際高	六九・八		
髻頂―顎	十四・八	面長	一〇・七
面幅	一〇・五	耳張	一四・三
面奥	一五・〇	胸奥	十三・八
腹奥	十五・八	腋張	十六・二

宝鉢手手首先、脇手のうち右後列上第一手、第二手の肘先、その他の脇手の一部、左脇手背面に懸かる天衣、天衣垂下部、上背部に打つ左右一個の壺金具、以上後補。

台座　後補。

備考

一、実査　平成二年八月(山岸公基)。平成二四年六月二十三日・二十四日(山岸公基・加藤久雄・中澤静男)。九月七日・八日(山岸公基・中澤静男・宮武杏名・小松原絵里・新宮済・中澤哲也・古川真理奈・幸田早苗)。

光背
高　二二三・五　最大張　一三一・〇
二重円相部高一四五・〇　頭光径　五一・五
身光張　六五・五　光脚高　二〇・〇
光脚張　六三・三
台座
高　五四・一

品質構造

本体

針葉樹。榧か。寄木造。素地。

頭体別材。頭部は両耳上を通る線で前後二材、別に後頭部に背板一材。体部は両肩前を通る線で前後二材（したがって前後矧ぎ目は両肩前で正面から見える）、後面材の肩から腰下にかけてさらに背板を矧ぐ。

両肩以下別材。現在合掌する手は肘、手首で矧ぐ。この手は古写真で同位置に構える手と同一かと見られるが、合掌する左右の手先を別材で造っており、現在掌間に開きがある。

合掌手と宝鉢手は共木の上膊部を前中後の三列にまとめて各一材を矧ぎ、それぞれに各臂の肘先を矧ぐ。脇手背面の天衣は左右分とも各左右二材を矧ぎ裾折返し部の突出部矧ぎ付け。両足先矧ぎ付け。

伝来

一、常膳寺観音堂前立尊として伝来した。

保存状態

本体　白毫亡失。

千手観音菩薩立像

木造　素地　一軀　像高一六三・〇cm

岩手県陸前高田市小友町字上の坊二四　**常膳寺**

形状

本体　髻頂に頭上面を表さない。髻周囲の環状の髪束に四面、地髪部に七面をあらわす（地髪部七面のうち正面中央一面のみ作風が異なり、古いか）。頭髪は束ね目入りの毛筋彫りとする。鬢髪二束が耳をわたる。天冠台は紐二条の上に列弁文、正面・両耳上でその上層に菊座をあらわす。白毫相をあらわす。現状五十二臂を数えるが、左右で臂数を異にしている。当初は四十二臂か。条帛・天衣を懸け、裙・腰布を着け、腰廻りに帯状の布を巻く。裙・腰布はいずれも右前に打ち合わせ、裙は上縁を折り返す（折り返し部は左前に打ち合わせ）。臂釧は紐・珠繋・紐で帯一条の副帯をわたす。腕釧は列弁・紐二条・列弁とする。両足をやや開いて直立する。

光背　二重円相光。頭光は中心に八葉蓮華をあらわす。圏帯は内縁、外縁とも紐・珠繋・紐を配し、無文。身光は中央を空とする。圏帯も内縁、外縁とも紐・珠繋・紐を配し、無文。光脚は仰蓮・反花・蕊から成り、仰蓮・反花は七弁（仰蓮は二重間弁付）とその間の蕊をあらわす。周縁部は概形連弁形、外縁圏帯が紐・珠繋・紐。内区は上半に雲、下半に唐草を配す。

台座　蓮華四重座（仰蓮・敷茄子・反花・框座）。

法量（単位cm）

本体

像高	一六三・〇（五尺三寸八分）		
髪際高	一四〇・五（四尺六寸四分）		
面長	一六・〇	面幅	一四・五
耳張	一八・五	面奥	一九・〇
胸奥	二四・〇	腹奥	二二・八
合掌手肘張	三九・五	裾張	四二・二
足先開外	三三・八	足先開内	二一・九

伝来

一、常膳寺観音堂本尊として伝来した。

保存状態

現在、この像の左手首から内側に垂下する天衣部材は、材の厚みや全体の大きさが天衣垂下部より薄く短い。元は千手観音像の合掌手肘先の左右いづれからか垂下する天衣であったか。

備考

一、実査　平成二年八月(山岸公基)。平成二四年六月二十三日・二十四日(山岸公基・加藤久雄・中澤静男)。九月七日・八日(山岸公基・中澤静男・宮武杏名・小松原絵里・新宮済・中澤哲也・古川真理奈・幸田早苗)。

〔参考文献〕

大矢邦宣「北奥の豊饒華麗な仏の世界―岩手の仏像」(『仏像を旅する　東北線』所収。平成二年一月、至文堂)

十一面観音菩薩立像

木造　素地　一軀　像高三二五・〇cm

岩手県陸前高田市小友町字上の坊二四　**常膳寺**

形状

本体　髻頂に仏面、髻中段に三面、地髪部に七面の計十一面を頭上に戴く。頭髪は髻および地髪部天冠台下を疎彫、他は平彫とする。鬢髪二束が耳をわたる。天冠台は紐二条の上に列弁をあらわし、その上層に正面で左右に雲形の附属する菊座、・両耳上に円形飾をあらわす。白毫相をあらわす。条帛・天衣を懸け、裙・腰布を着ける。裙・腰布はいずれも右前に打ち合わせ、裙は上縁を折り返す。胸飾・臂釧・腕釧を各つける。胸飾は概形被形。列弁文・紐・珠繋・紐・列弁文。正面中央に円形飾。臂釧は紐・珠繋・紐で外側に円形飾をつけ、帯一条の副帯をわたす。腕釧は列弁・紐二条・列弁とする。両足をやや開いて直立する。

台座　方座。

法量(単位cm)

本体

像高　三二五・〇(一丈八寸三分)

品質構造

本体

針葉樹か。寄木造。素地。

頭体別材。頭部は両耳上後を通る線で前後二材。体部は両体側を通る線で前後二材。頭部は前面では三道の最下縁で、背面では襟際で体部に差す。この頭体幹部材に髻、頭上面、両肩以下（共に肘、手首矧ぎ）、天衣垂下部、両足先を各矧ぐ。

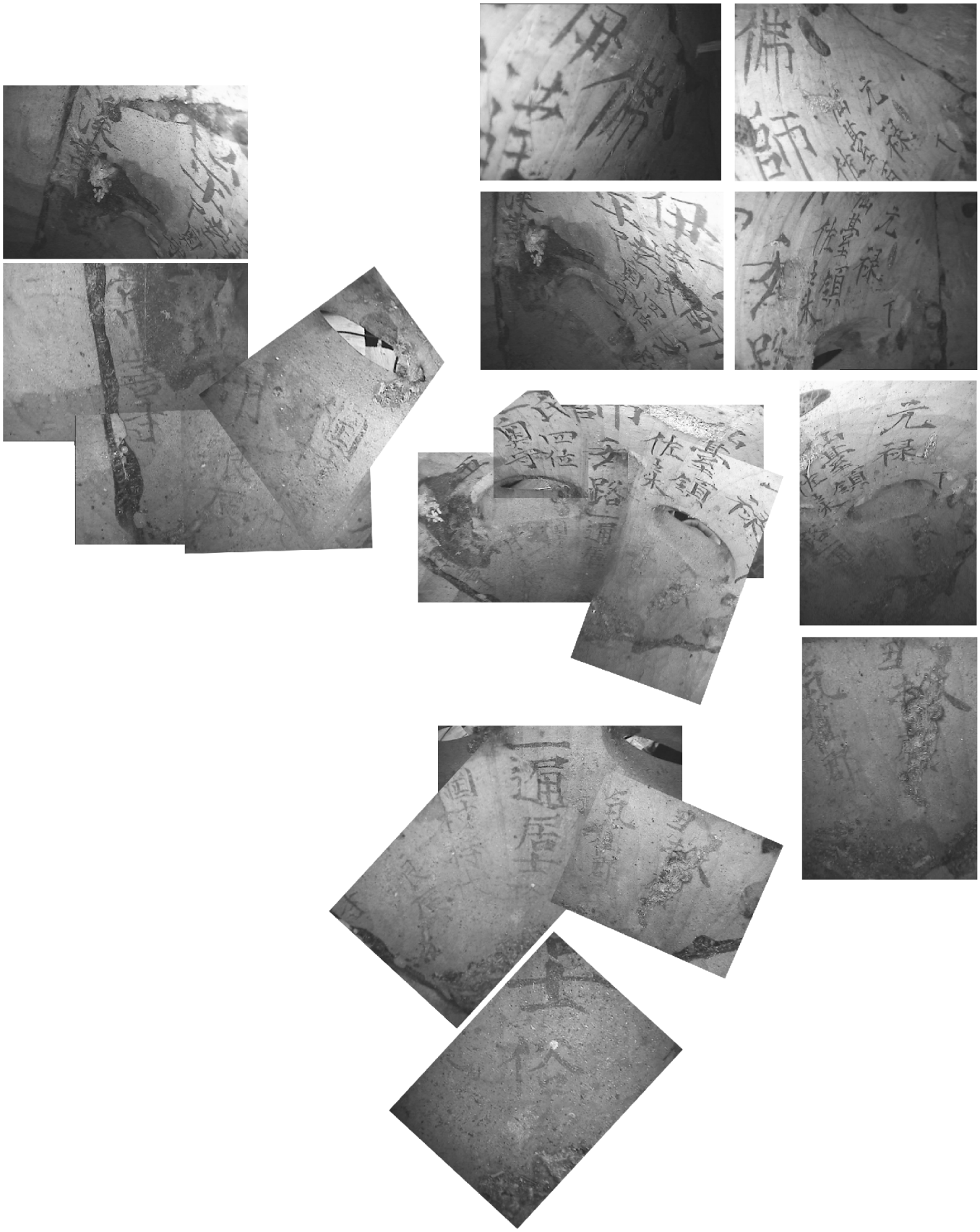
表面は素地。

台座　方座、前後二材。

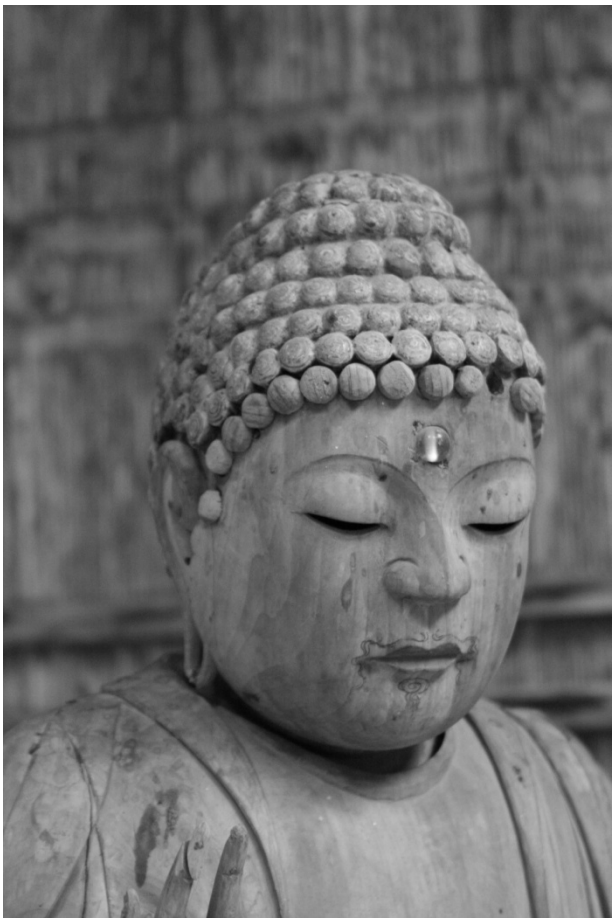
常膳寺　薬師如来立像　全身背面（背板を外す。左写真）・体部前面内銘記

常膳寺　薬師如来立像　背板内面銘記

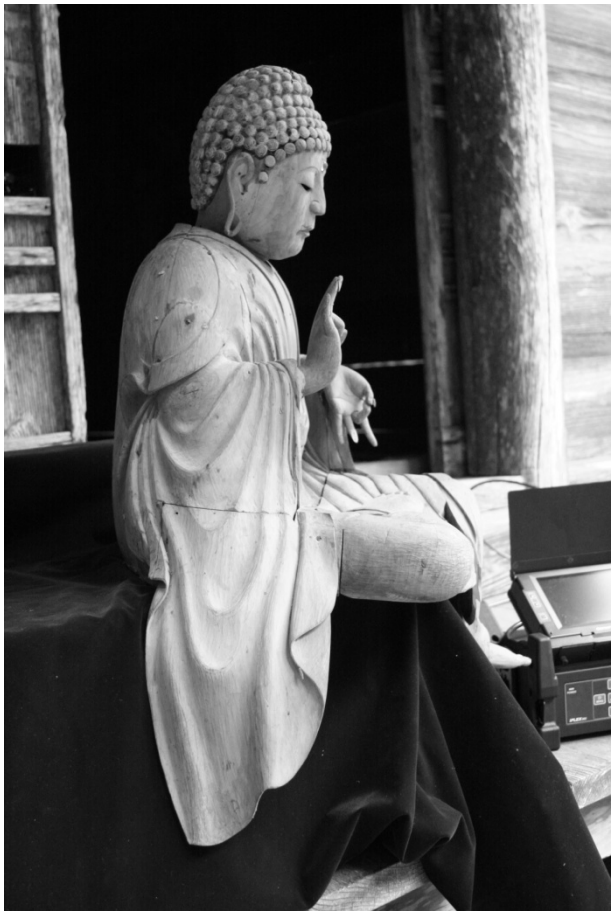
常膳寺　薬師如来立像　全像正面



常膳寺　阿弥陀如来坐像　頭部内銘記



常膳寺　阿弥陀如来坐像　頭部右斜側面（左写真）・頭部正面（右写真）



常膳寺　阿弥陀如来坐像　全身右斜側面（左写真）・全身右側面（右写真）

常膳寺　阿弥陀如来坐像　全身背右斜側面

常膳寺　阿弥陀如来坐像　全身正面

常膳寺　毘沙門天立像　頭部左斜側面（左写真）・頭部正面（右写真）

常膳寺　毘沙門天立像　邪鬼

常膳寺　毘沙門天立像　頭部左側面

常膳寺　毘沙門天立像　全身右側面（左写真）・全身左側面（右写真）

常膳寺　毘沙門天立像　全身背面（左写真）・全身左斜側面（右写真）

常膳寺　毘沙門天立像　全身正面

常膳寺　不動明王立像　頭部左斜側面（左写真）・頭部正面（右写真）

常膳寺　不動明王立像　頭部右側面（左写真）・頭部左側面（右写真）

常膳寺　不動明王立像　全身右側面（左写真）・全身左側面（右写真）

常膳寺　不動明王立像　全身背面（左写真）・左腕臂釧（右写真）

常膳寺　不動明王立像　全身正面

常膳寺　千手観音菩薩立像　頭部右斜側面（左写真）・頭部正面（右写真）

常膳寺　千手観音菩薩立像　頭部右側面（左写真）・頭部左側面（右写真）

常膳寺　千手観音菩薩立像　全身左斜側面

常膳寺　千手観音菩薩立像　全身正面（膝より上）

常膳寺　十一面観音菩薩立像　頭部正面（左写真）・頭部左側面（右写真）

常膳寺　十一面観音菩薩立像　左腕臂釧

常膳寺　十一面観音菩薩立像　全身正面

岩手県陸前高田市常膳寺
仏像調査報告書

2013 年 3 月

奈良教育大学

平成 26 年度 奈良教育大学
地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた
持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト

2012 年度－2014 年度 奈良教育大学 陸前高田市文化遺産調査報告書

平成 27 年 3 月 31 日

国立大学法人奈良教育大学
〒630-8528　奈良市高畑町
次世代教員養成センター　ＥＳＤ・教材開発領域
TEL・FAX　0742-27-9177

平成 27 年度 奈良教育大学
ＥＳＤを核とした教員養成の高度化プロジェクト
―教員養成・研修におけるＥＳＤモデルプログラムの開発と普及－

平成 27 年度 奈良教育大学 陸前高田市文化遺産調査報告書

平成 28 年 3 月 31 日

国立大学法人奈良教育大学
〒630-8528　奈良市高畑町
次世代教員養成センター　ＥＳＤ・教材開発領域
TEL・FAX　0742-27-9177